

坊っちゃん

夏目漱石





一

親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の一階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囁したからである。小使に負ぶさつて

帰つて來た時、おやじが大きな眼めをして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云つたから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰つて奇麗な刃を日に翳して、友達に見せていたら、一人が光る事は光るが切れそうもないと云つた。切れぬ事があるか、何でも切つてみせると受け合つた。そんなら君の指を切つてみろと注文したから、何だ指ぐらいこの通りだと右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かつたので、今だに親指は

手に付いている。しかし創痕きずあとは死ぬまで消えぬ。

坊っちゃん

庭を東へ二十歩に行き尽つくすと、南上がりにいささかばかりの菜園があつて、真中まんなかに栗くりの木が一本立つている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸せどを出て落ちた奴を拾つてきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋やましろやという質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎かんたろうという十三四の倅せがれが居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖くせに四つ目垣よつめ垣を乗りこえて、栗を盗みにくる。ある日の夕方折戸おりどの蔭かげに隠れて、とうとう勘太郎を捕つかまえてやつた。その時勘太郎は逃にげ路みちを失つ

て、一生懸命に飛びかかってきた。向うは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢の開いた頭を、こつちの胸へ宛ててぐいぐい押した拍子に、勘太郎の頭がすべつて、おれの裕の袖の中にはいった。邪魔になつて手が使えぬから、無暗に手を振つたら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡いた。しまいに苦しがつて袖の中から、おれの二の腕へ食い付いた。痛かつたから勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足搦をかけて向うへ倒してやつた。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分

の領分へ真逆様に落ちて、ぐうと云つた。勘太郎が落ちるときに、おれの祫の片袖がもげて、急に手が自由になつた。その晩母が山城屋に詫びに行つたついでに祫の片袖も取り返して來た。

この外いたずらは大分やつた。大工の兼公と肴屋の角をつれて、茂作の人参畠をあらした事がある。人参の芽が出揃わぬ処へ藁が一面に敷いてあつたから、その上で三人が半日相撲をとりつづけに取つたら、人参がみんな踏みつぶされてしまつた。古川の持つてゐる田圃の井戸を埋めて尻を持ち込まれた事もある。太い

孟宗の節を抜いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこいらの稻にみずがかかる仕掛けであつた。その時分はどんな仕掛け知らぬから、石や棒ちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ挿し込んで、水が出なくなつたのを見届けて、うちへ帰つて飯を食つていたら、古川が真赤になつて怒鳴り込んで来た。たしか罰金を出して済んだようである。

おやじはちつともおれを可愛がつてくれなかつた。母は兄ばかり聾罵にしていた。この兄はやに色が白くつて、芝居の真似をして女形になるのが好きだつた。

おれを見る度にこいつはどうせ碌なものにはならないと、おやじが云つた。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云つた。なるほど碌なものにはならない。ご覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役ちようえきに行かないで生きているばかりである。

母が病氣で死ぬにさんち二三日前台所で宙返りをしてへついの角で肋骨あばらほねを撲うつて大いに痛かつた。母が大層怒おこつて、お前のようなものの顔は見たくないと云うから、親類とまへ泊りに行つていた。するとどうとう死んだと云

う報知しらせが来た。そう早く死ぬとは思わなかつた。そんな大病なら、もう少し大人おとなしくすればよかつたと思つて帰つて來た。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれのために、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜くやしかつたから、兄の横つ面を張つて大変叱しかられた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮くらしてゐた。おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だめだ駄目だと口癖のようになつてゐた。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやじがあつたもんだ。兄は実業家になるとか云つてしまりに英語を勉強してい

た。元来女のような性分で、ずるいから、仲がよくなかつた。十日に一遍ぐらいの割で喧嘩けんかをしていた。ある時将棋しょうぎをさしたら卑怯ひきょうな待駒まちごまをして、人が困ると嬉うれしそうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手に在つた飛車ひけんを眉間みけんへ擲たたきつけてやつた。眉間が割れて少々血かみどりが出た。兄がおやじに言付いつけけた。おやじがおれを勘当かんどうすると言ひ出した。

その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘当されるつもりでいたら、十年来召し使つている清きよという下女が、泣きながらおやじに詫あやまつて、ようや

くおやじの怒りが解けた。それにもかかわらずあまりおやじを怖いとは思わなかつた。かえつてこの清と云う下女に氣の毒であつた。この下女はもと由緒のあるものだつたそつだが、瓦解がかいのときに零落れいらくして、つい奉公までするようになつたのだと聞いている。だから婆さんである。この婆さんがどういう因縁いんえんか、おれを非常に可愛がつてくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想あいそをつかした——おやじも年中持て余している——町内では乱暴者らんばうしゃの惡太郎と爪彈つまはじきをする——このおれを無暗に珍重ちんぢょうしてくれた。おれは到底人とうてい

に好かれる性^{たち}でないとあきらめていたから、他人から木の端^{はし}のように取り扱^{あつか}われるは何とも思わない、かえつてこの清のようにちやほやしてくれるので不審^{ふしん}に考えた。清は時々台所^{だいしょ}で人の居ない時に「あなたは真つ直^{すぐ}でよいご気性だ」と賞^ほめる事が時々あつた。しかしおれには清の云う意味が分からなかつた。好い気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろうと思つた。清がこんな事を云う度におれはお世辞^{きら}は嫌いだと答えるのが常であつた。すると婆さんはそれだから好いご気性ですと云つては、嬉しそうにおれの顔を

眺めている。自分の力でおれを製造して誇つてるよう
に見える。少々氣味がわるかつた。

母が死んでから清はいよいよおれを可愛がつた。
時々は小供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に
思つた。つまらない、廃^よせばいいのにと思つた。気の
毒だと思つた。それでも清は可愛がる。折々は自分の
小遣いで金鍔^{きんつば}や紅梅焼^{こうばいやき}を買つてくれる。寒い夜などは
ひそかに蕎麦粉^{そばこ}を仕入れておいて、いつの間にか寝て
いる枕元^{まくらもと}へ蕎麦湯を持つて来てくれる。時には
鍋焼餃^{なべやきうどん}さえ買ってくれた。ただ食い物ばかりではな

い。靴足袋くつたびももらつた。鉛筆えんぴつも貰つた、帳面も貰つた。これはずっと後の事であるが金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せと云つた訳ではない。向うで部屋へ持つて来てお小遣いがなくてお困りでしょう、お使いなさいと云つてくれたんだ。おれは無論入らないと云つたが、是非使えと云うから、借りておいた。実は大変嬉しかつた。その三円を蝦蟆口がまぐちへ入れて、懷落ふとこころへ入れたなり便所へ行つたら、す。ぽりと後架こうかの中へ落してしまつた。仕方がないから、のそのそ出てきて実はこれこれだと清に話したところが、清は早速竹の

棒を搜^{さが}して来て、取つて上げますと云つた。しばらくすると井戸端^{いどばた}でざあざあ音がするから、出てみたら竹の先へ蝦蟇口の紐^{ひも}を引き懸けたのを水で洗つていた。それから口を開けて壱円札^{いちえんさつ}を改めたら茶色になつて模様が消えかかっていた。清は火鉢で乾かして、これでいいでしようと出した。ちよつとかいでみて臭いやと云つたら、それじゃお出しなさい、取り換^かえて来て上げますからと、どこでどう胡魔化^{ごまか}したか札の代りに銀貨を三円持つて来た。この三円は何に使つたか忘れてしまつた。今に返すよと云つたぎり、返さない。今と

なつては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物をくれる時には必ずおやじも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌いだと云つて人に隠れて自分だけ得をするほど嫌いな事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隠して清から菓子かしや色鉛筆を貰いたくはない。なぜ、おれ一人にくれて、兄さんには遣らないのかと清に聞く事がある。すると清は澄すましたものでお兄様あにいさまはお父様とうさまが買つてお上げなさるから構いませんと云う。これは不公平である。おやじは頑固がんこだけれども、そんな依怙贋負えひいきはせぬ男だ。しかし清の眼から

見るとそう見えるのだろう。全く愛に溺れていたに違いない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単にこればかりではない。巣負目は恐ろしいものだ。清はおれをもつて将来立身出世して立派なものになると思い込んでいた。その癖勉強をする兄は色ばかり白くつて、とても役には立たないと一人できめてしまつた。こんな婆さんに逢つては叶わない。自分の好きなものは必ずえらい人物になつて、嫌いなひとはきっと落ち振れるものと信じている。おれはその時から別段何になると云う了見もなかつた。し

かし清がなるなると云うものだから、やつぱり何かに成れるんだろうと思つていて。今から考えると馬鹿馬鹿しい。ある時などは清にどんなものになるだろうと聞いてみた事がある。ところが清にも別段の考えもなかつたようだ。ただ手車てぐるまへ乗つて、立派な玄関げんかんのある家をこしらえるに相違ないと云つた。

それから清はおれがうちでも持つて独立したら、一所になる氣でいた。どうか置いて下さいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも何だかうちが持てるような気がして、うん置いてやると返事だけはしておいた。と

ころがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはどこがお好き、麹町こうじまちですか麻布あざぶですか、お庭へぶらんこをおこしらえ遊ばせ、西洋間ならは一つでたくさんですなどと勝手な計画を独りで並べていた。その時は家なんか欲しくも何ともなかつた。西洋館にほんだても日本建にほんだても全く不^用であつたから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答えた。すると、あなたは欲がすくなくつて、心が奇麗だと云つてまた賞めた。清は何と云つても貰めてくれる。

母が死んでから五六年の間はこの状態で暮してい

た。おやじには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を貰う、時々賞められる。別に望みもない。これでたくさんだと思つていた。ほかの小供も一概にこんなものだろうと思つていた。ただ清が何かにつけて、あなたはお可哀想だ、不仕合だと無暗に云うものだから、それじや可哀想で不仕合せなんだろうと思つた。その外に苦になる事は少しもなかつた。ただおやじが小遣いをくれないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやじも卒中で亡くなつた。その年の四月におれはある私立の中学校を卒

業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄は何とか会社の九州の支店に口があつて行かなければならん。おれは東京でまだ学問をしなければならない。兄は家を売つて財産を片付けて任地へ出立しゆつたつすると云い出した。おれはどうでもするがよからうと返事をした。どうせ兄の厄介やっかいになる気はない。世話をしてくれるにしたところで、喧嘩をするから、向うでも何とか云い出すに極きまつている。なまじい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならない。牛乳配達をしても食つてられると覺悟かくごをした。兄はそれから道具屋を呼

んで来て、先祖代々の瓦落多を一束三文に売つた。家屋敷はある人の周旋である金満家に譲つた。この方は大分金になつたようだが、詳しい事は一向知らぬ。おれは一ヶ月以前から、しばらく前途の方向のつくまで神田の小川町おがわまちへ下宿していた。清は十何年居たうちが人手に渡るのを大いに残念がつたが、自分のものでないから、仕様がなかつた。あなたがもう少し年をとつていらつしやれば、ここがご相続が出来ますものをとしきりに口説いていた。もう少し年をとつて相続が出来るものなら、今でも相続が出来るはずだ。婆さんは

何も知らないから年さえ取れば兄の家がもらえると信じてゐる。

兄とおれはかように分れたが、困つたのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくつ付いて九州下りくんだりまで出掛けける気は毛頭なし、と云つてこの時のおれは四畳半よじようはんの安下宿こもに籠つて、それすらもいざとなれば直ちに引き払わねばならぬ始末だ。どうする事も出来ん。清に聞いてみた。どこかへ奉公でもする氣かねと云つたらあなたがおうちを持つて、奥おくさまをお貴いになるまでは、仕方がないか

ら、甥の厄介になりましょとようやく決心した返事をした。この甥は裁判所の書記でまず今日には差支えなく暮していたから、今まで清に来るなら来いと二三度勧めたのだが、清はたとい下女奉公はしても年來住み馴れた家の方がいいと云つて応じなかつた。しかし今の場合知らぬ屋敷へ奉公易えをして入らぬ氣兼を仕直すより、甥の厄介になる方がましだと思つたのだろう。それにしても早くうちを持ての、妻を貰えの、来て世話をするのと云う。親身の甥よりも他人のおれの方が好きなのだろう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本にして商買しょうばいをするなり、学資にして勉強をするなり、どうでも随意すいいに使うがいい、その代りあとは構わないと云つた。兄にしては感心なやり方だ、何の六百円ぐらい貰わんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊たんぱくな処置が気に入つたから、礼を云つて貰つておいた。兄はそれから五十円出してこれをついでに清に渡してくれと云つたから、異議なく引き受けた。二日立つて新橋の停車場ていしゃじょうで分れたぎり兄にはその後一遍も逢わない。

おれは六百円の使用法について寝ながら考えた。商買をしたつて面倒くさくて旨く出来るものじやない、ことに六百円の金で商買らしい商買がやれる訳でもなかろう。よしやれるとしても、今のようじや人の前へ出て教育を受けたと威張れないからつまり損になるばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割つて一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強が出来る。三年間一生懸命にやれば何か出来る。それからどこの学校へはいろうと考えたが、学問は生来どれもこれも好きでない。

ことに語学とか文学とか云うものは真平^{まっぴら}ご免だ。新体詩などと来ては二十行あるうちで一行も分らない。どうせ嫌いなものなら何をやつても同じ事だと思つたが、幸い物理学校の前を通り掛つたら生徒募集の広告が出ていたから、何も縁だと思つて規則書をもらつてすぐ入学の手続きをしてしまつた。今考えるとこれも親譲りの無鉄砲から起つた失策だ。

三年間まあ人並^{ひとなみ}に勉強はしたが別段たちのいい方でもないから、席順はいつでも下から勘定する方が便利であつた。しかし不思議なもので、三年立つたらどう

とう卒業してしまつた。自分でも可笑しいと思つたが苦情を云う訳もないから大人しく卒業しておいた。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だろうと思つて、出掛けて行つたら、四国辺のある中学校で数学の教師が入る。月給は四十円だが、行つてはどうだという相談である。おれは三年間学問はしたが実を云うと教師になる気も、田舎いなかへ行く考えも何もなかつた。もつとも教師以外に何をしようと云うあってもなかつたから、この相談を受けた時、行きましょうと即席そくせきに返事をした。これも親譲りの無鉄砲が祟たたつ

たのである。

引き受けた以上は赴任せねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居ちつきよして小言はただの一度も聞いた事がない。喧嘩ひかくてきのんきよもせずに済んだ。おれの生涯のうちでは比較的呑氣のんきな時節であつた。しかしこうなると四畳半も引き扱わなければならん。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉かまくらへ遠足した時ばかりである。今度は鎌倉どころではない。大変な遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると海浜で針の先ほど小さく見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、

どんな人が住んでるか分らん。分らんでも困らない。
心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もつとも少々
面倒臭い。

家を畳んでからも清の所へは折々行つた。清の甥と
いうのは存外結構な人である。おれが行くたびに、居
りさえすれば、何くれと款待もてなしてくれた。清はおれ
を前へ置いて、いろいろおれの自慢じまんを甥に聞かせた。
今に学校を卒業すると麹町辺へ屋敷を買つて役所へ通
うのだなどと吹聴ふいちょうした事もある。独りで極めてき一人で
喋舌しゃべるから、こつちは困こまつて顔を赤くした。それも

一度や二度ではない。折々おれが小さい時寝小便をした事まで持ち出すには閉口した。甥は何と思つて清の自慢を聞いていたか分らぬ。ただ清は昔風の女だから、自分とおれの関係を封建時代の主従のように考えていた。自分の主人なら甥のためにも主人に相違ないと合点したものらしい。甥こそいい面の皮だ。

いよいよ約束が極まつて、もう立つと云う三日前に清を尋ねたら、北向きの三畳に風邪を引いて寝ていた。おれの来たのを見て起き直るが早いか、坊っちゃんいつも家をお持ちなさいますと聞いた。卒業さえすれば金

が自然とポツケツトの中に湧いて来ると思つてゐる。そんなにえらい人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのはいよいよ馬鹿氣てゐる。おれは単簡に当分うちは持たない。田舎へ行くんだと云つたら、非常に失望した容子で、胡麻塩の鬚の乱れをしきりに撫でた。あまり氣の毒だから「行く事は行くがじき帰る。来年の夏休みにはきっと帰る」と慰めてやつた。それでも妙な顔をしているから「何を見やげに買って来てやろう、何が欲しい」と聞いてみたら「越後の笹飴が食べたい」と云つた。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一方

角が違う。「おれの行く田舎には笹飴はなさそうだ」と云つて聞かしたら「そんなら、どつちの見当です」と聞き返した。「西の方だよ」と云うと「箱根のはこねのさきですか手前ですか」と問う。随分持てあました。

出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。来る途中とちゅう中小間物屋で買つて来た歯磨はみがきと楊子ようじと手拭てぬぐいをズックの革鞄かばんに入れてくれた。そんな物は入らないと云つてもなかなか承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれの顔をじつと見て「もうお別れになるかも知れ

ません。随分ご機嫌よう」と小さな声で云つた。目に涙が一杯たまつてゐる。おれは泣かなかつた。しかしもう少しで泣くところであつた。汽車がよっぽど動き出してから、もう大丈夫だらうと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、やつぱり立つていた。何だか大変小さく見えた。

二

ふうと云つて汽船がとまると、船が岸を離れて、漕ぎ

寄せて來た。船頭は真つ裸に赤ふんどしをしめている。
 野蛮な所だ。もつともこの熱さでは着物はきられまい。
 日が強いので水がやに光る。見つめていても眼がくら
 む。事務員に聞いてみるとおれはここへ降りるのだそ
 うだ。見るところでは大森おおもりぐらいな漁村だ。人を馬鹿ばか
 にしていらあ、こんな所に我慢がまんが出来るものかと思つ
 たが仕方がない。威勢いせよく一番に飛び込んだ。続づい
 て五六人は乗つたろう。外に大きな箱はこを四つばかり積
 み込んで赤ふんは岸へ漕ぎ戻もどして來た。陸へ着いた時
 も、いの一番に飛び上がつて、いきなり、磯いそに立つて

いた鼻たれ小僧こぞうをつらまえて中学校はどこだと聞いた。小僧はほんやりして、知らんがの、と云つた。気の利かぬ田舎いなかものだ。猫ねこの額ほどな町内の癖くせに、中学校のありかも知らぬ奴やつがあるものか。ところへ妙な筒つつっぽうを着た男がきて、こつちへ來いと云いうから、尾ついて行つたら、港屋こうやとか云いう宿屋しゆやへ連れて來た。やな女めのが声を揃そろえてお上うがりなさいと云いうので、上がるのがいやになつた。門口もんぐへ立つたなり中学校を教えると云いつたら、中学校はこれから汽車で二里ばかり行かなくつちゃいけないと聞いて、なお上がるのがいやに

なつた。おれは、筒っぽうを着た男から、おれの革鞄を二つ引きたくつて、のそのそあるき出した。宿屋のものは変な顔をしていた。

停車場はすぐ知れた。切符も訳なく買った。乗り込んでみるとマツチ箱のような汽車だ。ごろごろと五分ばかり動いたと思つたら、もう降りなければならない。道理で切符が安いと思つた。たつた三銭である。それから車を傭つて、中学校へ来たら、もう放課後で誰も居ない。宿直はちょっと用達に出たと小使が教えた。随分気楽な宿直がいるものだ。校長でも尋ねようかと

思つたが、草臥くたびれたから、車に乗つて宿屋へ連れて行けと車夫に云い付けた。車夫は威勢よく山城屋やましろやと云ううちへ横付けにした。山城屋とは質屋の勘太郎かんたろうの屋号と同じだからちよつと面白く思つた。

何だか二階の楷子段はしごだんの下の暗い部屋へ案内した。熱くつて居られやしない。こんな部屋はいやだと云つたらあいにくみんな塞ふさがつておりますからと云いながら革鞄を抛ほうり出したまま出て行つた。仕方がないから部屋の中へはいって汗あせをかいて我慢がまんしていた。やがて湯に入れと云うから、ざぶりと飛び込んで、すぐ上がつ

た。帰りがけに覗いてみると涼しそうな部屋がたくさん空いている。失敬な奴だ。嘘をつきやあがつた。それから下女が膳を持つて來た。部屋は熱つかつたが、飯は下宿のよりも大分旨かつた。給仕をしながら下女がどちらからおいでになりましたと聞くから、東京から來たと答えた。すると東京はよい所でございましたと云つたから当たり前だと答えてやつた。膳を下げた下女が台所へいつた時分、大きな笑い声が聞えた。くだらないから、すぐ寝たが、なかなか寝られない。熱いばかりではない。騒々しい。下宿の五倍ぐらいやか

ましい。うとうとしたら清の夢を見た。清が越後の
 筒餌ささあめを筒ぐるみ、むしゃむしゃ食つてはいる。筒は毒だ
 からよしたらよからうと云うと、いえこの筒がお薬で
 ござりますと云つて旨そうに食つてはいる。おれがあき
 れ返つて大きな口を開いてハハハハと笑つたら眼が覚
 めた。下女が雨戸を明けてはいる。相變らず空の底が突
 き抜けたような天氣だ。

道中どうちゅうをしたたら茶代をやるものだと聞いていた。茶代
 をやらないと粗末そまつに取り扱われると聞いていた。こん
 な、狭くて暗い部屋へ押し込めるのも茶代をやらない

せいだろう。見すばらしい服装をして、ズックの革鞄と毛繻子の蝙蝠傘を提げるからだろう。田舎者の癖に人を見括つたな。一番茶代をやつて驚かしてやろう。おれはこれでも学資のあまりを三十円ほど懐に入れて東京を出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まだ十四円ほどある。みんなやつたつてこれからは月給を貰うんだから構わない。田舎者はしみつたれだから五円もやれば驚ろいて眼を廻すに極つている。どうするか見ると済して顔を洗つて、部屋へ帰つて待つてると、夕べの下女が膳を持つて來た。盆

を持つて給仕をしながら、やににやにやに笑つてる。失敬な奴だ。顔のなかをお祭りでも通りやしまいし。これでもこの下女の面よりよっぽど上等だ。飯を済ましてからにしようと思つていたが、癪に障つたから、中途で五円札さつ一枚まい出して、あとでこれを帳場へ持つて行けと云つたら、下女は変な顔かほをしていた。それから飯を済ましてすぐ学校へ出懸けた。靴くつは磨みがいてなかつた。

学校は昨日車で乗りつけたから、大概たいがいの見当は分つてゐる。四つ角を二三度曲がつたらすぐ門の前へ出た。門から玄関までは御影石みかげいしで敷きつめてある。きのうこ

の敷石の上を車でがらがらと通つた時は、無暗に仰山な音がするので少し弱つた。途中から小倉の制服を着た生徒にたくさん逢つたが、みんなこの門をはいつて行く。中にはおれより背が高くて強そうのが居る。あんな奴を教えるのかと思つたら何だか氣味が悪くなつた。名刺を出したら校長室へ通した。校長は薄鬚のある、色の黒い、目の大きな狸のような男である。やにもつたいぶつていた。まあ精出して勉強してくれと云つて、恭しく大きな印の捺つた、辞令を渡した。この辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛り込んで

しまつた。校長は今に職員に紹介してやるから、一々その人にこの辞令を見せるんだと云つて聞かした。余計な手数だ。そんな面倒めんどうな事をするよりこの辞令を三日間職員室へ張り付ける方がましだ。

教員が控所ひかえじょへ揃うには一時間目の喇叭らっぽが鳴らなくてはならぬ。大分時間がある。校長は時計を出して見て、追々ゆるりと話すつもりだが、まず大体の事を呑み込んでおいてもらおうと云つて、それから教育の精神について長いお談義を聞かした。おれは無論いい加減に聞いていたが、途中からこれは飛んだ所へ来たと思つ

た。校長の云うようにはとても出来ない。おれみたよ
うな無鉄砲なものをつけまえて、生徒の模範になれの、
一校の師表と仰がれなくてはいかんの、学問以外に個
人の徳化を及ぼさなくては教育者になれないの、と無
暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十円
で遙々こんな田舎へくるもんか。人間は大概似たもん
だ。腹が立てば喧嘩の一つぐらいは誰でもするだろう
と思つてたが、この様子じゃめつたに口も聞けない、
散歩も出来ない。そんなむずかしい役なら雇う前にこ
れこれだと話すがいい。おれは嘘をつくのが嫌いだか

ら、仕方がない、だまされて来たのだとあきらめて、
 思い切りよく、ここで断わって帰つちまおうと思つた。
 宿屋へ五円やつたから財布の中には九円なにがししか
 ない。九円じや東京までは帰れない。茶代なんかやら
 なければよかつた。惜しい事をした。しかし九円だつ
 て、どうかならない事はない。旅費は足りなくつても
 嘘をつくよりましだと思つて、到底あなたのおつしや
 る通りにや、出来ません、この辞令は返しますと云つ
 たら、校長は狸のような眼をぱちつかせておれの顔を
 見ていた。やがて、今のはただ希望である、あなたが

希望通り出来ないのはよく知っているから心配しなくつてもいいと云いながら笑つた。そのくらいよく知つてゐるなら、始めから威嚇おどきさなければいいのに。

そう、こうする内に喇叭が鳴つた。教場の方が急にがやがやする。もう教員も控所へ揃いましたらうと云うから、校長に尾いて教員控所へはいつた。広い細長い部屋の周囲に机を並べてみんな腰こしをかけている。おれがはいつたのを見て、みんな申し合せたようにおれの顔を見た。見世物じやあるまいし。それから申し付けられた通り一人一人の前へ行つて辞令を出して挨拶あいさつ

をした。大概是椅子を離れて腰をかがめるばかりであつたが、念の入つたのは差し出した辞令を受け取つて一応拝見をしてそれを恭^{うやうや}しく返却^{へんきやく}した。まるで宮芝居の真似^{まね}だ。十五人目に体操^{たいそう}の教師へと廻つて来た時には、同じ事を何返もやるので少々じれつたくなつた。向^{むか}うは一度で済む。こつちは同じ所作^{しょさ}を十五返繰り返している。少しはひとの了見^{りょうけん}も察してみるがいい。

挨拶をしたうちに教頭のなにがしと云うのが居た。これは文学士だそうだ。文学士と云えれば大学の卒業生だからえらい人なんだろう。妙^{みょう}に女のような優しい声

を出す人だつた。もつとも驚いたのはこの暑いのにフ
ランネルの襯衣しゃぎを着てゐる。いくらか薄うすい地には相違
なくつても暑いには極つてゐる。文学士だけにご苦労
千万な服装なりをしたもんだ。しかもそれが赤シャツだか
ら人を馬鹿ばかにしてゐる。あとから聞いたらこの男は年
が年中赤シャツを着るんだそうだ。妙な病氣があつた
者だ。当人の説明では赤は身体からだに薬になるから、衛生
のためにわざわざ逃あつらえるんだそつたが、入らざる心
配だ。そんならついでに着物はかまも袴はかまも赤にすればいい。
それから英語の教師に古賀こがとか云う大変顔色の悪い

男が居た。大概顔の蒼い人は瘠せてるもんだがこの男は蒼くふくれていてる。昔むかし小学校へ行く時分、浅井の民さんと云う子が同級生にあつたが、この浅井のおやじがやはり、こんな色つやだった。浅井は百姓ひやくしょだから、百姓になるとあんな顔になるかと清に聞いてみたら、そうじやありません、あの人はうらなりの唐茄子とうなすばかり食べるから、蒼くふくれるんですけど教えてくれた。それ以来蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食つた酬むくいだと思う。この英語の教師もうらなりばかり食つてるに違ちがいない。もつともうらなりとは何

の事か今もつて知らない。清に聞いてみた事はあるが、清は笑つて答えなかつた。大方清も知らないんだろう。それからおれと同じ数学の教師に堀田ほったというのが居た。これは遅しい毬栗坊主いがぐりぼうずで、叢山えいざんの悪僧あくそうと云うべき面構づらがまえである。人が町寧ていねいに辞令を見せたら見向きもせず、やあ君が新任の人か、ちと遊びに来きたま給えアハハハと云つた。何がアハハハだ。そんな礼儀れいぎを心得ぬ奴の所へ誰が遊びに行くものか。おれはこの時からこの坊主に山嵐やまあらしという渾名あだなをつけてやつた。漢学の先生はさすがに堅かたいものだ。昨日お着きで、さぞお疲れで、それ

でもう授業をお始めて、大分ご励精で、——とのべつに弁じたのは愛嬌あいきょうのあるお爺じいさんだ。画学の教師は全く芸人風だ。べらべらした透綾すきやの羽織を着て、扇子せんすをぱちつかせて、お国はどうちらでげす、え？ 東京？ そりや嬉しい、お仲間が出来て……私もこれで江戸えどっ子ですと云つた。こんなのが江戸えどっ子なら江戸えどには生れたくないもんだと心中に考えた。そのほか一人一人についてこんな事を書けばいくらでもある。しかし際限がないからやめる。

挨拶が一通り済んだら、校長が今日はもう引き取つ

てもいい、もつとも授業上の事は数学の主任と打ち合せをしておいて、明後日^{あさって}から課業を始めてくれと云つた。数学の主任は誰かと聞いてみたら例の山嵐であつた。忌々しい、こいつの下に働くのかおやおやと失望した。山嵐は「おい君どこに宿^{とま}つてるか、山城屋か、うん、今に行つて相談する」と云い残して白墨^{はくぼく}を持つて教場へ出て行つた。主任の癖に向うから来て相談するなんて不見識な男だ。しかし呼び付けるよりは感心だ。

それから学校の門を出て、すぐ宿へ帰ろうと思つた

が、帰つたつて仕方がないから、少し町を散歩してや
 ろうと思つて、無暗に足の向く方をあるき散らした。
 県庁も見た。古い前世紀の建築である。兵営も見た。
あざぶ
 麻布の聯隊より立派でない。大通りも見た。神楽坂を
 半分に狭くしたぐらいな道幅みちはばで町並まちなみはあれより落ち
 る。二十五万石の城下だつて高の知れたものだ。こん
 な所に住んでご城下だなどと威張いはつてる人間は可哀想かわいそう
 なものだと考へながらくると、いつしか山城屋の前に
 出た。広いようでも狭いものだ。これで大抵たいていは見尽みつくし
 たのだろう。帰つて飯でも食おうと門口をはいつた。

帳場に坐すわつっていたかみさんが、おれの顔を見ると急に飛び出してきてお帰り……と板の間へ頭をつけた。靴くつを脱ぬいで上あがると、お座敷ざしきがあきましたからと下しも女めが二階へ案内あんないをした。十五畳じようの表二階で大きな床とこの間まがついている。おれは生れてからまだこんな立派な座敷ざしきへはいった事はない。この後いつはいれるか分わらないから、洋服を脱いで浴衣ゆかた一枚になつて座敷の真中まんなかへ大の字に寝てみた。いい心持ちである。

昼飯ひるまを食つてから早速清きよへ手紙てうじをかいてやつた。おれは文章がまづい上うに字じを知らないから手紙てうじを書くの

が大嫌いだ。またやる所もない。しかし清は心配しているだろう。難船して死にやしないかななどと思つちゃ困るから、奮発ふんぱつして長いのを書いてやつた。その文句はこうである。

「きのう着いた。つまらん所だ。十五畳の座敷に寝ている。宿屋へ茶代を五円やつた。かみさんが頭を板の間へすりつけた。夕べは寝られなかつた。清が笹飴を笹ごと食う夢を見た。来年の夏は帰る。今日学校へ行つてみんなにあだなをつけてやつた。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学

はのだいこ。今にいろいろな事を書いてやる。さようなら」

手紙をかいてしまつたら、いい心持ちになつて眠氣ねむけがさしたから、最前のように座敷の真中へのびのびと大の字に寝た。今度は夢も何も見ないでぐつすり寝た。この部屋かいと大きな声がするので目が覚めたら、山嵐がはいつて來た。最前は失敬、君の受持ちは……と人が起き上がるや否や談判を開かれたので大いに狼狽ろうばいした。受持ちを聞いてみると別段むずかしい事もなさうだから承知した。このくらいの事なら、明後日は

愚おろか、明日あしたから始めろと云つたつて驚おどろかない。授業上じゅぎょうじょうの打ち合せが済んだら、君きみはいつまでこんな宿屋しゆやに居ゐるつもりでもあるまい、僕ぼくがいい下宿しゆうしゆを周旋しゅうえんしてやるから移りたまえ。外ほかのものでは承知しようちしないが僕ぼくが話せばすぐ出来る。早い方がいいから、今日見て、あす移つて、あさつてから学校がっこうへ行けば極きわりがいいと一人で呑のみ込んでいる。なるほど十五畳敷じゅうごひょうふきにいつまで居る訳わけにも行くまい。月給げききゅうをみんな宿料しゆくりょうに払はらつても追おつかないかもしだれぬ。五円の茶代ふんぱつを奮發ふんぱつしてすぐ移るのはちと残念ざんねんだが、どうせ移る者なら、早く引き越こして落ち

付く方が便利だから、そのところはよろしく山嵐に頼む事にした。すると山嵐はともかくもいつしょに来てみろと云うから、行つた。町はずれの岡の中腹にある家で至極閑静だ。主人は骨董を売買するいか銀と云う男で、女房は亭主よりも四つばかり年嵩の女だ。中学校に居た時ウイツチと云う言葉を習つた事があるがこの女房はまさにウイツチに似ている。ウイツチだつて人の女房だから構わない。とうとう明日から引き移る事にした。帰りに山嵐は通町で氷水を一杯奢つた。学校で逢つた時はやに横風な失敬な奴だと思つたが、

こんなにいろいろ世話をしてくれるところを見ると、
わるい男でもなさそうだ。ただおれと同じようにせつ
かちでかんしゃくもち肝癪持らしい。あとで聞いたらこの男が一番生
徒に人望があるのでそうだ。

三

いよいよ学校へ出た。初めて教場へはいって高い所
へ乗つた時は、何だか変だつた。講釈をしながら、お
れでも先生が勤まるのかと思つた。生徒はやかましい。

時々団抜けた大きな声で先生と云う。先生には応えた。
 今まで物理学校で毎日先生先生と呼びつけていたが、
 先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥の差だ。何だか足
 の裏がむずむずする。おれは卑怯な人間ではない。
 瞬病な男でもないが、惜しい事に胆力が欠けている。
 先生と大きな声をされると、腹の減った時に丸の内で
 午砲を聞いたような気がする。最初の一時間は何だか
 いい加減にやつてしまつた。しかし別段困つた質問も
 掛けられずに済んだ。控所へ帰つて来たら、山嵐がど
 うだいと聞いた。うんと単簡に返事をしたら山嵐は安

心したらしかつた。

坊っちゃん

二時間目に白墨はくぼくを持つて控所を出た時には何だか敵地へ乗り込むような気がした。教場へ出ると今度の組は前より大きな奴やつばかりである。おれは江戸えどっ子で華奢きやしやに小作りに出来ているから、どうも高い所へ上がつても押おしが利かない。喧嘩けんかなら相撲すもう取とりとでもやつてみせるが、こんな大僧おおぞうを四十人も前へ並ならべて、ただ一枚の舌まをたたいて恐縮きょうしゆくさせる手際はない。しかしこんな田舎者いなかものに弱身を見せると思つたから、なるべく大きな声をして、少々巻き舌で講釈してやつ

た。最初のうちは、生徒も烟に捲かれてぼんやりして
いたから、それ見るとますます得意になつて、べらん
めい調を用いてたら、一番前の列の真中に居た、一番
強そうな奴が、いきなり起立して先生と云う。そら來
たと思いながら、何だと聞いたら、「あまり早くて分
からんけれ、もちつと、ゆるゆる遣やつて、おくれんか
な、もし」と云つた。おくれんかな、もしは生温なまぬるい
言葉だ。早過ぎるなら、ゆつくり云つてやるが、おれ
は江戸つ子だから君等きみらの言葉は使えない、分わからなければ、
分るまで待つていいと答えてやつた。この調

子で二時間目は思つたより、うまく行つた。ただ帰りがけに生徒の一人がちよつとこの問題を解釈をしておくれんかな、もし、と出来そうもない幾何の問題を持つて逼つたには冷汗^{ひやあせ}を流した。仕方がないから何だか分らない、この次教えてやると急いで引き揚げたら、生徒がわあと囁^{はや}した。その中に出来ん出来んと云う声が聞える。籠棒^{べらぼう}め、先生だつて、出来ないのは当たり前だ。出来ないのを出来ないと云うのに不思議があるもんか。そんなものが出来るくらいなら四十円でこんな田舎へくるもんかと控所へ帰つて來た。今度はどうだと

また山嵐が聞いた。うんと云つたが、うんだけでは気が済まなかつたから、この学校の生徒は分らずやだなと云つてやつた。山嵐は妙な顔をしていた。

三時間目も、四時間目も昼過ぎの一時間も大同小異であつた。最初の日に出た級は、いずれも少々ずつ失敗した。教師ははたで見るほど樂じやないと思つた。授業はひと通り済んだが、まだ帰れない、三時までぽつ然として待つてなくてはならん。三時になると、受持級の生徒が自分の教室を掃除して報知しらせにくるから検分をするんだそうだ。それから、出席簿しゆつせきほを一応調べて

ようやくお暇^{ひま}が出る。いくら月給で買われた身体^{からだ}だつて、あいた時間まで学校へ縛りつけて机と睨めつくるをさせるなんて法があるものか。しかしほかの連中はみんな大人^{おとな}しくご規則通りやつてるから新参のおればかり、だだを捏ねるのもよろしくないと思つて我慢していた。帰りがけに、君何でもかんでも三時^{すぎ}過まで学校にいさせるのは愚^{おろか}だぜと山嵐に訴えたら、山嵐はそうさアハハハと笑つたが、あとから眞面目^{まじめ}になつて、君あまり学校の不平を云うと、いかんぜ。云うなら僕^{ぼく}だけに話せ、随分妙な人も居るからなと忠告がましい

事を云つた。四つ角で分れたから詳くわしい事は聞くひま
がなかつた。

それからうちへ帰つてくると、宿の亭主ていしゅがお茶を入れましよちそうと云つてやつて来る。お茶を入れると云うからご馳走ちそをするのかと思うと、おれの茶を遠慮なく入れて自分が飲むのだ。この様子では留守中るすちゅうも勝手にお茶を入れましよひとりうを一人で履行りきょうして いるかも知れない。亭主が云うには手前は書画骨董しょがこつとうがすきで、どうと
うこんな商買を内々で始めるようになりました。あなたもお見受け申すところ大分ご風流でいらつしやるら

しい。ちと道楽にお始めなすつてはいかがですと、飛
 んでもない勧誘をやる。二年前ある人の使に帝国ホテ
 ルへ行つた時は錠前直しと間違えられた事がある。
 ケツトを被つて、鎌倉の大仏を見物した時は車屋から
 親方と云われた。その外今日まで見損わた事は随分
 あるが、まだおれをつらまえて大分ご風流でいらつ
 しやると云つたものはない。大抵はなりや様子でも分
 る。風流人なんていうものは、画を見ても、頭巾を被る
 か短冊を持つてるものだ。このおれを風流人だなどと
 真面目に云うのはただの曲者じやない。おれはそんな

呑氣な隠居のやるような事は嫌いだと云つたら、亭主はへへへへと笑いながら、いえ始めから好きなものは、どなたもございませんが、いつたんこの道にはいるとなかなか出られませんと一人で茶を注いで妙な手付をして飲んでいる。実はゆうべ茶を買つてくれと頼んでおいたのだが、こんな苦い濃い茶はいやだ。一杯飲むと胃に答えるような気がする。今度からもつと苦くないのを買つてくれと云つたら、かしこまりましたとまた一杯しほつて飲んだ。人の茶だと思つて無暗に飲む奴だ。主人が引き下がつてから、明日の下読みをしてす

ぐ寝ねてしまつた。

坊っちゃん

それから毎日毎日学校へ出ては規則通り働く、毎日毎日帰つて来ると主人がお茶を入れましょと出でくる。一週間ばかりしたら学校の様子もひと通りは飲み込めたし、宿の夫婦の人物も大概たいがいは分つた。ほかの教師に聞いてみると辞令を受けて一週間から一ヶ月ぐらいいの間は自分の評判がいいだろうか、悪いわうか非常に気に掛かるそうであるが、おれは一向そんな感じはなかつた。教場で折々しくじるとその時だけはやな気持ちだが三十分ばかり立つと奇麗きれいに消えてしま

う。おれは何事によらず長く心配しようと思つても心配が出来ない男だ。教場のしくじりが生徒にどんな影響を与えて、その影響が校長や教頭にどんな反応を呈するかまるで無頓着であつた。おれは前に云う通りあまり度胸の据つた男ではないのだが、思い切りはすこぶるいい人間である。この学校がいけなければすぐどつかへ行く覚悟でいたから、狸も赤シヤツも、ちつとも恐しくはなかつた。まして教場の小僧共なんかには愛嬌もお世辞も使う気になれなかつた。学校はそれでいいのだが下宿の方はそうはいかなかつた。亭主が

茶を飲みに来るだけなら我慢もするが、いろいろな者を持つてくる。始めに持つて来たのは何でも印材で、十ばかり並べておいて、みんなで三円なら安い物でお買いなさいと云う。田舎巡りのヘボ絵師じやあるまいし、そんなものは入らないと云つたら、今度は華山とか何とか云う男の花鳥の掛物かけものをもつて來た。自分で床の間まへかけて、いい出来じゃありませんかと云うから、そうかなと好加減いいかげんに挨拶あいさつをすると、華山には一人ある、一人は何とか華山で、一人は何とか華山ですが、この幅ふくはその何とか華山の方だと、くだらない講釈こうせきをした

あとで、どうです、あなたなら十五円にしておきます。
お買いなさいと催促^{さいそく}をする。金がないと断わると、金
なんか、いつでもようございますとなかなか頑固^{がんこ}だ。
金があつても買わないんだと、その時は追つ払つち
まつた。その次には鬼瓦^{おにがわら}ぐらいな大硯^{おおすずり}を担ぎ込んだ。
これは端渓^{たんけい}です、端渓ですと二遍^{へん}も三遍も端渓がるか
ら、面白半分に端渓た何だいと聞いたら、すぐ講釈を
始め出した。端渓には上層中層下層とあつて、今時のも
のはみんな上層ですが、これはたしかに中層です、
この眼^{がん}をご覧なさい。眼が三つあるのは珍らしい。

澆墨の具合も至極よろしい、試してご覧なさいと、おれの前へ大きな硯を突きつける。いくらだと聞くと、持主が支那から持つて帰つて来て是非売りたいと云いますから、お安くして三十円にしておきましょと云う。この男は馬鹿に相違ない。学校の方はどうかこうか無事に勤まりそุดが、こう骨董責に逢つてはとても長く続きそうにない。

そのうち学校もいやになつた。ある日の晩大町と云う所を散歩していたら郵便局の隣りに蕎麦とかいて、下に東京と注を加えた看板があつた。おれは蕎麦

が大好きである。東京に居つた時でも蕎麦屋の前を
通つて薬味の香いをかぐと、どうしても暖簾がくぐり
たくなつた。今日までは数学と骨董で蕎麦を忘れてい
たが、こうして看板を見ると素通りが出来なくなる。
ついでだから一杯食つて行こうと思つて上がり込んだ。
見ると看板ほどでもない。東京と断わる以上はも
う少し奇麗にしそうなものだが、東京を知らないのか、
金がないのか、滅法きたない。畳は色が变つてお負け
に砂でざらざらしている。壁は煤で真黒だ。天井はラ
ンプの油烟で燻ぼつてるのみか、低くつて、思わず首

を縮めるくらいだ。ただ麗々と蕎麦の名前をかいて張り付けたねだん付けだけは全く新しい。何でも古いうちを買って二三日前から開業したに違ちがいなかろう。ねだん付の第一号に天麩羅てんぶらとある。おい天麩羅てんぶらを持つてこいと大きな声を出した。するどこの時まで隅すみの方に三人かたまつて、何かつるつる、ちゅうちゅう食つてた連中れんじゆうが、ひとしくおれの方を見た。部屋へやが暗いので、ちよつと気がつかなかつたが顔を合せると、みんな学校の生徒である。先方で挨拶あいさつをしたから、おれも挨拶あいさつをした。その晩は久し振ひきぶりに蕎麦を食つたので、旨うまかつ

たから天麩羅を四杯たいら平げた。

翌日何の気もなく教場へはいると、黒板一杯ぐらいな大きな字で、天麩羅先生とかいてある。おれの顔を見てみんなわあと笑つた。おれは馬鹿馬鹿しいから、天麩羅を食つちゃひとり可笑おかしいかと聞いた。すると生徒の一人が、しかし四杯は過ぎるぞな、もし、と云つた。四杯食おうが五杯食おうがおれの錢でおれが食うのに文句があるもんかと、さつさと講義を済まして控所へ帰つて来た。ただ十分立つて次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯なり。但し笑うべからず。と黒板に書いてある。

さつきは別に腹も立たなかつたが今度は癪に障つた。
冗談も度を過ごせばいたずらだ。焼餅の黒焦のようなもので誰も賞め手はない。田舎者はこの呼吸が分からぬからどこまで押して行つても構わないと云う了見だろう。一時間あるくと見物する町もないような狭い都に住んで、外に何にも芸がないから、天麩羅事件を日露戦争のように触れちらかすんだろう。憐れな奴等だ。小供の時から、こんなに教育されるから、いやにひねっこびた、植木鉢の楓みたような小人が出来るんだ。無邪気ならいつしょに笑つてもいいが、こりやな

んだ。小供の癖に乙に毒氣を持つてる。おれはだまつて、天麩羅を消して、こんないたずらが面白いか、卑怯な冗談だ。君等は卑怯と云う意味を知つてゐるか、と云つたら、自分がした事を笑われて怒るのが卑怯じやろうがな、もしど答えた奴がある。やな奴だ。わざわざ東京から、こんな奴を教えに来たのかと思つたら情なくなつた。余計な減らず口を利かないで勉強しろと云つて、授業を始めてしまつた。それから次の教場へ出たら天麩羅を食うと減らず口が利きたくなるものなりと書いてある。どうも始末に終えない。あんま

り腹が立つたから、そんな生意気な奴は教えないと云つてすたすた帰つて来てやつた。生徒は休みになつて喜んだそうだ。こうなると学校より骨董の方がまだましだ。

天麩羅蕎麦もうちへ帰つて、一晩寝たらそんなに肝癪かんしゃくに障らなくなつた。学校へ出てみると、生徒も出ている。何だか訳が分らない。それから三日ばかりは無事であつたが、四日目の晩に住田すみたと云う所へ行つて団子を食つた。この住田と云う所は温泉のある町で城下から汽車だと十分ばかり、歩いて三十分で行かれる、

料理屋も温泉宿も、公園もある上に遊廓がある。おれのはいった団子屋は遊廓の入口にあつて、大変うまいという評判だから、温泉に行つた帰りがけにちよつと食つてみた。今度は生徒にも逢わなかつたから、誰も知るまいと思つて、翌日学校へ行つて、一時間目の教場へはいると団子二皿さら七錢と書いてある。実際おれは二皿食つて七錢はら払つた。どうも厄介やっかいな奴等だ。二時間目にもきつと何かあると思うと遊廓の団子旨い旨いと書いてある。あきれ返つた奴等だ。団子がそれで済んだと思ったら今度は赤手拭あかてぬぐいと云うのが評判になつた。

何の事だと思つたら、つまらない来歴だ。おれはここへ来てから、毎日住田の温泉へ行く事に極めている。ほかの所は何を見ても東京の足元にも及ばないが温泉だけは立派なものだ。せっかく來た者だから毎日はいつてやろうという氣で、晩飯前に運動かたがた出掛ける。ところが行くときは必ず西洋手拭の大きな奴をぶら下げて行く。この手拭が湯に染そま_{べにいろ}つた上へ、赤い縞しまが流れ出したのでちよつと見ると紅色に見える。おれはこの手拭を行きも帰りも、汽車に乗つてもあるいても、常にぶら下げている。それで生徒がおれの事を赤手拭

赤手拭と云うんだそうだ。どうも狭い土地に住んでる
とうるさいものだ。まだある。温泉は三階の新築で上
等は浴衣をかして、流しをつけて八銭で済む。その上
に女が天目へ茶を載せて出す。おれはいつでも上等へ
はいった。すると四十円の月給で毎日上等へはいるの
は贅沢だと云い出した。余計なお世話だ。まだある。
湯壺は花崗石を畳み上げて、十五畳敷ぐらいの広さに
仕切つてある。大抵は十三四人漬つてるがたまには誰
も居ない事がある。深さは立つて乳の辺まであるから、
運動のために、湯の中を泳ぐのはなかなか愉快だ。お

れは人の居ないのを見済しては十五畳の湯壺を泳ぎ巡つて喜んでいた。ところがある日三階から威勢よく下りて今日も泳げるかなとざくろ口を覗いてみると、大きな札へ黒々と湯の中で泳ぐべからずとかいて貼りつけてある。湯の中で泳ぐものは、あまりあるまいから、この貼札はおれのために特別に新調したのかも知れない。おれはそれから泳ぐのは断念した。泳ぐのは断念したが、学校へ出てみると、例の通り黒板に湯の中で泳ぐべからずと書いてあるには驚いた。何だか生徒全体がおれ一人を探偵しているように思われた。

くさくさした。生徒が何を云つたつて、やろうと思つた事をやめるようなおれではないが、何でこんな狭苦しい鼻の先がつかえるような所へ来たのかと思うと情なくなつた。それでうちへ帰ると相変らず骨董責である。

四

学校には宿直があつて、職員が代る代るこれをつとめる。但し狸たぬきと赤シャツは例外である。何でこの兩人

が当然の義務を免かれるのかと聞いてみたら、
 奏任待遇そうにんたいぎよだからと云う。面白くもない。月給はたくさん
 とる、時間は少ない、それで宿直を逃がれるなんて
 不公平があるものか。勝手な規則をこしらえて、それ
 が当たり前あたまえだというような顔をしている。よくまああん
 なにずうずうしく出来るものだ。これについては大分
 不平であるが、山嵐やまあらしの説によると、いくら一人で不平
 を並べたつて通るものじやないそうだ。一人だつて
 二人だつて正しい事なら通りそうなものだ。山嵐は
 might is right という英語を引いて説諭せつゆを加えたが、

何だか要領を得ないから、聞き返してみたら強者の権利と云う意味だそうだ。強者の権利ぐらいなら昔から知つていて、今さら山嵐から講釈をきかなくつてもいい。強者の権利と宿直とは別問題だ。狸や赤シャツが強者だなんて、誰が承知するものか。議論は議論としてこの宿直がいよいよおれの番に廻つて来た。一体疳性だから夜具蒲団などは自分のものへ楽に寝ないと寝たような心持ちがしない。小供の時から、友達のうちへ泊つた事はほとんどないくらいだ。友達のうちでさえ厭なら学校の宿直はなおさら厭だ。厭だけれども、

これが四十円のうちへ籠つてゐるなら仕方がない。
我慢がまんして勤めてやろう。

教師も生徒も帰つてしまつたあとで、一人ぽかんと
してゐるのは随分間が抜けたものだ。宿直部屋は教場
の裏手にある寄宿舎の西はずれの一室だ。ちよつとは
いつてみたが、西日をまともに受けて、苦しくつて居
たたまれない。田舎だけあつて秋がきても、気長に暑
いもんだ。生徒の賄まかないを取りよせて晩飯を済ましたが、
まずいには恐れ入つた。よくあんなものを食つて、あ
れだけに暴れられたもんだ。それで晩飯を急いで四時

半に片付けてしまうんだから豪傑ごうけつに違ちがいない。飯は食つたが、まだ日が暮くれないから寝る訳に行かない。ちよつと温泉に行きたくなつた。宿直をして、外へ出るのはいい事だか、悪い事わだかしらないが、こうつくねんとして重禁錮じゅうきんこ同様な憂目うきめに逢うのは我慢の出来るもんじやない。始めて学校へ來た時当直の人はと聞いたたら、ちよつと用達ようたしに出たと小使こうかいが答えたのを妙みょうだと思つたが、自分に番まわが廻まわつてみると思い当る。出る方が正しいのだ。おれは小使にちよつと出てくると云つたら、何かご用ですかと聞くから、用じやない、

温泉へはいるんだと答えて、さつさと出掛けた。
赤手拭あかてぬぐいは宿へ忘れて来たのが残念だが今日は先方で借りるとしよう。

それからかなりゆるりと、出たりはいつたりして、ようやく日暮ひぐれがた方になつたから、汽車へ乗つて古町こまちの停車場まで来て下りた。学校まではこれから四丁だ。訳はないあるき出すと、向うから狸が來た。狸はこれからこの汽車で温泉へ行こうと云う計画なんだろう。すたすた急ぎ足にやつてきたが、擦れ違すがつた時おのの顔を見たから、ちょっと挨拶あいさつをした。すると狸は

あなたは今日は宿直ではなかつたですかねえと真面目
くさつて聞いた。なかつたですかねえもないもんだ。
二時間前おれに向つて今夜は始めての宿直ですね。ご
苦労さま。と礼を云つたじやないか。校長なんかにな
るといやに曲りくねつた言葉を使うもんだ。おれは腹
が立つたから、ええ宿直です。宿直ですから、これか
ら帰つて泊る事はたしかに泊りますと云い捨てて済ま
してあるき出した。豎町の四つ角までくると今度は
山嵐やまあらしに出つ喰せまわした。どうも狭い所だ。出であるきさ
えすれば必ず誰かに逢う。「おい君は宿直じやないか」

と聞くから「うん、宿直だ」と答えた、「宿直が無暗^{むやみ}に出てあるくなんて、不都合^{ふつごう}じやないか」と云つた。「ちつとも不都合なもんか、出てあるかない方が不都合だ」と威張^{いは}つてみせた。「君のずぼらにも困るな、校長か教頭に出逢うと面倒^{めんどう}だぜ」と山嵐に似合わない事を云うから「校長にはたつた今逢つた。暑い時には散歩でもしないと宿直も骨でしようと校長が、おれの散歩をほめたよ」と云つて、面倒臭^{くさ}いから、さつさと学校へ帰つて來た。

それから日はすぐれる。くれてから一時間ばかり

は小使を宿直部屋へ呼んで話をしたが、それも飽きたから、寝られない今まで床へはいろいろと思つて、寝巻に着換えて、蚊帳を捲くつて、赤い毛布を跳ねのけて、とんと尻持を突いて、仰向けになつた。おれが寝るときにとんと尻持をつくのは小供の時からの癖だ。わるい癖だと云つて小川町おがわまちの下宿に居た時分、二階下に居た法律学校の書生が苦情を持ち込んだ事がある。法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚な事を長たらしく述べ立てるから、寝る時にどんどん音がするのはおれの尻がわるいのじゃない。下宿の

建築が粗末なんだ。掛け合うなら下宿へ掛け合えと凹ましてやつた。この宿直部屋は二階じやないから、いくら、どしんと倒たおれても構わない。なるべく勢よく倒されないと寝たような心持ちがしない。ああ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか両足へ飛び付いた。ざらざらして蚤のみのようでもないからこいつあと驚おどろいて、足を二三度毛布の中で振ふつてみた。するとざらざらと当つたものが、急に殖ふえ出して脛すねが五六力所、股ももが二三力所、尻の下でぐちゃりと踏ふみ潰つぶしたのが一つ、躋へその所まで飛び上がつたのが一つ——いよいよ驚ろい

た。早速起き上つて、毛布をぱつと後ろへ拋ると、蒲団の中から、バツタが五六十飛び出した。正体の知れない時は多少氣味が悪わるかつたが、バツタと相場が極まつてみたら急に腹が立つた。バツタの癖に人を驚ろかしやがつて、どうするか見ると、いきなり括り枕を取つて、二三度擲たたきつけたが、相手が小さ過ぎるから勢よく抛なげつける割に利目ききめがない。仕方がないから、また布団の上へ坐つて、煤掃すすはきの時に塵ごよを丸めて畳たたみを叩くように、そちら近辺を無暗にたたいた。バツタが驚ろいた上に、枕の勢で飛び上がるものだから、おれの

肩かただの、頭かぶだの鼻くちばしの先さきだのへくつ付ついたり、ぶつかつたりする。顔おほほへ付ついた奴やつは枕まくらで叩たたく訳わけに行かないから、手てで攫つかんで、一生懸命いっせいげんめいに擲なげきつける。忌々ききしい事ことに、いくら力を出しても、ぶつかる先さきが蚊帳むしよだから、ふわりと動うごくだけで少しも手答てごたがない。バツタは擲なげつけられたまま蚊帳むしよへつらまつていて。死死にもどうもしない。ようやくの事ことに三十分さんじゅんばかりでバツタは退治たいじた。箒ほうきを持つて来てバツタの死骸しがいを掃ぬぐき出した。小使こしが来て何なんですかと云いうから、何なんですかもあるもんか、バツタを床ゆかの中に飼かつとく奴やつがどこの国くににある。間拔まぬけ。

と叱しかつたら、私は存じませんと弁解をした。存じませ
んで済むかと箒を櫻側えんがわへ抛ほうり出したら、小使は恐る恐
る箒を担いで帰つて行つた。

おれは早速寄宿生きゆくせいを三人ばかり総代に呼び出した。
すると六人出て來た。六人だろうが十人だろうが構う
ものか。寝巻のまま腕うでまくりをして談判を始めた。

「なんでバッタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バッタた何ぞな」と真先まっさきの一人がいつた。やに落ち
付いていやがる。この学校じゃ校長ばかりじゃない、
生徒まで曲りくねつた言葉を使うんだろう。

「バツタを知らないのか、知らなけりや見せてやろう」と云つたが、生憎掃き出してしまつて一匹^{びき}も居ない。また小使を呼んで、「さつきのバツタを持つてこい」と云つたら、「もう掃溜^{はきだめ}へ棄^すててしましましたが、拾つて参りましようか」と聞いた。「うんすぐ拾つて来い」と云うと小使は急いで馳^かけ出したが、やがて半紙の上へ十四ばかり載^のせて来て、「どうもお氣の毒ですが、生憎夜でこれだけしか見当りません。あしたになりましたらもつと拾つて参ります」と云う。小使まで馬鹿^{ばか}だ。おれはバツタの一つを生徒に見せて「バツタたこれだ、

大きなずう体をして、バツタを知らないた、何の事だ」と云うと、一番左の方に居た顔の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意氣におれを遣り込めた。「籠棒め、イナゴもバツタも同じもんだ。第一先生を捕まえてなもした何だ。菜飯は田樂の時より外に食うもんじやない」とあべこべに遣り込めてやつたら「なもしと菜飯とは違うぞな、もし」と云つた。いつまで行つてもなもしを使う奴だ。

「イナゴでもバツタでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつ、バツタを入れてくれと頼んだ」

「誰も入れやせんがな」

「入れないものが、どうして床の中に居るんだ」

「イナゴは温ぬくい所が好きじゃけれ、大方一人でおはいりたのじやあろ」

「馬鹿あ云え。バツタが一人でおはいりになるなんて
——バツタにおはいりになられてたまるもんか。——
さあなぜこんないたずらをしたか、云え」

「云えてて、入れんものを説明しようがないがな
けちな奴やつら等だ。自分で自分のした事が云えないくらいなら、てんでしないがいい。証拠しょうこさえ拳がらなければ

ば、しらを切るつもりで岡太く構えていやがる。おれ
だつて中学に居た時分は少しあはいたずらもしたもん
だ。しかしだれがしたと聞かれた時に、尻込みをする
ような卑怯な事はただの一度もなかつた。したもの
したので、しないものはしないに極つてる。おれなん
ぞは、いくら、いたずらをしたつて潔白なものだ。嘘
を吐いて罰を逃げるくらいなら、始めからいたずらな
んかやるものか。いたずらと罰はつきもんだ。罰があ
るからいたずらも心持ちよく出来る。いたずらだけで
罰はご免蒙るなんて下劣な根性がどこの国に流行ると

思つてゐるんだ。金は借りるが、返す事はご免だと云う連中はみんな、こんな奴等が卒業してやる仕事に相違ない。全体中学校へ何しにはいつてゐるんだ。学校へはいつて、嘘を吐いて、胡魔化ごまかして、陰でこせこせ生意氣な悪いたずらをして、そうして大きな面で卒業すれば教育を受けたもんだと瘤違かんちがいをしていやがる。話せない雜兵ぞうひょうだ。

おれはこんな腐くさつた了見りょうけんの奴等と談判するのは胸糞むなくそが悪いから、「そんなに云われなきや、聞かなくつていい。中学校へはいつて、上品も下品も区別が出来

ないのは氣の毒なものだ」と云つて六人を逐^お放^{ぱな}してやつた。おれは言葉や様子こそあまり上品じやないが、心はこいつらよりも遙^{はる}かに上品なつもりだ。六人は悠悠と引き揚^あげた。上部^{うわべ}だけは教師のおれよりよっぽどえらく見える。実は落ち付いているだけなお悪い。おれには到底^{とうてい}これほどの度胸はない。

それからまた床へはいつて横になつたら、さつきの騒動^{そうどう}で蚊帳の中はぶんぶん唸^{うな}つてゐる。手燭^{てしょく}をつけて一匹ずつ焼くなんて面倒な事は出来ないから、釣手をはずして、長く畳^{たた}んでおいて部屋の中で横豎十文字に

振ふつたら、環かんが飛んで手の甲こうをいやというほど撲ぶつた。三度目に床へはいった時は少々落ち付いたがなかなか寝られない。時計を見ると十時半だ。考えてみると厄介な所へ来たもんだ。一体中学の先生なんて、どこへ行つても、こんなものを相手にするなら氣の毒なものだ。よく先生が品切れにならない。よつぽど辛防強い朴念仁ぼくねんじんがなるんだろう。おれには到底やり切れない。それを思うと清きよなんてのは見上げたものだ。教育もない身分もない婆ばあさんだが、人間としてはすこぶる尊たい。今まであんなに世話になつて別段ありがた難有いとも思

わなかつたが、こうして、一人で遠国へ来てみると、始めてあの親切がわかる。越後えちごの筈ささあめ飴あめが食いたければ、わざわざ越後まで買いに行つて食わしてやつても、食わせるだけの価値じゅうぶんは充分じゆうぶんある。清はおれの事を欲がなくつて、真直まっすぐな気性だと云つて、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。何だか清に逢いたくなつた。

清の事を考えながら、のつそつしていると、突然とつぜんおれの頭の上で、数で云つたら三四十人もあるうか、二階が落つこちるほどどん、どん、どんと拍子ひょうしを取つて

床板を踏みならす音がした。すると足音に比例した大きな鬨の声が起つた。おれは何事が持ち上がつたのかと驚ろいて飛び起きた。飛び起きる途端に、ははあさつきの意趣返しに生徒があばれるのだなと気がついた。手前のわるい事は悪るかつたと言つてしまわないうちは罪は消えないもんだ。わるい事は、手前達に覚があるだろう。本来なら寝てから後悔してあしたの朝でもあやまりに来るのが本筋だ。たとい、あやまらないまでも恐れ入つて、静肅に寝て いるべきだ。それを何だこの騒ぎは。寄宿舎を建てて豚でも飼つておきあしま

いし。氣狂きちがいじみた真似まねも大抵たいでいにするがいい。どうするか見ろと、寝巻のまま宿直部屋を飛び出して、楷子段はしごだんを三股半みまたはんに二階まで躍り上おどがつた。すると不思議な事に、今まで頭の上で、たしかにどたばた暴れていたのが、急に静まり返つて、人声どころか足音もなくなつた。これは妙だ。ランプはすでに消してあるから、暗くてどこに何が居るか判然と分らないが、人気ひとけのあるとないとは様子ようすでも知れる。長く東から西へ貫いた廊下ろうかには鼠一匹ねずみ びきも隠れていない。廊下のはずれから月がさして、遙か向うが際どく明るい。どうも

変だ、おれは小供の時から、よく夢を見る癖があつて、
 夢中に跳ね起きて、わからぬ寝言を云つて、人に笑われた事がよくある。十六七の時ダイヤモンドを拾つた夢を見た晩なぞは、むくりと立ち上がつて、そばに居た兄に、今のダイヤモンドはどうしたと、非常な勢で尋ねたくらいだ。その時は三日ばかりうち中の笑い草になつて大いに弱つた。ことによると今のも夢かも知れない。しかしたしかにあはれたに違ひないがと、廊下の真中で考え込んでいると、月のさしている向うのはずれで、一二三わあと、三四十人の声がかたまつて

響いたかと思う間もなく、前のように拍子を取つて、一同が床板を踏み鳴らした。それ見ろ夢じやないやつぱり事実だ。静かにしろ、夜なかだぞ、とこつちも負けんくらいな声を出して、廊下を向うへ馳けだした。おれの通る路は暗い、ただはずれに見える月あかりが目標だ。おれが駆け出して二間も来たかと思うと、廊下の真中で、堅い大きなものに向脛をぶつけて、あ痛いが頭へひびく間に、身体はすとんと前へ抛り出された。こん畜生と起き上がつてみたが、駆けられない。氣はせくが、足だけは云う事を利かない。じれつたい

から、一本足で飛んで来たら、もう足音も人声も静まり返つて、森としている。いくら人間が卑怯だつて、こんなに卑怯に出来るものじやない。まるで豚だ。こうなれば隠れている奴を引きずり出して、あやまらせてやるまではひかないぞと、心を極めて寝室の一つを開けて中を検査しようと思つたが開かない。錠をかけてあるのか、机か何か積んで立て懸けてあるのか、押しても、押しても決して開かない。今度は向う合せの北側の室^{へや}を試みた。開かない事はやつぱり同然である。おれが戸を開けて中に居る奴を引っ捕らまえてやろう

と、焦慮^{いらつ}てると、また東のはずれで鬨の声と足拍子が始まつた。この野郎^{やろう}申し合せて、東西相応じておれを馬鹿にする気だな、とは思つたがさてどうしていいか分らない。正直に白状してしまふが、おれは勇氣のあら割合に智慧^{ちえ}が足りない。こんな時にはどうしていいかさつぱりわからない。わからないけれども、決して負けるつもりはない。このままに済ましてはおれの顔にかかる。江戸^{えど}つ子^{つこ}は意氣地^{いきじ}がないと云われるのに残念だ。宿直をして鼻垂れ^{はなつた}小僧^{こぞう}にからかわれて、手のつけようがなくつて、仕方がないから泣き寝入りにし

たと思われちゃ一生の名折れだ。これでも元は旗本だ。
 旗本の元は清和源氏で、多田の満仲の後裔だ。こんな
 土百姓とは生まれからして違うんだ。ただ智慧のない
 ところが惜しいだけだ。どうしていいか分らないのが
 困るだけだ。困つたつて負けるものか。正直だから、
 どうしていいか分らないんだ。世の中に正直が勝たな
 いで、外に勝つものがあるか、考えてみろ。今夜中に
 勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あ
 さつて勝つ。あさつて勝てなければ、下宿から弁当を
 取り寄せて勝つまでここに居る。おれはこう決心をし

たから、廊下の真中へあぐらをかいて夜のあけるのを待つっていた。蚊がぶんぶん来たけれども何ともなかつた。さつき、ぶつけた向脛を撫でてみると、何だかぬらぬらする。血が出るんだろう。血なんか出たければ勝手に出るがいい。そのうち最前からの疲れが出て、ついうとうと寝てしまつた。何だか騒がしいので、眼めが覚めた時はえつ糞くそしまつたと飛び上がつた。おれの坐すわつてた右側にある戸が半分あいて、生徒が二人、おれの前に立つている。おれは正氣に返つて、はつと思う途端に、おれの鼻の先にある生徒の足を引つ攫つかんで、

力任せにぐいと引いたら、そいつは、どたりと仰向に倒れた。ざまを見る。残る一人がちよつと狼狽ろうぱいしたところを、飛びかかって、肩を抑おさえて二三度こづき廻したら、あつけに取られて、眼をぱちぱちさせた。さあおれの部屋まで来いと引っ立てるとき、弱虫だと見えて、一も二もなく尾ふいて来た。夜はとうにあけている。

おれが宿直部屋へ連れてきた奴を詰問きつもんし始めると、豚は、打つても擲いても豚だから、ただ知らんがなで、どこまでも通す了見と見えて、けつして白状しない。そのうち一人来る、一人来る、だんだん一階から宿直

部屋へ集まつてくる。見るとみんな眠そうに瞼をはらしている。けちな奴等だ。一晩ぐらい寝ないで、そんな面をして男と云われるか。面でも洗つて議論に来いと云つてやつたが、誰も面を洗いに行かない。

おれは五十人あまりを相手に約一時間ばかり押問答おしもんどうをしていると、ひょつくり狸がやつて來た。あとから聞いたら、小使が学校に騒動がありますつて、わざわざ知らせに行つたのだそうだ。これしきの事に、校長を呼ぶなんて意氣地がなさ過ぎる。それだから中学校の小使なんぞをしてるんだ。

校長はひと通りおれの説明を聞いた。生徒の言草も
 ちよつと聞いた。追つて処分するまでは、今まで通り
 学校へ出る。早く顔を洗つて、朝飯を食わないと時間
 に間に合わないから、早くしろと云つて寄宿生をみん
 な放免ほうめんした。手温てぬるい事だ。おれなら即席そくせきに寄宿生を
 ことごとく退校してしまう。こんな悠長ゆうちょうな事をするか
 ら生徒が宿直員を馬鹿にするんだ。その上おれに向つ
 て、あなたもさぞご心配でお疲れでしょう、今日はご
 授業に及ばんと云うから、おれはこう答えた。「いえ、
 ちつとも心配じやありません。こんな事が毎晩あつて

も、命のある間は心配にやなりません。授業はやります、一晩ぐらい寝なくつて、授業が出来ないくらいなら、頂戴ちょうだいした月給を学校の方へ割戻わりもどします」校長は何と思つたものか、しばらくおれの顔を見つめていたが、しかし顔が大分はれていますよと注意した。なるほど何だか少々重たい気がする。その上べた一面痒かゆい。蚊がよつぼと刺さしたに相違ない。おれは顔中ぼりぼり搔かきながら、顔はいくら膨はれたつて、口はたしかにきけますから、授業には差し支えませんと答えた。校長は笑いながら、大分元気ですねと賞めた。実を云うと賞

めたんじやあるまい、ひやかしたんだろう。

五

坊っちゃん

君釣^つりに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。
赤シャツは氣味の悪^わるいように優しい声を出す男である。まるで男だか女だか分^わりやしない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業生じやないか。物理学校でさえおれくらいな声が出るのに、文学士がこれじや見つともない。

おれはそうですねあと少し進まない返事をしたら、君釣をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんまりないが、子供の時、小梅の釣堀で鮎を三匹釣つた事がある。それから神楽坂の毘沙門の縁日で八寸ばかりの鯉を針で引っかけて、しめたと思つたら、ぽちやりと落としてしまつたがこれは今考へても惜しいと云つたら、赤シャツは顎を前方へ突き出してホホホホと笑つた。何もそつて笑わなくつても、よさそうな者だ。「それじゃ、まだ釣りの味は分らんですね。お望みならちと伝授しましよう」とすこぶる得意であ

る。だれがご伝授をうけるものか。一体釣や猟をする連中はみんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくつて、殺生をして喜ぶ訳がない。魚だつて、鳥だつて殺されるより生きてる方が楽に極まつて。釣や猟をしなくつちや活計がたたないなら格別だが、何不足なく暮している上に、生き物を殺さなくつちや寝られないなんて贅沢な話だ。こう思つたが向うは文学士だけに口が達者だから、議論じや叶わないと思つて、だまつてた。すると先生このおれを降参させたと疳違かんちがいして、早速伝授しましよう。おひまなら、今日どうです、いつ

しょに行つちや。吉川君と一人ひとりぎりじや、淋さむしいから、
來たまえとしきりに勧める。吉川君といふのは画学の
教師で例の野だいこの事だ。この野だは、どういう
了見りょうけんだか、赤シャツのうちへ朝夕出入でいりして、どこへで
も隨行づいこうして行く。まるで同輩どうはいじゃない。主従しゆうじゆうみたよう
だ。赤シャツの行く所なら、野だは必ず行くに極きまつて
いるんだから、今さら驚おどろきもしないが、二人で行け
ば済むところを、なんで無愛想ぶあいそのおれへ口を掛けたん
だろう。大方高慢こうまんちきな釣道樂で、自分の釣るところ
をおれに見せびらかすつもりかなんかで誘さそつたに違かい

ない。そんな事で見せびらかされるおれじゃない。鮪の二匹や三匹釣つたつて、びくともするもんか。おれだつて人間だ、いくら下手へただつて糸さえ卸おろしや、何かかかるだろう、ここでおれが行かないと、赤シャツの事だから、下手だから行かないんだ、嫌きらいだから行かないんじやないと邪推じやすするに相違そういない。おれはこう考えたから、行きましょと答えた。それから、学校をしまつて、一応うちへ帰つて、支度したくを整えて、停車場で赤シャツと野だを待ち合せて浜はまへ行つた。船頭は一人で、船は細長い東京辺では見た事もない恰好かっこであ

る。さつきから船中見渡すが釣竿が一本も見えない。釣竿なしで釣が出来るものか、どうする了見だらうと、野だに聞くと、沖釣には竿は用いません、糸だけでげすと顎を撫^なでて黒人じみた事を云つた。こう遣り込められるくらいならだまつていればよかつた。

船頭はゆつくりゆつくり漕^こいでいるが熟練は恐^{おそ}しいもので、見返^{みか}えると、浜が小さく見えるくらいもう出ている。高柏寺の五重^{ごう}の塔^{とう}が森の上へ抜け出して針のよう^{むこう}がつてる。向側^{がわ}を見ると青嶋^{あおしま}が浮いている。これは人の住まない島だそうだ。よく見ると石と松ば

かりだ。なるほど石と松ばかりじゃ住めっこない。赤シャツは、しきりに眺望ちようぼうしていい景色だと云つてゐる。野だは絶景でげすと云つてゐる。絶景だか何だか知らな
いが、いい心持ちには相違ない。ひろびろとした海の
上で、潮風に吹ふかれるのは薬だと思つた。いやに腹が
減る。「あの松を見たまえ、幹が真直まっすぐで、上が傘のよ
うに開いてターナーの画にありそうちだね」と赤シャツ
が野だに云うと、野だは「全くターナーですね。どう
もあの曲り具合つたらありませんね。ターナーそつく
りですよ」と心得顔である。ターナーとは何の事だか

知らないが、聞かないでも困らない事だから黙つてい
た。舟は島を右に見てぐるりと廻つた。波は全くない。
これで海だとは受け取りにくいほど平だ。赤シャツの
お陰ではなはだ愉快だ。出来る事なら、あの島の上へ
上がつてみたいと思つたから、あの岩のある所へは舟
はつけられないんですかと聞いてみた。つけられん事
もないですが、釣をするには、あまり岸じやいけない
ですと赤シャツが異議を申し立てた。おれは黙つてた。
すると野だがどうです教頭、これからあの島をターナー島と名づけようじゃありませんかと余計な発議を

した。赤シャツはそいつは面白い、吾々はこれからそ
う云おうと賛成した。この吾々のうちにおれもはいつ
てるなら迷惑だ。めいわくおれには青嶋でたくさんだ。あの岩
の上に、どうです、ラフハエルのマドンナを置いちゃ。
いい画が出来ますぜと野だが云うと、マドンナの話は
よそうじゃないかホホホホと赤シャツが氣味の悪るい
笑い方をした。なに誰も居ないから大丈夫だいじょうぶですと、
ちよつとおれの方を見たが、わざと顔をそむけてにや
にやと笑つた。おれは何だかやな心持ちがした。マド
ンナだろうが、小日那こひなだろうが、おれの関係した事で

ないから、勝手に立たせるがよからうが、人に分らない事を言つて分らないから聞いたつて構やしませんてえような風をする。下品な仕草だ。これで当人は私も江戸えどつ子でげすなどと云つてる。マドンナと云うのは何でも赤シャツの馴染なじみの芸者の渾名あだなか何かに違いないと思つた。なじみの芸者を無人島の松の木の下に立たして眺めていれば世話はない。それを野だが油絵にでもかいて展覧会へ出したらよかろう。

ここいらがいいだろうと船頭は船をとめて、錨を卸いかりした。幾尋いくひろあるかねと赤シャツが聞くと、六尋むひろぐらい

だと云う。六尋ぐらいいじや鯛たいはむずかしいなど、赤シャツは糸を海へなげ込んだ。大将鯛を釣る気と見える、豪胆ごうたんなものだ。野だは、なに教頭のお手際じやかかりますよ。それになぎですかからとお世辞を云いながら、これも糸を繰り出して投げ入れる。何だか先に錘おもりのような鉛なまりがぶら下がつてゐるだけだ。浮うきがない。浮がなくつて釣をするのは寒暖計なしで熱度をはかるようなものだ。おれには到底出来ないと見ていると、さあ君もやりたまえ糸はありますかと聞く。糸はあまるほどあるが、浮がありませんと云つたら、浮がなくつちや釣が

出来ないのは素人しろうとですよ。こうしてね、糸が水底みずそこへついた時分に、船縁ふなべりの所で人指しゆびで呼吸をはかるんです、食うとすぐ手に答える。——そらきた、と先生急に糸をたぐり始めるから、何かかかつたと思つたら何にもかからない、餌えがなくなつてたばかりだ。いい気味だ。教頭、残念な事をしましたね、今のはたしかに大ものに違ひなかつたんですが、どうも教頭のお手際でさえ逃げられちゃ、今日は油断にらができませんよ。しかし逃げられても何ですね。浮と睨めくらをしている連中よりはましですね。ちょうど歯どめがなくつ

ちや自転車へ乗れないと同程度ですからねと野だは
 妙な事ばかり喋舌る。よつほど撲りつけてやろうかと思つた。おれだつて人間だ、教頭ひとりで借り切つた海じやあるまいし。広い所だ。鰯の一匹ぐらい義理にだつて、かかつてくれるだろうと、どほんと錘と糸を抛り込んでいい加減に指の先であやつっていた。

しばらくすると、何だかぴくぴくと糸にあたるものがある。おれは考えた。こいつは魚に相違ない。生きてるものでなくつちや、こうぴくつく訳がない。しめた、釣れたとぐいぐい手繩り寄せた。おや釣れました

かね、後世恐るべしだと野だがひやかすうち、糸はもう大概手繰り込んでただ五尺ばかりほどしか、水に浸ついておらん。船縁から覗いてみたら、金魚のような縞のある魚が糸にくつついで、右左へ漾いながら、手に応じて浮き上がつてくる。面白い。水際から上げるとき、ぽちやりと跳ねたから、おれの顔は潮水だらけになつた。ようやくつらまえて、針をとろうとするがなかなか取れない。捕まえた手はぬるぬるする。大いに氣味がわるい。面倒だから糸を振つて胴の間へ擲きつけたら、すぐ死んでしまつた。赤シャツと野だは驚ろ

いて見ている。おれは海の中で手をざぶざぶと洗つて、
鼻の先へあてがつてみた。まだ腥臭い。もう懲り懲り
だ。何が釣れたつて魚は握りたくない。魚も握られた
くなからう。そうそう糸を捲いてしまつた。

いちほんやり

てがら

一番槍はお手柄だがゴルキじや、と野だがまた生意
気を云うと、ゴルキと云うと露西亞の文学者みたよう
な名だねと赤シャツが洒落た。そうですね、まるで露
西亞の文学者ですねと野だはすぐ賛成しやがる。ゴル
キが露西亞の文学者で、丸木が芝の写真師で、米のな
る木が命の親だらう。一体この赤シャツはわるい癖だ。
くせ

誰を捕まえても片仮名の唐人の名を並べたがる。人に
はそれぞれ専門があつたものだ。おれのような数学の
教師にゴルキだか車力しゃりきだか見当がつくものか、少しほ
遠慮えんりょするがいい。云うならフランクリンの自伝だとか
ツッシング、ツー、ゼ、フロントだとか、おれでも知つ
てる名を使うがいい。赤シャツは時々帝国文学とかい
う真赤まっかな雑誌を学校へ持つて来て難有ありがたそうに読んでい
る。山嵐に聞いてみたら、赤シャツの片仮名はみんな
あの雑誌から出るんだそうだ。帝国文学も罪な雑誌だ。
それから赤シャツと野だは一生懸命に釣つていた

が、約一時間ばかりのうちに二人で十五六上げた。
 可笑しい事に釣れるのも、釣れるのも、みんなゴルキ
 ばかりだ。鯛なんて薬にしたくつてもありやしない。
 今日は露西亞文学の大当たりだと赤シャツが野だに話し
 ている。あなたの手腕しゅわんでゴルキンんですから、私なん
 ぞがゴルキンのは仕方がありません。当たり前ですなと
 野だが答えている。船頭に聞くとこの小魚は骨が多く
 つて、まずくつて、とても食えないんだそうだ。た
 だ肥料こやしには出来るそうだ。赤シャツと野だは一生懸命
 に肥料を釣っているんだ。氣の毒の至りだ。おれは一

匹で懲りたから、胴の間へ仰向^{あおむ}けになつて、さつきから大空を眺めていた。釣をするよりこの方がよっぽど洒落^{しゃれ}ている。

すると二人は小声で何か話し始めた。おれにはよく聞^{きこ}えない、また聞きたくもない。おれは空を見ながら清^{きよ}の事を考^えていて。金があつて、清をつれて、こんな奇麗^{きれい}な所へ遊びに来たらさぞ愉快だろう。いくら景色がよくつても野だなどといつしょじやつまらない。清は皺苦茶^{しわくちゃ}だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たつて恥^はずかしい心持ちはしない。野だのようのは、

馬車に乗ろうが、船に乗ろうが、凌雲閣りょううんかくへのろうが、到底寄り付けたものじやない。おれが教頭で、赤シャツがおれだつたら、やつぱりおれにへけつけお世辞せいじを使つて赤シャツを冷かすに違ひない。江戸ひやつ子は軽薄けいはくだと云うがなるほどこんなものが田舎巡いなかまわりをして、私は江戸ひやつ子でげすと繰り返していたら、軽薄は江戸ひやつ子で、江戸ひやつ子は軽薄の事だと田舎者が思うに極まつてゐる。こんな事を考へてみると、何だか二人がくすぐり笑い出した。笑い声の間に何か云うが途切れ途切れでどんと要領を得ない。

「え？ どうだか……」「……全くです……知らないん
ですかから……罪ですね」「まさか……」「バッタを……
本当ですよ」

おれは外の言葉には耳を傾けなかつたが、バッタと
云う野だの語を聴いた時は、思わずきつとなつた。野
だは何のためかバツタと云う言葉だけことさら力を入
れて、明瞭に^{めいりょう}おれの耳にはいるようにして、そのあと
をわざとぼかしてしまつた。おれは動かないでやはり
聞いていた。

「また例の堀田が……」「そうかも知れない……」

「天麩羅……ハハハハハ」「……煽動^{せんどう}して……」「團子^{だんご}も？」

言葉はかように途切れ途切れであるけれども、バツタだの天麩羅だの、団子だのというところをもつて推し測つてみると、何でもおれのことについて内所話^{ないしょばな}をしているに相違ない。話すならもつと大きな声で話すがいい、また内所話をするくらいなら、おれなんか誘わなければいい。いけ好かない連中だ。バツタだろうが雪踏^{せつた}だろうが、非はおれにある事じやない。校長がひとまずあずけると云つたから、狸^{たぬき}の顔にめんじて

ただ今のところは控えているんだ。野だの癖に入らぬ批評をしやがる。毛筆けふででもしやぶつて引っ込んでるがいい。おれの事は、遅かれ早かれ、おれ一人で片付けてみせるから、差支えはないが、また例の堀田がとか煽動さうどうしてとか云う文句が気にかかる。堀田がおれを煽動して騒動そうどうを大きくしたと云う意味なのか、あるいは堀田が生徒を煽動しておれをいじめたと云うのか方角がわからない。青空を見ていると、日の光がだんだん弱つて来て、少しほひやりとする風が吹き出した。線香せんこうの烟けむりのような雲が、透すき徹とおる底の上を静かに伸のし

て行つたと思つたら、いつしか底の奥に流れ込んで、
うすくもやを掛けたようになつた。

もう帰ろうかと赤シャツが思い出したように云う
と、ええちょうど時分ですね。今夜はマドンナの君に
お逢いですかと野だが云う。赤シャツは馬鹿ばかあ云つ
ちゃいけない、間違いになると、船縁に身を倚もたした
奴やつを、少し起き直る。エへへへ大丈夫ですよ。聞い
たつて……と野だが振り返つた時、おれは皿さらのような
眼めを野だの頭の上へまともに浴びせ掛けた。野
だはまぼしそうに引っ繰り返つて、や、こいつは降参

だと首を縮めて、頭を搔いた。何という猪口才だろう。
 船は静かな海を岸へ漕ぎ戻る。君釣はあまり好きで
 ないと見えますねと赤シャツが聞くから、ええ寝てい
 て空を見る方がいいですと答えて、吸いかけた巻烟草
 を海の中へたたき込んだら、ジユと音がして艤の足で
 搔き分けられた浪の上を揺られながら漾つていった。
 「君が来たんで生徒も大いに喜んでいるから、奮發して
 やつてくれたまえ」と今度は釣にはまるで縁故もない
 事を云い出した。「あんまり喜んでもいないでしよう」
 「いえ、お世辞じやない。全く喜んでいるんです、ね、

吉川君」「喜んでるどころじゃない。大騒ぎです」と野だはにやにやと笑つた。こいつの云う事は一々癪に障るから妙だ。「しかし君注意しないと、険呑ですよ」と赤シャツが云うから「どうせ険呑です。こうなりや険呑は覚悟です」と云つてやつた。実際おれは免職になるか、寄宿生をことごとくあやまらせるか、どつちか一つにする了見でいた。「そう云つちや、取りつきどころもないが——実は僕も教頭として君のためを思うから云うんだが、わるく取つちや困る」「教頭は全く君に好意を持つてるんですよ。僕も及ばずながら、

同じ江戸っ子だから、なるべく長くご在校を願つて、
お互たがいに力になろうと思つて、これでも蔭ながら尽力し
てゐるんですよ」と野のだが人間並なみの事を云つた。野だ
のお世話になるくらいなら首を縊くくつて死んじまわあ。

「それでね、生徒は君の来たのを大変歓迎かんげいしているん
だが、そこにはいろいろな事情があつてね。君も腹の
立つ事もあるだろうが、ここが我慢がまんだと思つて、辛防しんぼう
してくれたまえ。決して君のためににならないような事
はしないから」

「いろいろの事情た、どんな事情です」

「それが少し込み入つてゐるんだが、まあだんだん分りますよ。僕^{ぼく}が話さないでも自然と分つて来るです、ね

吉川君」

「ええなかなか込み入つてますからね。一朝一夕にや到底分りません。しかしだんだん分ります、僕が話さないでも自然と分つて来るです」と野だは赤シャツと同じような事を云う。

「そんな面倒^{めんどう}な事情なら聞かなくてもいいんですが、あなたの方から話し出したから伺^{うかが}うんです」

「そりやごもつともだ。こつちで口を切つて、あとを

つけないのは無責任ですね。それじゃこれだけの事を云つておきましょう。あなたは失礼ながら、まだ学校を卒業したてで、教師は始めての、経験である。ところが学校というものはなかなか情実のあるもので、そういう書生流に淡泊たんぱくには行ゆかないですからね」

「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」

「さあ君はそう率直だから、まだ経験に乏とぼしいと云うんですがね……」

「どうせ経験には乏しいはずです。履歴書りれきしょにもかいときましたが一十三年四ヶ月ですから」

「さ、そこで思わぬ辺から乗ぜられる事があるんです」
 「正直にしていれば誰だれが乗じたつて怖こわくはないです」
 「無論怖くはない、怖くはないが、乗ぜられる。現に
 君の前任者がやられたんだから、気を付けないとけ
 ないと云うんです」

野おとだが大人しくなつたなど気が付いて、ふり向いて
 見ると、いつしか艤ともの方で船頭と釣の話をしている。
 野だが居ないんでよつぽど話しよくなつた。

「僕の前任者が、誰だれに乗せられたんです」

「だれと指すと、その人の名誉に関係するから云えな

い。また判然と証拠のない事だから云うとこつちの落度になる。とにかく、せつかく君が来たもんだから、ここで失敗しちゃ僕等ぼくらも君を呼んだ甲斐かいがない。どうか気を付けてくれたまえ」

「気を付けろつたつて、これより気の付けようはあります。わるい事をしなけりや好いんでしよう」

赤シャツはホホホホと笑つた。別段おれは笑われるような事を云つた覚えはない。今日ただ今に至るまでこれでいいと堅かたく信じてゐる。考えてみると世間の大半の人はわるくなる事を奨励しょうれいしているようと思う。

わるくならなければ社会に成功はしないものと信じて
 いるらしい。たまに正直な純粹な人を見ると、坊っちゃん
 んだの小僧こぞうだと難癖なんくせをつけて軽蔑けいべつする。それじゃ小
 学校や中学校で嘘うそをつくな、正直にしろと倫理りんりの先生
 が教えない方がいい。いつそ思い切って学校で嘘をつく法とか、人を信じない術とか、人を乗せる策を教授
 する方が、世のためにも当人のためにもなるだろう。
 赤シャツがホホホホと笑ったのは、おれの単純なのを
 笑つたのだ。単純や真率が笑われる世の中じや仕様が
 ない。清はこんな時に決して笑った事はない。大いに

感心して聞いたもんだ。清の方が赤シャツよりよっぽど上等だ。

「無論悪い事をしなければ好いんですが、自分だけ悪い事をしなくっても、人の悪いのが分らなくつちや、やつぱりひどい目に逢うでしょう。世の中には磊落なように見えて、淡泊なように見えて、親切に下宿の世話なんかしてくれても、めつたに油断の出来ないのがありますから……。大分寒くなつた。もう秋ですね、浜の方は靄でセピヤ色になつた。いい景色だ。おい、吉川君どうだい、あの浜の景色は……」と

大きな声を出して野だを呼んだ。なあるほどこりや
 奇絶きぜつですね。時間があると写生するんだが、惜しいで
 すね、このままにしておくのはと野だは大いにたたく。
 港屋の二階に灯が一つついて、汽車の笛がヒューと
 鳴るとき、おれの乗っていた舟は磯いその砂へざぐりと、
 舷へきをつき込んで動かなくなつた。お早うお帰りと、か
 みさんが、浜に立つて赤シャツに挨拶あいさつする。おれは
 船端ふなぼたから、やつと掛声かけごえをして磯へ飛び下りた。

六

野だは大嫌いだ。こんな奴は沢庵石をつけて海の底へ沈めちまう方が日本のためだ。赤シャツは声が気に食わない。あれは持前の声をわざと気取つてあんな優しいように見せてるんだろう。いくら気取つたって、あの面じや駄目だ。惚れるものがあつたつてマドンナぐらいなものだ。しかし教頭だけに野だよりむずかしい事を云う。うちへ帰つて、あいつの申し条を考えて

みると一応もつとものようでもある。はつきりとした事は云わないから、見当がつきかねるが、何でも山嵐やまあらしがよくない奴だから用心しろと云うのらしい。それならそうとはつきり断言するがいい、男らしくもない。そうして、そんな悪わるい教師なら、早く免職めんしょくさしたらよからう。教頭なんて文学士の癖くせに意氣地いくじのないもんだ。蔭口かげぐちをきくのでさえ、公然と名前が云えないくらいな男だから、弱虫に極きまつてる。弱虫は親切なものだから、あの赤シャツも女のような親切ものなんだろう。親切は親切、声は声だから、声が気に入らないつ

て、親切を無にしちゃ筋が違う。それにしても世の中は不思議なものだ、虫の好かない奴が親切で、気のあつた友達が悪漢わるものだなんて、人を馬鹿ばかにしている。大方田舎いなかだから万事東京のさかに行くんだろう。物騒ぶつそうな所だ。今に火事が氷つて、石が豆腐とうふになるかも知れない。しかし、あの山嵐が生徒を煽動するなんて、いたずらをしそうもないがな。一番人望のある教師だと云うから、やろうと思つたら大抵たいていの事は出来るかも知れないが、——第一そんな廻りくどい事をしないでも、じかにおれを捕まえて喧嘩けんかを吹き懸かけりや手数が省ける訳

だ。おれが邪魔になるなら、実はこれこれだ、邪魔だから辞職してくれと云や、よさそうなもんだ。物は相談ずくでどうでもなる。向うの云い条がもつともなら、明日にでも辞職してやる。ここばかり米が出来る訳でもあるまい。どこの果へ行つたつて、のたれ死はしないつもりだ。山嵐もよつほど話せない奴だな。

ここへ来た時第一番に氷水を奢つたのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢つてもらつちゃ、おれの顔に関わる。おれはたつた一杯しか飲まなかつたから一錢五厘しか払わしちゃない。しかし一錢だろ

うが五厘だろうが、詐欺師の恩になつては、死ぬまで心持ちがよくない。あした学校へ行つたら、一錢五厘返しておこう。おれは清から三円借りてゐる。その三円は五年経たつた今日までまだ返さない。返せないんじやない。返さないんだ。清は今に返すだろうなどと、かりそめにもおれの懐中かいちゅうをあてにしてはいない。おれも今に返そなどと他人がましい義理立てはしないつもりだ。こつちがこんな心配をすればするほど清の心を疑ぐるようなもので、清の美しい心にけちを付けると同じ事になる。返さないのは清を踏ふみつけるのじゃ

ない、清をおれの片破れと思うからだ。清と山嵐とはもとより比べ物にならないが、たとい冰水だろうが、甘茶だろうが、他人から恵を受けて、だまつているのは向うをひとかどの人間と見立てて、その人間にに対する厚意の所作だ。割前を出せばそれだけの事で済むところを、心のうちで難有いと恩に着るのは錢金で買える返礼じやない。無位無冠でも一人前の独立した人間だ。独立した人間が頭を下げるのは百万両より尊といお礼と思わなければならぬ。

おれはこれでも山嵐に一錢五厘奮發させて、百万両

より尊とい返礼をした氣でいる。山嵐は難有いと思つてしかるべきだ。それに裏へ廻つて卑劣な振舞をするとは怪しからん野郎だ。あした行つて一錢五厘返してしまえば借りも貸しもない。そうしておいて喧嘩をしてやろう。

おれはここまで考えたら、眠くなつたからぐうぐう寝てしまつた。あくる日は思う仔細しきがあるから、例刻より早ヤ目に出校して山嵐を待ち受けた。ところがなかなか出て来ない。うらなりが出て来る。漢学の先生が出て来る。野だが出て来る。しまいには赤シャツま

で出て来たが山嵐の机の上は白墨はくばくが一本豎たてに寝ている
 だけで閑静かんせいなものだ。おれは、控所ひかえじょへはいるや否や返
 そうと思つて、うちを出る時から、湯銭のように手の
 平へ入れて一銭五厘、学校まで握にぎつて來た。おれは
 膏あぶらつ手だから、開けてみると一銭五厘が汗あせをかいて
 いる。汗をかいてる錢を返しちゃ、山嵐が何とか云う
 だろうと思つたから、机の上へ置いてふうふう吹いて
 また握つた。ところへ赤シャツが来て昨日は失敬、
 迷惑めいわくでしたろうと云つたから、迷惑じゃありません、
 お蔭で腹が減りましたと答えた。すると赤シャツは山

嵐の机の上へ肱を突いて、あの盤台面ひんだいづらをおれの鼻の側面へ持つて来たから、何をするかと思つたら、君昨日返りがけに船の中で話した事は、秘密にしてくれたまえ。まだ誰だれにも話しゃしますまいねと云つた。女のような声を出すだけに心配性な男と見える。話さない事はたしかである。しかしこれから話そうと云う心持ちで、すでに一錢五厘手の平に用意しているくらいだから、ここで赤シャツから口留めをされちや、ちと困る。赤シャツも赤シャツだ。山嵐と名を指さないにしろ、あれほど推察の出来る謎なぞをかけておきながら、今さら

その謎を解いちや迷惑だとは教頭とも思えぬ無責任だ。元来ならおれが山嵐と戦争をはじめて鎧を削つてる真中まんなかへ出て堂々とおれの肩かたを持つべきだ。それでこそ一校の教頭で、赤シャツを着ている主意も立つとうもんだ。

おれは教頭に向むかつて、まだ誰にも話さないが、これから山嵐と談判するつもりだと云つたら、赤シャツは大いに狼狽ろうばいして、君そんな無法な事をしちゃ困る。僕ぼくは堀田君の事について、別段君に何も明言した覚えはないんだから——君がもしここで乱暴を働いてくれる

と、僕は非常に迷惑する。君は学校に騒動を起すつも
りで来たんじやなかろうと妙に常識をはずれた質問を
するから、当あた前まえです、月給をもらつたり、騒動を起
したりしちゃ、学校の方でも困るでしょうと云つた。
すると赤シャツはそれじや昨日の事は君の参考だけに
とめて、口外してくれると汗をかいて依頼いらいに及ぶか
ら、よろしい、僕も困るんだが、そんなんにあなたが迷
惑ならよしましようと受け合つた。君大丈夫だいじょうぶかいと赤
シャツは念を押おした。どこまで女らしいんだか奥行おくゆきが
わからない。文学士なんて、みんなあんな連中ならつ

まらんものだ。辻棲の合わない、論理に欠けた注文をして恬然としている。しかもこのおれを疑ぐつてゐる。憚りながら男だ。受け合つた事を裏へ廻つて反古にするようなさもしい了見はもつてるもんか。

ところへ両隣りの机の所有主も出校したんで、赤シャツは早々自分の席へ帰つて行つた。赤シャツは歩あるき方から気取つてゐる。部屋の中を往来するのでも、音を立てないように靴の底をそつと落す。音を立てないであるくのが自慢になるもんだとは、この時から始めて知つた。泥棒の稽古じやあるまいし、当たり前にす

るがいい。やがて始業の喇叭^{らつぱ}がなつた。山嵐はとうとう出て来ない。仕方がないから、一銭五厘を机の上へ置いて教場へ出掛けた。

授業の都合^{つごう}で一時間目は少し後れて、控所へ帰つたら、ほかの教師はみんな机を控えて話をしている。山嵐もいつの間にか来ている。欠勤だと思つたら遅刻^{ちこく}したんだ。おれの顔を見るや否や今日は君のお蔭で遅刻したんだ。罰金^{ばっきん}を出したまえと云つた。おれは机の上にあつた一銭五厘を出して、これをやるから取つておけ。先達^{せんだつ}て通町で飲んだ氷水の代だと山嵐の前へ置く

と、何を云つてるんだと笑いかけたが、おれが存外
 真面目まじめでいるので、つまらない冗談じょうたんをするなど錢をお
 れの机の上に掃はき返した。おや山嵐の癖くせにどこまでも
 奢る気だな。

「冗談じやない本当だ。おれは君に冰水を奢られる
 因縁いんえんがないから、出すんだ。取らない法があるか」

「そんなに一銭五厘が気になるなら取つてもいいが、
 なぜ思い出したように、今時分返すんだ」

「今時分でも、いつ時分でも、返すんだ。奢られるのが、
 いやだから返すんだ」

山嵐は冷然とおれの顔を見てふんと云つた。赤シャツの依頼がなければ、ここで山嵐の卑劣ひれつをあばいて大喧嘩をしてやるんだが、口外しないと受け合つたんだから動きがとれない。人がこんなに真赤まっかになつてゐるのにふんという理窟りくつがあるものか。

「氷水の代は受け取るから、下宿は出してくれ」

「一錢五厘受け取ればそれでいい。下宿を出ようが出まいがおれの勝手だ」

「ところが勝手でない、昨日、あすこの亭主ていしゅが来て君に出てもらいたいと云うから、その訳を聞いたら亭主

の云うのはもつともだ。それでももう一応たしかめる
つもりで今朝あすこへ寄つて詳くわしい話を聞いてきたん
だ

おれには山嵐の云う事が何の意味だか分らない。

「亭主が君に何を話したんだか、おれが知つてるもん
か。そう自分で極めたつて仕様があるか。訳があ
るなら、訳を話すが順だ。てんから亭主の云う方がもつ
ともだなんて失敬千万な事を云うな」

「うん、そんなら云つてやろう。君は乱暴での下宿
で持て余あまされているんだ。いくら下宿の女房だつて、

下女たあ違うぜ。足を出して拭かせるなんて、威張り過ぎるさ」

「おれが、いつ下宿の女房に足を拭かせた」

「拭かせたかどうか知らないが、とにかく向うじゃ、君に困つてゐるんだ。下宿料の十円や十五円は懸物かけものを一幅売りや、すぐ浮ういてくるつて云つてたぜ」

「利いた風な事をぬかす野郎やろうだ。そんなら、なぜ置いた」「なぜ置いたか、僕は知らん、置くことは置いたんだが、いやになつたんだから、出ろと云うんだろう。君出てやれ」

「当たり前だ。居てくれと手を合せたつて、居るものか。
 一体そんな云い懸りを云うような所へ周旋する君から
 してが不埒だ」

「おれが不埒か、君が大人しくないんだか、どつちか
 だろう」

山嵐もおれに劣らぬ肝癪持ちだから、負け嫌いな大
 きな声を出す。控所に居た連中は何事が始まつたかと
 思つて、みんな、おれと山嵐の方を見て、顎を長くし
 てぼんやりしている。おれは、別に恥ずかしい事をし
 た覚えはないんだから、立ち上がりながら、部屋中一

通り見巡^{みま}わしてやつた。みんなが驚^{おど}ろいてるなかに野
だけは面白そうに笑つっていた。おれの大きな眼^めが、
貴様も喧嘩をするつもりかと云う権幕で、野だの干瓢^{かんびょう}
づらを射貫^{いぬ}いた時に、野だは突然^{とつぜん}眞面目な顔をして、
大いにつつしんだ。少し怖^こわかつたと見える。そのう
ち喇叭^{ホーン}が鳴る。山嵐もおれも喧嘩を中止して教場へ出
た。

午後は、先夜おれに対して無礼を働いた寄宿生の処
分法についての会議だ。会議というものは生れて始め

てだからとんと容子ようすが分らないが、職員が寄つて、たかつて自分勝手な説をたてて、それを校長が好い加減に纏めるのだろう。纏めるというのは黑白こくびやくの決しかねる事柄ことがらについて云うべき言葉だ。この場合のような、誰が見たつて、不都合としか思われない事件に会議をするのは暇潰ひまつぶしだ。誰が何と解釈したつて異説の出ようはずがない。こんな明白なのは即座そくざに校長が処分してしまえばいいに。随分ずいぶん決断のない事だ。校長つてものが、これならば、何の事はない、煮え切らない愚図ぐずの異名だ。

会議室は校長室の隣りにある細長い部屋で、平常は食堂の代理を勤める。黒い皮で張つた椅子が二十脚ばかり、長いテーブルの周囲に並んでちよつと神田の西洋料理屋ぐらいな格だ。そのテーブルの端に校長が坐つて、校長の隣りに赤シャツが構える。あとは勝手次第に席に着くんだそうだが、体操の教師だけはいつも席末に謙遜するという話だ。おれは様子が分らないから、博物の教師と漢学の教師の間へはいり込んだ。向うを見ると山嵐と野だが並んでる。野だの顔はどう考へても劣等だ。喧嘩はしても山嵐の方が遥かに趣が

ある。おやじの葬式の時に小日向の養源寺の座敷にかかるつてた懸物はこの顔によく似ている。坊主に聞いてみたら韋駄天と云う怪物だそうだ。今日は怒つてゐるから、眼をぐるぐる廻しちゃ、時々おれの方を見る。そんな事で威嚇かされてたまるもんかと、おれも負けない氣で、やつぱり眼をぐりつかせて、山嵐をにらめてやつた。おれの眼は恰好はよくないが、大きい事においては大抵な人には負けない。あなたは眼が大きいから役者になるときつと似合いますと清がよく云つたくらいだ。

もう大抵お揃いでしょうかと校長が云うと、書記の川村と云うのが一つ二つと頭数を勘定してみる。一人足りない。一人不足ですがと考えていたが、これは足りないはずだ。^{とうなす}唐茄子のうらなり君が来ていない。おれとうらなり君とはどう云う宿世の因縁かしらないが、この人の顔を見て以来どうしても忘れられない。控所へくれば、すぐ、うらなり君が眼に付く、途中をあるいていても、うらなり先生の様子が心に浮ぶ。^{うか}温泉へ行くと、うらなり君が時々蒼い顔をして湯壺のなかに膨^{ふく}かに膨^{ふく}れている。挨拶^{あいさつ}をするとへえと恐縮して頭を下

げるから氣の毒になる。学校へ出てうらなり君ほど大
人しい人は居ない。めったに笑つた事もないが、余計
な口をきいた事もない。おれは君子という言葉を書物
の上で知つてゐるが、これは字引にあるばかりで、生き
てるものではないと思つてたが、うらなり君に逢つて
から始めて、やつぱり正体のある文字だと感心したく
らいだ。

このくらい関係の深い人の事だから、会議室へはい
るや否や、うらなり君の居ないのは、すぐ気がついた。
実を云うと、この男の次へでも坐すわろうかと、ひそか

に目標にして来たくらいだ。校長はもうやがて見えるでしようと、自分の前にある紫の袱紗包をほどいて、蒟蒻版のような者を読んでいる。赤シャツは琥珀のパイプを絹ハンケチで磨き始めた。この男はこれが道楽である。赤シャツ相当のところだろう。ほかの連中は隣り同志で何だか私語き合つてゐる。手持無沙汰のは鉛筆の尻に着いている、護謨の頭でテーブルの上へしきりに何か書いている。野だは時々山嵐に話しかけるが、山嵐は一向応じない。ただうんとかああと云うばかりで、時々怖い眼をして、おれの方を見る。おれ

も負けずに睨め返す。^{にら}

坊っちゃん

ところへ待ちかねた、うらなり君が氣の毒そうにはいつて来て少々用事がありまして、遅刻致しましたと慇懃に狸に挨拶^{あいさつ}をした。では会議を開きますと狸はまづ書記の川村君に蒟蒻版を配布させる。見ると最初が処分の件、次が生徒取締^{とりしまり}の件、その他一二三ヶ条である。狸は例の通りもつたいぶつて、教育の生靈^{いきりょう}という見えでこんな意味の事を述べた。「学校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡徳^{かとく}の致すところで、何か事件がある度に、自分はよくこれで校長が勤まると

ひそかに慚愧ざんきの念に堪たえんが、不幸にして今回もまたかかる騒動を引き起したのは、深く諸君に向つて謝罪しなければならん。しかしひとたび起つた以上は仕方がない、どうにか処分をせんければならん、事実はすでに諸君のご承知の通りであるからして、善後策について腹蔵のない事を参考のためにお述べ下さい」

おれは校長の言葉を聞いて、なるほど校長だの狸だのと云うものは、えらい事を云うもんだと感心した。こう校長が何もかも責任を受けて、自分の咎とがだとか、不徳だと云うくらいなら、生徒を処分するのは、や

めにして、自分から先へ免職になつたら、よさそくな
 もんだ。そうすればこんな面倒な会議なんぞを開く必
 要もなくなる訳だ。第一常識から云つても分つてゐる。
 おれが大人しく宿直をする。生徒が乱暴をする。わる
 いのは校長でもなけりや、おれでもない、生徒だけに
 極つてゐる。もし山嵐が煽動せんどうしたとすれば、生徒と山嵐
 を退治ればそれでたくさんだ。人の尻を自分で背負い
 込んで、おれの尻だ、おれの尻だと吹き散らかす奴が、
 どこの国にあるもんか、狸でなくつちゃ出来る芸当
 じやない。彼はこんな条理にかなはねて、適わない議論を吐いて、

得意気に一同を見廻した。ところが誰も口を開くものがない。博物の教師は第一教場の屋根に鳥からすがとまつてゐるのを眺めている。漢学の先生は蒟蒻版こんいやくばんを畳たたんだり、延ばしたりして山嵐はまだおれの顔をにらめている。会議と云うものが、こんな馬鹿氣ばかげたものなら、欠席して昼寝でもしている方がましだ。

おれは、じれつたくなつたから、一番大いに弁じてやろうと思つて、半分尻をあげかけたら、赤シャツが何か云い出したから、やめにした。見るとパイプをしまつて、縞しまのある絹ハンケチで顔をふきながら、何か

云つてゐる。あの手巾はきつとマドンナから巻き上げたに相違ない。男は白い麻あさを使うもんだ。「私も寄宿生の乱暴を聞いてはなはだ教頭として不行届ふゆきとどきであります。かつ平常の徳化が少年に及ばなかつたのを深く慚はずるのであります。でこう云う事は、何か陥欠かんけつがあると起るもので、事件その物を見ると何だか生徒だけがわるいようであるが、その真相を極めると責任はかえつて学校にあるかも知れない。だから表面上にあらわれたところだけで厳重な制裁を加えるのは、かえつて未来のためによくないかとも思われます。かつ少年血氣の

ものであるから活氣があふれて、善惡の考えはなく、半ば無意識にこんな悪戯をやる事はないとも限らん。でもとより処分法は校長のお考えにある事だから、私の容喙する限りではないが、どうかその辺をご斟酌になつて、なるべく寛大なお取計を願いたいと思ひます」なるほど狸が狸なら、赤シヤツも赤シヤツだ。生徒があはれるのは、生徒がわるいんじゃない教師が悪いんだと公言している。気狂が人の頭を撲り付けるのは、なぐられた人がわるいから、気狂がなぐるんだそうだ。難有い仕合せだ。活氣にみちて困るなら運動場

へ出て相撲すもうでも取るがいい、半ば無意識に床の中へバツタを入れられてたまるものか。この様子じや寝頸ねくびをかかれても、半ば無意識だつて放免するつもりだろう。

おれはこう考えて何か云おうかなと考えてみたが、云うなら人を驚ろすかように滔々と述べたてなくつちやつまらない、おれの癖として、腹が立つたときには口をきくと、二言か三言で必ず行き塞つまつてしまふ。狸でも赤シャツでも人物から云うと、おれよりも下等だが、弁舌はなかなか達者だから、まずい事を喋舌しゃべつて

揚足あげあしを取られちゃ面白くない。ちよつと腹案を作つてみようと、胸のなかで文章を作つてる。すると前に居た野だが突然起立したには驚ろいた。野だの癖に意見を述べるなんて生意氣だ。野だは例のへらへら調で「實に今回のバツタ事件及び咄喊とつかん事件は吾々心ある職員をして、ひそかに吾校将来の前途に危惧の念を抱かしむるに足る珍事珍事でありまして、吾々職員たるものはこの際奮ふるつて自ら省りみて、全校の風紀を振肅しんしゆくしなければなりません。それでただ今校長及び教頭のお述べになつたお説は、實に肯綮こうけいに中あたつた剝切がいせつなお考えで私は

徹頭徹尾賛成致します。どうかなるべく寛大のご処分を仰ぎたいと思います」と云つた。野だの云う事は言語はあるが意味がない、漢語をのべつに陳列するぎりで訳が分らない。分つたのは徹頭徹尾賛成致しますと云う言葉だけだ。

おれは野だの云う意味は分らないけれども、何だか非常に腹が立つたから、腹案も出来ないうちに起^たち上がつてしまつた。「私は徹頭徹尾反対です……」と云つたがあとが急に出て来ない。「……そんな頓珍漢な、処分は大嫌いです」とつけたら、職員が一同笑い出し

た。「一体生徒が全然悪わるいです。どうしても詫まらせなくつちゃや、癖になります。退校さしても構いません。……何だ失敬な、新しく来た教師だと思つて……」と云つて着席した。すると右隣りに居る博物が「生徒がわるい事も、わるいが、あまり嚴重な罰などをするととかえつて反動を起していけないでしよう。やつぱり教頭のおつしやる通り、寛な方に賛成します」と弱い事を云つた。左隣の漢学は穩便說^{おんびんせつ}に賛成と云つた。歴史も教頭と同説だと云つた。忌々しい、大抵のものは赤シャツ党だ。こんな連中が寄り合つて学校を

立てていりや世話はない。おれは生徒をあやまらせるとか、辞職するか二つのうち一つに極めてるんだから、もし赤シャツが勝ちを制したら、早速うちへ帰つて荷作りをする覚悟でいた。どうせ、こんな手合を弁口で屈伏させる手際はなし、させたところでいつまでご交際を願うのは、こっちでご免だ。学校に居ないとすればどうなつたつて構うもんか。また何か云うと笑うに違いない。だれが云うもんかと澄^{すま}していた。

すると今までだまつて聞いていた山嵐が奮然として、起ち上がつた。野郎また赤シャツ賛成の意を表す

るな、どうせ、貴様とは喧嘩だ、勝手にしろと見てい
ると山嵐は硝子窓を振^{ガラス}わせるような声で「私は教頭及
びその他諸君のお説には全然不同意であります。とい
うものはこの事件はどの点から見ても、五十名の寄宿
生が新来の教師某氏^{ぼうし}を輕侮^{けいぶ}してこれを翻弄^{ほんろう}しようとし
た所^{しょ}為^よとより外には認められんのであります。教頭は
その源因を教師の人物いかんにお求めになるようであ
りますが失礼ながらそれは失言かと思ひます。某氏が
宿直にあたられたのは着後早々の事で、まだ生徒に接
せられてから二十日に満たぬ頃^{ころ}であります。この短か

い二十日間において生徒は君の学問人物を評価し得る余地がないのであります。軽侮されべき至当な理由があつて、軽侮を受けたのなら生徒の行為に斟酌を加える理由もありましようが、何らの原因もないのに新來の先生を愚弄するような軽薄な生徒を寛假しては学校の威信に関わる事と思います。教育の精神は單に学問を授けるばかりではない、高尚な、正直な、武士的な元気を鼓吹すると同時に、野卑な、軽躁な、暴慢な悪風を掃蕩するにあると思想します。もし反動が恐しいの、騒動が大きくなるのと姑息な事を云つた日にはこの

弊風へいふうはいつ矯正きょうせい出来るか知れません。かかる弊風を杜絶とぜつするためこそ吾々はこの学校に職を奉じてゐるので、これを見逃みのがすくらいなら始めから教師にならん方がいいと思います。私は以上の理由で寄宿生一同を厳罰げんばつに処する上に、当該教師の面前において公けに謝罪の意を表せしむるのを至当の所置と心得ます」と云いながら、どんどん腰こしを卸おろした。一同はだまつて何にも言わない。赤シャツはまたパイプを拭ふき始めた。おれは何だか非常に嬉うれしかつた。おれの云おうと思うところをおれの代りに山嵐がすつかり言つてくれたよう

なものだ。おれはこう云う単純な人間だから、今までの喧嘩はまるで忘れて、大いに難有いと云う顔をもつて、腰を卸した山嵐の方を見たら、山嵐は一向知らん面をしている。

しばらくして山嵐はまた起立した。「ただ今ちよつと失念して言い落おとしましたから、申します。当夜の宿直員は宿直中外出して温泉に行かれたようであるが、あれはもつての外の事と考えます。いやしくも自分が一校の留守番を引き受けながら、咎める者のないのを幸さいわいに、場所もあろうに温泉などへ入湯にくなどと

云うのは大きな失体である。生徒は生徒として、この点については校長からとくに責任者にご注意あらん事を希望します」

妙な奴だ、ほめたと思ったたら、あとからすぐ人の失策をあばいでいる。おれは何の気もなく、前の宿直が出あるいた事を知つて、そんな習慣だと思って、つい温泉まで行つてしまつたんだが、なるほどそう云われてみると、これはおれが悪るかつた。攻撃こうげきされても仕方がない。そこでおれはまた起つて「私は正に宿直中に温泉に行きました。これは全くわるい。あやまりま

す」と云つて着席したら、一同がまた笑い出した。それが何か云いさえすれば笑う。つまらん奴等やつらだ。貴様等これほど自分のわるい事を公けにわるかつたと断言出来るか、出来ないから笑うんだろう。

それから校長は、もう大抵ご意見もないようでありますから、よく考えた上で処分しましようと云つた。ついでだからその結果を云うと、寄宿生は一週間の禁足になつた上に、おれの前へ出て謝罪をした。謝罪をしなければその時辞職して帰るところだつたがなまじい、おれのいう通りになつたのでとうとう大変な事に

なつてしまつた。それはあとから話すが、校長はこの時会議の引き続きだと号してこんな事を云つた。生徒の風儀ふうぎは、教師の感化で正していかなくてはならん、その一着手として、教師はなるべく飲食店などに出入しない事にしたい。もつとも送別会などの節は特別であるが、単独にあまり上等でない場所へ行くのはよしたい——たとえば蕎麦屋そばやだの、団子屋だんごやだの——と云いかけたらまた一同が笑つた。野だが山嵐を見て天麩羅てんぷらと云つて目くばせをしたが山嵐は取り合わなかつた。いい氣味きみだ。

おれは脳がわるいから、狸の云うことなんか、よく分らないが、蕎麦屋や団子屋へ行つて、中学の教師が勤まらなくつちや、おれみたような食い心棒にや到底出来つ子ないと思つた。それなら、それでいいから、初手から蕎麦と団子の嫌いなものと注文して雇うがいい。だんまりで辞令を下げておいて、蕎麦を食うな、団子を食うなど罪なお布令ふれいを出すのは、おれのようない外に道楽のないものにとつては大変な打撃だ。すると赤シャツがまた口を出した。「元来中学の教師なぞは社会の上流にくらいするものだからして、単に物質的

の快樂ばかり求めるべきものでない。その方に耽ると
 つい品性にわるい影響を及ぼすようになる。しかし人
 間だから、何か娯楽がないと、田舎いなかへ来て狭い土地で
 は到底暮くらせるものではない。それで釣つりに行くとか、文
 学書を読むとか、または新体詩や俳句を作るとか、何
 でも高尚こうしょうな精神的娯楽を求めなくってはいけない
 ……」

だまつて聞いてみると勝手な熱を吹く。沖おきへ行つて
 肥料こやしを釣つたり、ゴルキが露西亞ロシアの文学者だつたり、
 駢染なじみの芸者が松まつの木の下に立つたり、古池かわへ蛙かわづが飛び

込んだりするのが精神的娯楽なら、天麩羅を食つて団子を呑み込むのも精神的娯楽だ。そんな下さらない娯楽を授けるより赤シャツの洗濯せんたくでもするがいい。あんまり腹が立つたから「マドンナに逢あうのも精神的娯楽ですか」と聞いてやつた。すると今度は誰も笑わない。妙な顔をして互に眼と眼を見合せている。赤シャツ自身は苦しそうに下を向いた。それ見ろ。利いたろう。ただ氣の毒だつたのはうらなり君で、おれが、こう云つたら蒼い顔をますます蒼くした。

七

おれは即夜下宿を引き払つた。^{そくや}宿へ帰つて荷物をまとめていると、女房^{にようぼう}が何か不都合^{ふつごう}でもございましたか、お腹の立つ事があるなら、云つておくれたら改めますと云う。どうも驚ろく。^{おど}世の中にはどうして、こんな要領を得ない者ばかり揃つてるんだろう。出てもらいたいんだか、居てもらいたいんだか分りやしない。^{わか}まいるで氣狂^{きちがい}だ。こんな者を相手に喧嘩^{けんか}をしたつて江戸^{えど}つ

子の名折れだから、車屋をつれて来てさつさと出てきた。

出た事は出たが、どこへ行くというあてもない。車屋が、どちらへ参りますと云うから、だまつて尾^ついて来い、今にわかる、と云つて、すたすたやつて来た。
 面倒^{めんどう}だから山城屋へ行こうかとも考えたが、また出なければならぬから、つまり手数だ。こうして歩いてるうちに下宿とか、何とか看板のあるうちを目付け出すだろう。そうしたら、そこが天意に叶^{かな}つたわが宿と云う事にしよう。とぐるぐる、閑静^{かんせい}で住みよさそう

な所をあるいているうち、とうとう鍛冶屋町へ出てしまつた。ここは士族屋敷にぎやしきで下宿屋などのある町ではないから、もつと賑にぎやかな方へ引き返そうかとも思つたが、ふといい事を考え付いた。おれが敬愛するうらなり君はこの町内に住んでいる。うらなり君は土地の人で先祖代々の屋敷ひかを控ひかえているくらいだから、この辺の事情には通じているに相違そうない。あのを尋ねて聞いたら、よさそうな下宿を教えてくれるかも知れない。幸さいわい一度挨拶あいさつに来て勝手は知つてゐるから、搜さがしてあるく面倒はない。ここだろうと、いい加減に見当をつけ

て、ご免ご免と二返ばかり云うと、奥から五十ぐらいな年寄としよりが古風な紙燭しそくをつけて、出て來た。おれは若い女も嫌いではないが、年寄を見ると何だかなつかしい心持ちがする。大方清きよがすきだから、その魂たましいが方々のお婆ばあさんに乗り移るんだろう。これは大方うらなり君のかおつ母かさんだろう。切り下さげの品格のある婦人めんじんだが、よくうらなり君に似ている。まあお上がりと云うところを、ちよつとお目にかかりたいからと、主人を玄関げんかんまで呼び出して実はこれこれが君どこか心当たりはありませんかと尋ねてみた。うらなり先生それはさぞお

困りでございましょう、としばらく考えていたが、この裏町に萩野はぎのと云つて老人夫婦ぎりで暮らしているものがある、いつぞや座敷ざしきを明けておいても無駄むだだから、たしかな人たのがあるなら貸してもいいから周旋しゅうせんしてくれと頼んだ事がある。今でも貸すかどうか分らんが、まあいっしょに行つて聞いてみましようと、親切に連れて行つてくれた。

その夜から萩野の家の下宿人となつた。おどろ驚いたのは、おれがいか銀の座敷を引き払うと、翌日あくるひから入れ違ちがいに野だが平気な顔をして、おれの居た部屋を占領せんりょうした

事だ。さすがのおれもこれにはあきれた。世の中はいかさま師ばかりで、お互^{たがい}に乗せつこをしているのかも知れない。いやになつた。

世間^{せけん}がこんなものなら、おれも負けない氣で、世間並^{ななみ}にしなくちや、遣りきれない訳^やになる。巾着切^きの上前^{うへ}をはねなければ三度のご膳^{ぜん}が戴^{いただ}けないと、事が極^きまればこうして、生きてるのも考え方だ。と云つてひんぴんした達者^{たつしや}ながらだで、首を縊^{くく}つちや先祖^{せんそ}へ済^まらない上^うに、外聞^{ほかみ}が悪い。考えると物理学校などへはいつて、数学なんて役にも立たない芸^げを覚えるよりも、

六百円を資本にして牛乳屋もとででも始めればよかつた。そ
うすれば清もおれの傍そばを離はなれずに済むし、おれも遠く
から婆さんそばの事を心配しずに暮くらされる。いつしよに居
るうちは、それでもなかつたが、こうして田舎いなかへ来て
みると清はやつぱり善人だ。あんな氣立きだてのいい女は日
本中さがして歩いたつてめつたにはない。婆さん、お
れの立つときに、少々風邪かぜを引いていたが今頃いまごろはどう
してるか知らん。先だつての手紙を見たらさぞ喜んだ
ろう。それにしても、もう返事がきそななものだが
——おれはこんな事ばかり考えて一三日暮していた。

気になるから、宿のお婆さんに、東京から手紙は来ませんかと時々尋ねてみるが、聞くたんびに何にも参りませんと氣の毒そうな顔をする。こここの夫婦はいか銀とは違つて、もとが士族だけに双方共上品だ。爺さんが夜になると、変な声を出して謡をうたうには閉口するが、いか銀のようにお茶を入れましようと無暗に出て来ないから大きに楽だ。お婆さんは時々部屋へ来ていろいろな話をする。どうして奥さんをお連れなさつて、いつしょにお出でなんだのぞなもしなどと質問をする。奥さんがあるように見えますかね。可哀想

にこれでもまだ二十四ですぜと云つたらそれでも、あなた二十四で奥さんがおありなさるのは当たり前ぞなもしど冒頭ぼうとうを置いて、どこの誰さんは二十でお嫁よめをお貰もらいたの、どこの何とかさんは二十二で子供をふたり一人お持ちたのと、何でも例を半ダースばかり挙げて反駁はんばくを試みたには恐れ入つた。それじゃ僕ぼくも二十四でお嫁をお貰いるけれ、世話ををしておくれんかなと田舎言葉を真似まねて頼んでみたら、お婆さん正直に本当かなもしと聞いた。

「本当の本当のつて僕あ、嫁が貰いたくつて仕方がな

いんだ

「そうじやろうがな、もし。若いうちは誰もそんなものじやけれ」この挨拶には痛み入つて返事が出来なかつた。

「しかし先生はもう、お嫁がおありなさるに極きまつとら
い。私はちゃんと、もう、睨ねらんどるぞなもし」

「へえ、活眼かつがんだね。どうして、睨らんどるんですか」

「どうしてて。東京から便りはないか、便りはない
かてて、毎日便りを待ち焦こがれておいでるじゃないか
なもし」

「こいつあ驚いた。大変な活眼だ」

「中あたりましたろうがな、もし」

「そうですね。中あたつたかも知れませんよ」

「しかし今時の女子は、昔むかしと違ちがうて油断ゆだんが出来んけれ、
お気をお付けたがええぞなもし」

「何ですかい、僕の奥さんが東京で間男まんのでもこしらえて
いますかい」

「いいえ、あなたの奥さんはたしかじやけれど……」

「それで、やつと安心した。それじゃ何を気を付ける
んですい」

「あなたのはたしか——あなたのはたしかじゃが——」

「どこに不たしかなのが居ますかね」

「ここ等らにも大分居おります。先生、あの遠山のお嬢さんをご存知かなもし」

「いいえ、知りませんね」

「まだご存知ないかなもし。ここらであなた一番の別嬪べっぴんさんじやがなもし。あまり別嬪さんじやけれ、学校の先生方はみんなマドンナマドンナと言うといでるぞなもし。まだお聞きんのかなもし」

「うん、マドンナですか。僕芸者げいしゃの名かと思つた」

「いいえ、あなた。マドンナと云うと唐人の言葉で、別嬪さんの事じやろうがなもし」

「そうかも知れないね。驚いた」

「大方画学の先生がお付けた名ぞなもし」

「野だがつけたんですかい」

「いいえ、あの吉川よしかわ先生がお付けたのじやがなもし」

「そのマドンナが不たしかなんですかい」

「そのマドンナさんが不たしかなマドンナさんでな、

もし」

「厄介やっかいだね。渾名あだなの付いてる女にや昔から碌ろくなものは

居ませんからね。 そうかも知れませんよ」

「ほん本当にそうじやなもし。 鬼神のきじんお松まつじやの、姫ひめのだつきお百もんじやのてこわ怖おそい女めが居ゐりましたなもし」

「マドンナもその同類なんですかね」

「そのマドンナさんさんがなもし、あなた。そらあの、あなたをここへ世話よめをしておくれた古賀先生こがせんなもし—— あの方のうほうの所ところへお嫁よめに行く約束やくそくが出来できていたのじやがなもし——」

「へえ、不思議ふしきぎなもんですね。あのうらなり君くんが、そんな艶福えんぷくのある男おとことは思おもわなかつた。人は見懸みかけによ

らない者だな。ちつと気を付けよう」

「ところが、去年あすこのお父さんが、お亡くなりて、
——それまではお金もあるし、銀行の株も持つてお出
るし、万事都合がよかつたのじゃが——それからとい
うものは、どういうものか急に暮し向きが思わしくな
くなつて——つまり古賀さんがあまりお人が好過ぎる
けれ、お欺だまされたんぞなもし。それや、これやでお
輿入こじいれも延びているところへ、あの教頭さんがお出いでて、
是非お嫁にほしいとお云いるのじゃがなもし」

「あの赤シャツですか。ひどい奴やつだ。どうもあのシャ

ツはただのシャツじゃないと思つてた。それから?」
 「人を頼んで懸合かけおうておみると、遠山さんでも古賀さん
 に義理があるから、すぐには返事は出来かねて——
 まあよう考えてみようぐらいの挨拶をおしたのじゃが
 なもし。すると赤シャツさんが、手蔓てづるを求めて遠山さ
 んの方へ出入でいりをおしるようになつて、どうどうあなた、
 お嬢さんを手馴てなづ付けておしまいたのじゃがなもし。赤
 シャツさんも赤シャツさんじやが、お嬢さんもお嬢さ
 んじやてて、みんなが悪わるく云いますのよ。いつたん
 古賀さんへ嫁に行くくて承知をしひきながら、今さら

学士さんがお出でたけれ、その方に替えてて、それじゃ
今日様へ済むまいがなもし、あなた」

「全く済まないね。今日様どころか明日様にも明後日
様にも、いつまで行つたつて済みっこありませんね」
「それで古賀さんにお氣の毒じやてて、お友達の堀田
さんが教頭の所へ意見をしにお行きたら、赤シャツさ
んが、あしは約束のあるものを横取りするつもりはない。
破約になれば貰うかも知れんが、今のところは遠
山家とただ交際をしているばかりじや、遠山家と交際
をするには別段古賀さんに済まん事もなかろうとお云

いるけれど、堀田さんも仕方がなしお戻りたそな。
赤シャツさんと堀田さんは、それ以来折合おりあい^{もど}がわるいと
いう評判ひょうばんぞなもし」

「よくいろいろな事を知つてますね。どうして、そん
な詳くわしい事が分るんですか。感心かんしんしちまつた」
「狭せまいけれ何でも分りますぞなもし」

分り過ぎて困るくらいだ。この容子ようすじやおれの
天麸羅てんぶらや団子だんごの事も知つてるかも知れない。厄介やっかいな所
だ。しかしお蔭様かげさまでマドンナの意味もわかるし、山嵐
と赤シャツの関係もわかるし大いに後学になつた。た

だ困るのはどつちが悪る者だか判然しない。おれのような単純なものには白とか黒とか片づけてもらわないと、どつちへ味方をしていいか分らない。

「赤シャツと山嵐たあ、どつちがいい人ですかね」

「山嵐て何ぞなもし」

「山嵐というのは堀田の事ですよ」

「そりや強い事は堀田さんの方が強そうじゃけれど、しかし赤シャツさんは学士さんじやけれ、働きはある方かたぞな、もし。それから優しい事も赤シャツさんの方が優しいが、生徒の評判は堀田さんがええという

ぞなもし

「つまりどつちがいいんですね」

「つまり月給の多い方が豪いのじゃろうがなもし」

これじゃ聞いたつて仕方がないから、やめにした。それから二三日して学校から帰るとお婆さんがにこにこして、へえお待遠さま。やつと参りました。と一本の手紙を持つて来てゆつくりご覧と云つて出て行つた。取り上げてみると清からの便りだ。符箋が二三枚まいついてるから、よく調べると、山城屋から、いか銀の方へ廻して、いか銀から、萩野へ廻つて來たのである。

その上山城屋では一週間ばかり逗留とうりゅうしている。宿屋とねやだけに手紙まで泊とめるつもりなんだろう。開いてみると、非常に長いもんだ。坊っちゃんの手紙を頂いてから、すぐ返事をかこうと思つたが、あいにく風邪ふうようを引いて一週間ばかり寝ねていたものだから、つい遅おそくなつて済まない。その上今時のお嬢さんのように読み書きが達者でないものだから、こんなまずい字でも、かくのによっぽど骨が折れる。甥おいに代筆を頼もうと思つたが、せつかくあげるのに自分でかかなくっちゃ、坊っちゃんに済まないと思つて、わざわざ下したがきを一返して、

それから清書をした。清書をするには二日で済んだが、下た書きをするには四日かかった。読みにくいかも知れないが、これでも一生懸命にかいだのだから、どうぞしまいまで読んでくれ。という冒頭で四尺ばかり何やらかやら認めてある。なるほど読みにくい。字がまずいばかりではない、大抵平仮名だから、どこで切れ、どこで始まるのだから句読をつけるのによつぽど骨が折れる。おれは焦つ勝ちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は、五円やるから読んでくれと頼まれても断わるのだが、この時ばかりは眞面目になつ

て、始から終まで読み通した。読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味がつながらないから、また頭から読み直してみた。部屋のなかは少し暗くなつて、前の時より見にくく、なつたから、とうとう橡鼻へ出て腰をかけながら鄭寧に拝見した。すると初秋の風が芭蕉の葉を動かして、素肌に吹きつけた帰りに、読みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、しまいわには四尺あまりの半切れがさらりさらりと鳴つて、手を放すと、向うの生垣まで飛んで行きそうだ。おれはそんな事には構つていられない。坊っちゃん

んは竹を割つたような気性だが、ただ肝癩かんしゃくが強過ぎてそれが心配になる。——ほかの人に無暗むやみに渾名あだななんか、つけるのは人に恨うらまれるものとなるから、やたらに使っちゃいけない、もしつけたら、清だけに手紙で知らせろ。——田舎者あは人がわるいそまだから、気をつけてひどい目に遭わないようにしろ。——気候ねびだけ東京より不順に極つてるから、寝冷ねびえをして風邪を引いてはいけない。坊っちゃんの手紙はあまり短過ぎて、容子がよくわからないから、この次にはせめてこの手紙の半分ぐらいの長さのを書いてくれ。——宿屋へ茶

代を五円やるのはいいが、あとで困りやしないか、田舎へ行つて頼りになるはお金ばかりだから、なるべく 儉約けんやくして、万一の時に差支えさしつかないようにななくつちや いけない。——お小遣こづかいがなくて困るかも知れないから、 為替かわせで十円あげる。——先せんだつて坊っちゃんからも らつた五十円を、坊っちゃんが、東京へ帰つて、うち を持つ時の足しにと思つて、郵便局へ預けておいたが、 この十円を引いてもまだ四十円あるから大丈夫だ。 ——なるほど女と云うものは細かいものだ。

おれが橡鼻で清の手紙をひらつかせながら、考え込こ

んでいると、しきりの襖ふすまをあけて、萩野のお婆さんが晩めしを持つてきた。まだ見てお出いでるのかなもし。えつぽど長いお手紙じやなもし、と云つたから、ええ大事な手紙だから風に吹かしては見、吹かしては見るんだと、自分で也要領を得ない返事をして膳ぜんについた。見ると今夜も薩摩芋さつまいもの煮つけだ。ここいうちは、いか銀よりも鄭寧ていねいで、親切で、しかも上品だが、惜しい事に食い物がまずい。昨日も芋、一昨日も芋で今夜も芋だ。おれは芋は大好きだと明言したには相違ないが、こう立てつづけに芋を食わされては命がつづかない。

うらなり君を笑うどころか、おれ自身が遠からぬうちに、芋のうらなり先生になつちまう。清ならこんな時に、おれの好きな鮓のさし身か、蒲鉾かまぼこのつけ焼を食わせるんだが、貧乏士族ひんぱうのけちん坊まぐろと来ちや仕方がない。どう考へても清といつしよでなくつちあ駄目だめだ。もしあの学校に長くでも居る模様なら、東京から召よび寄せやろう。天麩羅蕎麦そばを食つちやならない、団子を食つちやならない、それで下宿に居て芋ばかり食つて黄色くなつていろなんて、教育者はつらいものだ。ぜんしゅう禅宗坊主だつて、これよりは口に榮耀えようをさせているだろう。

——おれは一皿の芋を平げて、机の抽斗から生卵を二つ出して、茶碗の縁でたたき割つて、ようやく凌いだ。生卵でも營養をとらなくつちあ一週二十一時間の授業が出来るものか。

今日は清の手紙で湯に行く時間が遅くなつた。しかし毎日行きつけたのを一日でも欠かすのは心持ちがわるい。汽車にでも乗つて出懸けようと、例の赤手拭をぶら下げて停車場まで来ると二三分前に発車したばかりで、少々待たなければならぬ。ベンチへ腰を懸けて、敷島を吹かしていると、偶然にもうらなり君がやって

来た。おれはさつきの話を聞いてから、うらなり君がなおさら気の毒になつた。ふだん平常から天地の間に居候をしているように、小さく構えているのがいかにも憐れに見えたが、今夜は憐れどころの騒ぎではない。出来るならば月給を倍にして、遠山のお嬢さんと明日から結婚けっこんさして、一ヶ月ばかり東京へでも遊びにやつてやりたい気がした矢先だから、やお湯ですか、さあ、こつちへお懸けなさいと威勢いせいよく席を譲ゆずると、うらなり君は恐れ入つた体裁で、いえ構うておくれなさるな、と遠慮えんりよだか何だかやつぱり立つてゐる。少し待たなくつ

ちや出ません、草臥くたびれますからお懸けなさいとまた勧めてみた。実はどうかして、そばへ懸けてもらいたかつたくらいに氣の毒でたまらない。それではお邪魔じやまを致しましようとようやくおれの云う事を聞いてくれた。世の中には野だみたように生意氣な、出ないで済む所へ必ず顔にっぽんを出す奴もいる。山嵐のようにおれが居なくつちや日本にっぽんが困るだろうと云うような面を肩かたの上へ載せてる奴もいる。そうかと思うと、赤シャツのようにもコスメチックと色男の問屋をもつて自ら任じているのもある。教育が生きてフロックコートを着ればおれ

になるんだと云わぬばかりの狸たぬきもいる。皆々それ相応に威張つてるんだが、このうらなり先生のように在れどもなきがごとく、人質に取られた人形のように大人しくしているのは見た事がない。顔はふくれていて、こんな結構な男を捨てて赤シャツに靡なびくなんて、マドンナもよつぼど氣の知れないおきやんだ。赤シャツが何ダース寄つたつて、これほど立派な旦那様だんなさまが出来るもんか。

「あなたはどつか悪いんじやありませんか。大分たいぎそうに見えますが……」「いえ、別段これという持

病もないですが……

「そりや結構です。からだが悪いと人間も駄目ですね
「あなたは大分ご丈夫のようですね」

「ええ瘠^やせても病気はしません。病気なんてものあ大嫌いですから」

うらなり君は、おれの言葉を聞いてにやにやと笑つた。

ところへ入口で若々しい女の笑声が聞^{きこ}えたから、何心なく振り返つてみるとえらい奴が来た。色の白い、ハイカラ頭の、背の高い美人と、四十五六の奥さんと

が並んで切符を売る窓の前に立つてゐる。おれは美人の形容などが出来る男でないから何にも云えないが全く美人に相違ない。何だか水晶の珠すいしょうを香水こうすいで暖あつためて、掌てのひらへ握にぎつてみたような、心持ちがした。年寄の方が背は低い。しかしあはよく似てゐるから親子だらう。おれは、や、來たなと思う途端とたんに、うらなり君の事は全然忘れて、若い女の方ばかり見ていた。すると、うらなり君が突然とつぜんおれの隣となりから、立ち上がつて、そろそろ女の方へ歩き出したんで、少し驚いた。マドンナじやないかと思つた。三人は切符所の前で軽く挨拶してゐる。

遠いから何を云つてゐるのか分らない。

坊っちゃん

停車場の時計を見るともう五分で発車だ。早く汽車がくればいいがなど、話し相手が居なくなつたので待ち遠しく思つていると、また一人あわてて場内へ駆け込んで来たものがある。見れば赤シャツだ。何だかべらべら然たる着物へ縮緬ちりめんの帯をだらしなく巻き付けて、例の通り金鎖きんぐさりをぶらつかしている。あの金鎖りは贋物にせものである。赤シャツは誰だれも知るまいと思つて、見せびらかしているが、おれはちゃんと知つてゐる。赤シャツは馳け込んだなり、何かきよろきよろしていたが、

切符売下所の前に話している三人へ慇懃にお辞儀をして、何か二こと、三こと、云つたと思ったたら、急にこつちへ向いて、例のごとく猫足ねこあしにあるいて来て、や君も湯ですか、僕は乗り後れやしないかと思つて心配して急いで来たら、まだ三四分ある。あの時計はたしかかしらんと、自分の金側きんがわを出して、二分ほどちがつてると云いながら、おれの傍そばへ腰おろした。女の方はちつとも見返らないで杖つえの上に顎あごをのせて、正面ばかり眺ながめている。年寄の婦人は時々赤シャツを見るが、若い方は横を向いたままである。いよいよマドンナに違ひ

ない。

坊っちゃん

やがて、ピュード^{汽笛}が鳴つて、車がつく。待ち合せた連中はぞろぞろ吾^われ勝^{がち}に乗り込む。赤シャツはいの一號に上等へ飛び込んだ。上等へ乗つたつて威張れるどころではない、住田^{すみた}まで上等が五錢で下等が三錢だから、わずか二錢違いで上下の区別^{ふんぱつ}がつく。こういうおれでさえ上等を奮發^{にぎ}して白切符を握つてるんでもわかる。もつとも田舎者はけちだから、たつた二錢の出入でもすこぶる苦になると見えて、大抵^{たいてい}は下等へ乗る。赤シャツのあとからマドンナとマドンナのお袋が

233

上等へはいり込んだ。うらなり君は活版で押したように下等ばかりへ乗る男だ。先生、下等の車室の入口へ立つて、何だか躊躇の体であつたが、おれの顔を見るや否や思いきつて、飛び込んでしまつた。おれはこの時何となく氣の毒でたまらなかつたから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ乗り込んだ。上等の切符で下等へ乗るに不都合はなかろう。

温泉へ着いて、三階から、浴衣のなりで湯壺へ下りてみたら、またうらなり君に逢つた。おれは会議や何かでいざと極まるとき、咽喉が塞がつて饒舌れない男だ

が、平常は随分弁ずる方だから、いろいろ湯壺のなかでうらなり君に話しかけてみた。何だか憐れぼくつてたまらない。こんな時に一口でも先方の心を慰めてやるのは、江戸えどっ子の義務だと思つてゐる。ところがいにくうらなり君の方では、うまい具合にこつちの調子に乗つてくれない。何を云つても、えとかいえとかぎりで、しかもそのえといえが大分面倒らしいので、しまいにはどうどう切り上げて、こつちからご免蒙めんこうむつた。

湯の中では赤シャツに逢わなかつた。もつとも風呂の数はたくさんあるのだから、同じ汽車で着いても、

同じ湯壺で逢うとは極まつていない。別段不思議にも思わなかつた。風呂を出てみるといい月だ。町内の両側に柳やなぎが植うわつて、柳の枝えだが丸まい影を往来の中へ落おとしている。少し散歩でもしよう。北へ登つて町のはずれへ出ると、左に大きな門があつて、門の突き当りがお寺で、左右が妓樓ぎろうである。山門のなかに遊廓ゆうかくがあるなんて、前代未聞の現象だ。ちょっとはいってみたいが、また狸から会議の時にやられるかも知れないから、やめて素通りにした。門の並びに黒い暖簾のれんをかけた、小さな格子窓こうしまどの平屋はおれが団子を食つて、しくじつた

所だ。丸提灯に汁粉、お雑煮とかいたのがぶらさがつて、提灯の火が、軒端に近い一本の柳の幹を照らしている。食いたいなど思つたが我慢して通り過ぎた。

食いたい団子の食えないのは情ない。しかし自分の許嫁いいなすけが他人に心を移したのは、なお情ないだろう。うらなり君の事を思うと、団子は愚おろか、三日ぐらい断食だんじきしても不平はこぼせない訳だ。本当に人間ほどあてにならないものはない。あの顔を見ると、どうしたつて、そんな不人情な事をしそうには思えないんだが——うつくしい人が不人情で、冬瓜とうがんの水膨れのような古賀さ

んが善良な君子なのだから、油断が出来ない。淡泊だ
と思つた山嵐は生徒を煽動せんどうしたと云うし。生徒を煽動
したのかと思うと、生徒の処分を校長に逼るし。厭味いやみで練りかためたような赤シャツが存外親切で、おれに
余所ながら注意をしてくれるかと思うと、マドンナを
胡魔化ごまかしたり、胡魔化したのかと思うと、古賀の方が
破談にならなければ結婚は望まないんだと云うし。い
か銀が難癖なんくせをつけて、おれを追い出すかと思うと、す
ぐ野だ公が入れ替わかれたり——どう考へてもあてになら
ない。こんな事を清にかいてやつたら定めて驚く事だ

ろう。箱根の向うだから化物はけものが寄り合つてゐんだと云うかも知れない。

おれは、性來構しようくわいわない性分だから、どんな事でも苦にしないで今日まで凌いで來たのだが、ここへ来てからまだ一ヶ月立つか、立たないうちに、急に世のなかを物騒ぶつそうに思おもい出した。別段際だつた大事件にも出逢はないのに、もう五つ六つ年を取つたような気がする。早く切り上げて東京へ帰るのが一番よかろう。などとそれからそれへ考えて、いつか石橋を渡つて野芹川の堤提^びへ出た。川と云うとえらそうだが実は一間ぐらいな、

ちよろちよろした流れで、土手に沿うて十二丁ほど下ると相生村へ出る。村には觀音様がある。

温泉の町を振り返ると、赤い灯が、月の光の中にかがやいている。太鼓たいこが鳴るのは遊廓に相違ない。川の流れは浅いけれども早いから、神経質の水のようにやたらに光る。ぶらぶら土手の上じょうにあるきながら、約三丁も来たと思つたら、向うに人影ひとかげが見え出した。月に透かしてみると影は二つある。温泉ゆへ来て村へ帰る若い衆しゆかも知れない。それにしては唄うたもうたわない。存外静かだ。

だんだん歩いて行くと、おれの方が早足だと見えて、二つの影法師が、次第に大きくなる。一人は女らしい。おれの足音を聞きつけて、十間ぐらいの距離^{きより}に逼つた時、男がたちまち振り向いた。月は後からさして^{うしろ}いる。その時おれは男の様子を見て、はてなど思った。男と女はまた元の通りにあるき出した。おれは考^かえがあるから、急に全速力で追つ懸けた。先方は何の気もつかず最初の通り、ゆるゆる歩を移している。今は話しそうに手に取るよう^うに聞える。土手の幅は六尺ぐらいだから、並んで行けば三人がようやくだ。おれは苦もな

く後ろから追い付いて、男の袖を擦り抜けざま、二足前へ出した踵をぐるりと返して男の顔を覗き込んだ。月は正面からおれの五分刈^{がり}の頭から頬の辺りまで、会釈もなく照す。男はあつと小声に云つたが、急に横を向いて、もう帰ろうと女を促^{うな}がすが早いか、温泉の町の方へ引き返した。

赤シャツは岡太くて胡魔化すつもりか、気が弱くて名乗り損^{そく}なつたのかしら。ところが狭くて困つてるのは、おればかりではなかつた。

八

赤シャツに勧められて釣^{つり}に行つた帰りから、山嵐を疑ぐり出した。無い事を種に下宿を出ろと云われた時は、いよいよ不埒^{ふらち}な奴^{やつ}だと思つた。ところが会議の席では案に相違^{そうい}して滔々と生徒^{せいと}厳罰論^{げんばつろん}を述べたから、おや変だなど首を捩^{ひね}つた。萩野^{はぎの}の婆^{ばあ}さんから、山嵐が、うらなり君のために赤シャツと談判をしたと聞いた時は、それは感心だと手を拍^うつた。この様子ではわる者

は山嵐じやあるまい、赤シャツの方が曲つてゐるんで、
 好加減な邪推を実しやかに、しかも遠廻しに、おれの
 頭の中へ浸み込ましたのではあるまいかと迷つてゐる矢
 先へ、野芹川の土手で、マドンナを連れて散歩なんか
 している姿を見たから、それ以来赤シャツは曲者だと
 極めてしまつた。曲者だか何だかよくは分らないが、
 ともかくも善い男じやない。表と裏とは違つた男だ。
 人間は竹のように真直でなくつちや頼もしくない。真
 直なものは喧嘩をしても心持ちがいい。赤シャツのよ
 うなやさしいのと、親切なのと、高尚なのと、琥珀のパ

イプとを自慢^{じまん} そうに見せびらかすのは油断が出来ない、めったに喧嘩も出来ないと思った。喧嘩をしても、回向院の相撲^{すもう} のような心持ちのいい喧嘩は出来ないと思つた。そうなると一銭五厘の出入^{でいり}で控所全体を驚ろかした議論の相手の山嵐の方がはるかに人間らしい。会議の時に金壺眼^{かなつぼまなこ} をぐりつかせて、おれを睨^{にら}めた時は憎い奴だと思つたが、あとで考えると、それも赤シャツのねちねちした猫撫声^{ねこなでごえ} よりはましだ。実はあの会議が済んだあとで、よっぽど仲直りをしようかと思つて、一こと二こと話しかけてみたが、野郎返事もしないで、

まだ眼めを剥むくつてみせたから、こつちも腹が立つてそのままにしておいた。

それ以来山嵐はおれと口を利かない。机の上へ返した一銭五厘はいまだに机の上に乗つてゐる。ほこりだらけになつて乗つてゐる。おれは無論手が出せない、山嵐は決して持つて帰らない。この一銭五厘が一人の間の墙壁になつて、おれは話そうと思つても話せない、山嵐は頑がんとして黙だまつてゐる。おれと山嵐には一銭五厘が祟つた。しまいには学校へ出て一銭五厘を見るのが苦になつた。

山嵐とおれが絶交の姿となつたに引き易えて、赤シャツとおれは依然として在来の関係を保つて、交際をつづけている。野芹川で逢つた翌日などは、学校へ出ると第一番におれの傍そばへ来て、君今度の下宿はいいですかのまたいつしょに露西亞文学を釣りに行こうじやないかのといろいろな事を話しかけた。おれは少々憎らしかつたから、昨夜は二返逢いましたねと云つたら、ええ停車場ていしゃばで——君はいつでもあの時分出掛けるのでですか、遅いじやないかと云う。野芹川の土手でもお目に懸かかりましたねと喰らわしてやつたら、

いいえ僕はあつちへは行かない、湯にはいつて、すぐ
帰つたと答えた。何もそんなに隠さないでもよからう、
現に逢つてるんだ。よく嘘をつく男だ。これで中学の
教頭が勤まるなら、おれなんか大学総長がつとまる。
おれはこの時からいよいよ赤シャツを信用しなくなつ
た。信用しない赤シャツとは口をきいて、感心してい
る山嵐とは話をしない。世の中は随分妙なものだ。

ある日の事赤シャツがちよつと君に話があるから、
僕のうちまで来てくれと云うから、惜しいと思つたが
温泉行きを欠勤して四時頃出掛けで行つた。赤シャツ

は一人ものだが、教頭だけに下宿はとくの昔に引き
 払つて立派な玄関を構えている。家賃は九円五拾錢だ
 そうだ。田舎へ来て九円五拾錢払えばこんな家へはい
 れるなら、おれも一つ奮発して、東京から清を呼び寄
 せて喜ばしてやろうと思つたくらいな玄関だ。頼むと
 云つたら、赤シャツの弟が取次に出で來た。この弟は
 学校で、おれに代数と算術を教わる至つて出来のわる
 い子だ。その癖渡りものだから、生れ付いての田舎者
 よりも人が悪い。

赤シャツに逢つて用事を聞いてみると、大将例の琥

珀のパイプで、きな臭い烟草をふかしながら、こんな事を云つた。「君が来てくれてから、前任者の時代よりも成績^{せいせいき}がよくあがつて、校長も大いにいい人を得たと喜んでいるので——どうか学校でも信頼^{しんらい}しているのだから、そのつもりで勉強していただきたい」「へえ、そうですか、勉強つて今より勉強は出来ませんが——」

「今のくらいで充分^{じゅうぶん}です。ただ先だつてお話しした事ですね、あれを忘れずにいて下さればいいのです」「下宿の世話なんかするものあ剣呑^{けんのん}だという事ですか」

「そう露骨ろこつに云うと、意味もない事になるが——まあ
善いさ——精神は君にもよく通じてゐる事と思うか
ら。そこで君が今のように出精しゅつせいして下されば、学校の
方でも、ちゃんと見て いるんだから、もう少しして
都合つごうさえつけば、待遇たいぎょうの事も多少はどうにかなるだろ
うと思うんですがね」

「へえ、俸給ほうきゅうですか。俸給なんかどうでもいいんですが、
上がれば上がった方がいいですね」

「それで幸い今度転任者が一人出来るから——もつと
も校長に相談してみないと無論受け合えない事だが

——その俸給から少しは融通が出来るかも知れないか
ら、それで都合をつけるように校長に話してみようと思
うんですけどね」

「どうも難有ありがとう。だれが転任するんですか」

「もう発表になるから話しても差し支えつかえないでしよう。
実は古賀君です」

「古賀さんは、だつてここの人じやありませんか」

「こここの地じの人ですが、少し都合があつて——半分は
当人の希望です」

「どこへ行くんです」

「日向の延岡で——土地が土地だから一級俸上つて行く事になりました」

「誰か代りが来るんですか」

「代りも大抵極まつてるんです。その代りの具合で君の待遇上の都合もつくんです」

「はあ、結構です。しかし無理に上がらないでも構いません」

「とも角も僕は校長に話すつもりです。それで校長も同意見らしいが、追つては君にもつと働いて頂だかなくつてはならんようになるかも知れないから、どうか

今からそのつもりで覚悟をしてやつてもらいたいです
かくご

ね

「今より時間でも増すんですか」

「いいえ、時間は今より減るかも知れませんが——」
「時間が減つて、もつと働くんですか、妙だな」

「ちょっと聞くと妙だが、——判然とは今言いにく
いが——まあつまり、君にもつと重大な責任を持つても
らうかも知れないという意味なんです」

おれには一向分らない。今より重大な責任と云えば、
数学の主任だろうが、主任は山嵐だから、やつこさん

なかなか辞職する気遣いはない。それに、生徒の人望があるから転任や免職^{めんしょく}は学校の得策であるまい。赤シャツの談話はいつでも要領を得ない。要領を得なくつても用事はこれで済んだ。それから少し雑談をしているうちに、うらなり君の送別会をやる事や、ついではおれが酒を飲むかと云う問や、うらなり先生は君子で愛すべき人だと云う事や——赤シャツはいろいろ弁じた。しまいに話をかえて君俳句をやりますかと來たから、こいつは大変だと思つて、俳句^{ほつく}はやりません、さようならと、そこのに帰つて來た。発句^{ほつく}は芭蕉^{ばしょう}か

髪結床の親方のやるもんだ。数学の先生が朝顔やに釣瓶つるべをとられてたまるものか。

帰つてうんと考え込んだ。世間には随分氣の知れない男が居る。家屋敷はもちろん、勤める学校に不足のない故郷がいやになつたからと云つて、知らぬ他国へ苦労を求めに出る。それも花の都の電車が通かよつてる所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の事だ。おれは船つきのいいここへ来てさえ、一ヶ月立たないうちにもう帰りたくなつた。延岡と云えれば山の中も山の中も大変な山の中だ。赤シャツの云うところによると船

から上がつて、一日馬車へ乗つて、宮崎へ行つて、宮崎からまた一日車へ乗らなくつては着けないそうだ。名前を聞いてさえ、開けた所とは思えない。猿と人が半々に住んでるような気がする。いかに聖人のうらなり君だつて、好んで猿の相手になりたくもないだろうに、何という物数奇だ。

ところへあいかわらず婆さん^{ばあ}が夕食^{ゆうめし}を運んで出る。今日もまた芋^{いも}ですかいと聞いてみたら、いえ今日はお豆腐^{とうふ}ぞなもしと云つた。どつちにしたつて似たものだ。「お婆さん古賀さんは日向へ行くそうですね」

「ほん当にお氣の毒じやな、もし」
「お氣の毒だつて、好んで行くんなら仕方がないです
ね」

「好んで行くて、誰がぞなもし」

「誰がぞなもしつて、当人がさ。古賀先生が物数奇に
行くんじゃありませんか」

「そりやあなた、大違ひの勘五郎ぞなもし」

「勘五郎かね。だつて今赤シャツがそう云いましたぜ。
それが勘五郎なら赤シャツは嘘つきの法螺右衛門だ」
「教頭さんが、そうお云いるのはもつともじやが、古

賀さんのお往^いきともないのももつともぞなもし」

「そんなら両方もつともなんですね。お婆さんは公平でいい。一体どういう訳なんですか」

「今朝古賀のお母さんが見えて、だんだん訳をおしゃたがなもし」

「どんな訳をお話したんです」

「あそこもお父さんがお亡くなりてから、あたし達が思うほど暮^{くら}し向^{むき}が豊かになうてお困りじゃけれ、お母さんが校長さんにお頼みて、もう四年も勤めているものじやけれ、どうぞ毎月頂くものを、今少しふやして

おくれんかてて、あなた

「なるほど」

「校長さんが、ようまあ考えてみとこうとお云いたげな。それでお母さんも安心して、今に増給のご沙汰さたがあろぞ、今月か来月かと首を長くして待つておいでたところへ、校長さんがちよつと来てくれと古賀さんにお云いるけれ、行つてみると、氣の毒だが学校は金が足りんけれ、月給を上げる訳にゆかん。しかし延岡になら空いた口があつて、そつちなら毎月五円余分にとれるから、お望み通りでよからうと思うて、その手続

きにしたから行くがええと云われたげな。——

「じゃ相談じやない、命令じやありませんか」

「さよよ。古賀さんはよそへ行つて月給が増すより、元のままでもええから、ここに居りたい。屋敷もあるし、母もあるからとお頼みたけれども、もうそう極めたあとで、古賀さんの代りは出来てているけれ仕方がないと校長がお云いたげな」

「へん人を馬鹿にしてら、面白くもない。じゃ古賀さんは行く気はないんですね。どうれで変だと思つた。五円ぐらい上がつたつて、あんな山の中へ猿のお相手を

とうへんぱく

しに行く唐変木はまずないからね」

「唐変木て、先生なんぞなもし」

「何でもいいでさあ、——全く赤シャツの作略さりやくだね。よくない仕打しうちだ。まるで欺撃だましうちですね。それでおれの月給を上げるなんて、不都合ふつごうな事があるものか。上げてやるつたつて、誰が上がつてやるものか」

「先生は月給がお上りるのかなもし」

「上げてやるつて云うから、断わろうと思うんです」

「何で、お断わりるのぞなもし」

「何でもお断わりだ。お婆さん、あの赤シャツは馬鹿

ですぜ。卑怯ひきょうでさあ

坊っちゃん

263

「卑怯ひきょうでもあんた、月給を上げておくれたら、大人おとなしく頂いておく方が得ぞなもし。若いうちはよく腹の立つものじやが、年をとつてから考えると、も少しの我慢がまんじやあつたのに惜しい事をした。腹立てたためにこないな損くやをしたと悔むのが当たり前じやけれ、お婆の言う事をきいて、赤シャツさんが月給をあげてやろとお言いたら、難有ありがとうと受けておおきなさいや」

「年寄としよりの癖に余計な世話を焼かなくつてもいい。おれの月給は上うえがろうと下しもがろうとおれの月給だ」

婆さんはだまつて引き込んだ。爺さんは呑氣な声を出して謡をうたつてる。謡というものは読んでわかる所を、やむづかしい節をつけて、わざと分らなくする術だろう。あんな者を毎晩飽きずに喰る爺さんの気が知れない。おれは謡どころの騒ぎじやない。月給を上げてやろうと云うから、別段欲しくもなかつたが、入らない金を余しておくのももつたいたいと思つて、よろしいと承知したのだが、転任したくないものを無理に転任させてその男の月給の上^は前を跳ねるなんて不人情な事が出来るものか。当人がもとの通りでいいと

云うのに延岡下りまで落ちさせるとは一体どう云う了見だろう。太宰權帥だざいごんのそつでさえ博多近辺で落ちついたものだ。河合又五郎かあいまたごろうだつて相良さがらでとまつてゐるじゃないか。とにかく赤シャツの所へ行つて断わつて来なくつちあ

気が済まない。

小倉こくらの袴はかまをつけてまた出掛けた。大きな玄関へ突つ立つて頼むと云うと、また例の弟が取次に出て來た。おれの顔を見てまた來たかという眼付めつきをした。用があれば二度だつて三度だつて来る。よる夜なかだつて叩たたき起さないとは限らない。教頭の所へご機嫌伺いにく

るようなおれと見損つてゐるか。これでも月給が入らなければ、玄関でいいからちよつとお目にかかりたいと云つたら奥へ引き込んだ。足元を見ると、畳付きの薄っぺらな、のめりの駒下駄がある。奥でもう万歳ばんざいですよと云う声が聞きこえる。お客様とは野だだなど気がついた。野だでなくては、あんな黄色い声を出して、こんな芸人じみた下駄を穿はくものはない。

しばらくすると、赤シャツがランプを持つて玄関まで出て来て、まあ上がりたまえ、外の人じやない吉川

君だ、と云うから、いえここでたくさんです。ちよつと話せばいいんです、と云つて、赤シャツの顔を見る
と金時のようだ。野だ公と一杯飲んでると見える。

「さつき僕の月給を上げてやるというお話でしたが、
少し考えが変ったから断わりに来たんです」

赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの
顔を眺めたが、とつさの場合返事をしかねて茫然とし
ている。増給を断わる奴が世の中にたつた一人飛び出
して来たのを不審に思つたのか、断わるにしても、今
帰つたばかりで、すぐ出直してこなくつてもよさそう

なものだと、呆れ返つたのか、または双方合併したのか、妙な口をして突つ立つたままである。

「あの時承知したのは、古賀君が自分の希望で転任するという話でしたからで……」

「古賀君は全く自分の希望で半ば転任するんです」

「そうじやないんです、ここに居たいんです。元の月給でもいいから、郷里に居たいのです」

「君は古賀君から、そう聞いたのですか」

「そりや当人から、聞いたんじやありません」

「じゃ誰からお聞きます」

「僕の下宿の婆さんが、古賀さんのおつ母さんから聞いたのを今日僕に話したのです」

「じゃ、下宿の婆さんがそう云つたのですね」

「まあそうです」

「それは失礼ながら少し違うでしよう。あなたのおつしやる通りだと、下宿屋の婆さんの云う事は信するが、教頭の云う事は信じないと云うように聞えるが、そういう意味に解釈して差支えないのでしょうか」

おれはちよつと困つた。文学士なんてものはやつぱりえらいものだ。妙な所へこだわつて、ねちねち押しあ

寄せてくる。おれはよく親父から貴様はそそつかしくて駄目だ駄目だと云われたが、なるほど少々そそつかしいようだ。婆さんの話を聞いてはつと思つて飛び出して來たが、実はうらなり君にもうらなりのおつ母さんにも逢つて詳しい事情は聞いてみなかつたのだ。だからこう文学士流に斬り付けられると、ちょっと受け留めにくい。

正面からは受け留めにくいが、おれはもう赤シャツに対して不信任を心の中^{うち}で申し渡してしまつた。下宿の婆さんもけちん坊^{ぼう}の欲張り屋に相違ないが、嘘は吐^つ

かない女だ、赤シャツのよう裏表はない。おれは仕方がないから、こう答えた。

「あなたの云う事は本当かも知れないですが——とにかく増給はご免蒙ります」

「それはますます可笑しい。今君がわざわざお出になつたのは増俸を受けるには忍びない、理由を見出したからのように聞えたが、その理由が僕の説明で取り去られたにもかかわらず増俸を否まるるのは少し解しかねるようですね」

「解しかねるかも知れませんがね。とにかく断わりま

すよ

「そんなに否^{いや}なら強いてとまでは云いませんが、そう二三時間のうちに、特別の理由もないのに豹変^{ひょうへん}しちゃ、将来君の信用にかかる」

「かかわつても構わないです」

「そんな事はないはずです、人間に信用ほど大切なものはありませんよ。よしんば今一步譲^{ゆず}つて、下宿の主人が……」

「主人じゃない、婆さんです」

「どちらでもよろしい。下宿の婆さんが君に話した事

を事実としたところで、君の増給は古賀君の所得を削けずつて得たものではないでしよう。古賀君は延岡へ行かれる。その代りがくる。その代りが古賀君よりも多少低給で来てくれる。その剩余じょうよを君に廻まわすと云うのだから、君は誰にも気の毒がる必要はないはずです。古賀君は延岡でただ今よりも栄進やくそくされる。新任者は最初からの約束つごうで安くくる。それで君が上がられれば、これほど都合つけあいのいい事はないと思うですがね。いやなら否いやでもいいが、もう一返うちでよく考えてみませんか」

おれの頭はあまりえらくないのだから、いつもなら、相手がこういう巧妙な弁舌を揮えれば、おやそうかな、それじや、おれが間違つてたと恐れ入つて引きさがるのだけれども、今夜はそやは行かない。ここへ来た最初から赤シャツは何だか虫が好かなかつた。途中で親切な女みたような男だと思い返した事はあるが、それが親切でも何でもなさうなので、反動の結果今じやよつぽど厭になつてゐる。だから先がどれほどうまく論理的に弁論を逞くしようとも、堂々たる教頭流にそれを遣り込めようとも、そんな事は構わない。議論の

いい人が善人とはきまらない。遣り込められる方が悪い人とは限らない。表向きは赤シャツの方が重々もつともだが、表向きがいくら立派だつて、腹の中まで惚れさせる訳には行かない。金や威力^{いりょく}や理屈^{りくつ}で人間の心が買える者なら、高利貸でも巡査^{じゅんさ}でも大学教授でも一番人に好かれなくてはならない。中学の教頭ぐらいな論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌いで働くものだ。論法で働くものじゃない。

「あなたの云う事はもつともですが、僕は増給^{ぞうきゆ}がいやになつたんですから、まあ断わります。考えたつて同

じ事です。さようなら」と云いすてて門を出た。頭の上には天の川が一筋かかっている。

九

うらなり君の送別会のあるという日の朝、学校へ出たら、山嵐やまあらしが突然とうぜん、君先だつてはいか銀が来て、君が乱暴して困るから、どうか出るよう話してくれと頼んだから、眞面目まじめに受けて、君に出てやれと話したのだが、あとから聞いてみると、あいつは悪い奴わで、やつたの

よく偽筆へ贋落款などを押して売りつけるそ�だか
 ら、全く君の事も出鱈目に違いない。君に懸物や骨董
 を売りつけて、商売にしようと思つてたところが、君
 が取り合わないで儲けがないものだから、あんな作り
 ごとをこしらえて胡魔化したのだ。僕はあの人物を知
 らなかつたので君に大変失敬した勘弁したまえと長々
 しい謝罪をした。

おれは何とも云わずに、山嵐の机の上にあつた、一
 錢五厘をとつて、おれの蝦蟇口のなかへ入れた。山嵐
 は君それを引き込めるのかと不審そうに聞くから、う

んおれは君に奢^{おご}られるのが、いやだつたから、是非返すつもりでいたが、その後だんだん考えてみると、やつぱり奢つてもらう方がいいようだから、引き込ますんだと説明した。山嵐は大きな声をしてアハハハと笑いながら、そんなら、なぜ早く取らなかつたのだと聞いた。実は取ろう取ろうと思つてたが、何だか妙^{みょう}だからそのままにしておいた。近來は学校へ来て一錢五厘を見るのが苦になるくらいいやだつたと云つたら、君はよつぽど負け惜^おしみの強い男だと云うから、君はよつぽど剛情張りだと答えてやつた。それから一人の間に

こんな問答が起つた。

おこ

「君は一体どこの産だ」

「おれは江戸えどっ子だ」

「うん、江戸っ子か、道理で負け惜しみが強いと思つた」

「きみはどこだ」

「僕は会津あいづだ」

「会津つぽか、強情な訳だ。今日の送別会へ行くのかい」

「行くとも、君は？」

「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、浜はままで見送りに行こうと思つてゐるくらいだ」

「送別会は面白いぜ、出て見たまえ。今日は大いに飲むつもりだ」

「勝手に飲むがいい。おれは肴を食つたら、すぐ帰る。酒なんか飲む奴は馬鹿だ」

「君はすぐ喧嘩けんかを吹き懸ける男だ。なるほど江戸っ子の軽跳けいとうな風を、よく、あらわしてやる」

「何でもいい、送別会へ行く前にちよつとおれのうちへお寄り、話はなしがあるから」

山嵐は約束やくそく通りおれの下宿へ寄つた。おれはこの間

から、うらなり君の顔を見る度に氣の毒でたまらなかつたが、いよいよ送別の今日となつたら、何だか憐れつぽくつて、出来る事なら、おれが代りに行つてやりたい様な気がしました。それで送別会の席上で、大いに演説でもしてその行を盛にしてやりたいと思うのだが、おれのべらんめえ調子じや、到底物にならないから、大きな声を出す山嵐を雇つて、一番赤シャツの荒肝あらぎもを挫いでやろうと考え付いたから、わざわざ山嵐を呼んだのである。

おれはまず冒頭としてマドンナ事件から説き出した

が、山嵐は無論マドンナ事件はおれより詳しく述べて、あれは
いる。おれが野芹川の土手の話をして、あれは
馬鹿野郎だと云つたら、山嵐は君はだれを捕まえても
馬鹿呼わりをする。今日学校で自分の事を馬鹿と云つ
たじやないか。自分が馬鹿なら、赤シャツは馬鹿じや
ない。自分は赤シャツの同類じやないと主張した。そ
れじゃ赤シャツは腑抜けの呆助だと云つたら、そうか
もしれないと山嵐は大いに賛成した。山嵐は強い事は
強いが、こんな言葉になると、おれより遙かに字を知つ
ていない。会津っぽなんてものはみんな、こんな、も

のなんだろう。

坊っちゃん

それから増給事件と将来重く登用すると赤シャツが云つた話をしたら山嵐はふふんと鼻から声を出して、それじや僕を免職する考えだなど云つた。免職するつもりだつて、君は免職になる氣かと聞いたら、誰がなるものか、自分が免職になるなら、赤シャツもいつしょに免職させてやると大いに威張つた。どうしていつもよに免職させる気かと押し返して尋ねたら、そこはまだ考えていないと答えた。山嵐は強そなだが、智慧はあまりなさそうだ。おれが増給を断わつたと話した

ら、大将大きに喜んでさすが江戸つ子だ、えらいと賞ほめてくれた。

うらなりが、そんなに厭がつてゐるなら、なぜ留任の運動をしてやらなかつたと聞いてみたら、うらなりから話を聞いた時は、既にきまつてしまつて、校長へ二度、赤シャツへ一度行つて談判してみたが、どうする事も出来なかつたと話した。それについても古賀があまり好人物過ぎるから困る。赤シャツから話があつた時、断然断わるか、一応考えてみますと逃げればいいのに、あの弁舌に胡魔化されて、即席に許諾したも

のだから、あとからお母さんが泣きついても、自分が談判に行つても役に立たなかつたと非常に残念がつた。

今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだろうとおれが云つたら、無論そうに違ひない。あいつは大人おとなしい顔をして、悪事を働いて、人が何か云うと、ちゃんと逃道を拵えて待つてゐるんだから、よっぽど奸物かんぶつだ。あんな奴にかかるては鉄拳制裁てつけんせいさいでなくつちや利かない、瘤こぶだらけの腕うでをまくつてみせた。おれはついでだから、君の腕

は強そうだな柔術じゅうじゅつでもやるかと聞いてみた。すると大将二の腕へ力瘤を入れて、ちょっと攫つかんでみろと云うから、指の先で揉もんでみたら、何の事はない湯屋にある軽石の様なものだ。

おれはあまり感心したから、君そのくらいの腕なら、赤シャツの五人や六人は一度に張り飛ばされるだろうと聞いたら、無論さと云いながら、曲げた腕を伸ばしたり、縮ましたりすると、力瘤がぐるりぐるりと皮のなかで廻転かいてんする。すこぶる愉快ゆかいだ。山嵐の証明する所によると、かんじん縄よりを二本より合せて、この力瘤

の出る所へ巻きつけて、うんと腕を曲げると、ぶつりと切れるそうだ。かんじんよりなら、おれにも出来そうだと云つたら、出来るものか、出来るならやつてみろと来た。切れないと外聞がわるいから、おれは見合せた。

君どうだ、今夜の送別会に大いに飲んだあと、赤シャツと野だを撲なぐつてやらないかと面白半分に勧めてみたら、山嵐はそうだなど考えていたが、今夜はまあようそうと云つた。なぜと聞くと、今夜は古賀に氣の毒だから——それにどうせ撲るくらいなら、あいつらの悪る

い所を見届けて現場で撲らなくつちや、こつちの落度になるからと、分別のありそうな事を附加した。山嵐でもおれよりは考えがあると見える。

じゃ演説をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸っ子のペラペラになつて重みがなくていけない。そうして、きまつた所へ出ると、急に溜飲りゅういんが起つて咽喉のどの所へ、大きな丸たまが上がつて来て言葉が出ないから、君に譲ゆずるからと云つたら、妙な病氣だな、じゃ君は人中じや口は利けないんだね、困るだろう、と聞くから、何そんなに困りやしないと答えておいた。

そうこうするうち時間が来たから、山嵐と一所に会場へ行く。会場は花晨亭といつて、当地で第一等の料理屋だそ�だが、おれは一度も足を入れた事がない。もとの家老とかの屋敷を買い入れて、そのまま開業したという話だが、なるほど見懸からして厳めしい構えだ。家老の屋敷が料理屋になるのは、陣羽織を縫い直して、胴着にする様なのだ。

一人が着いた頃には、人数ももう大概揃つて、五十畳の広間に二つ三つ人間の塊が出来てゐる。五十畳だけに床は素敵に大きい。おれが山城屋で占領した十五

畳敷の床とは比較にならない。尺を取つてみたら二間あつた。右の方に、赤い模様のある瀬戸物の瓶を据えて、その中に松の大きな枝が挿してある。松の枝を挿して何にする気か知らないが、何ヶ月立つても散る気遣いがないから、錢が懸らなくつて、よからう。あの瀬戸物はどこで出来るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物じやありません、伊万里ですと云つた。伊万里だつて瀬戸物じやないかと、云つたら、博物はえへへへへと笑つていた。あとで聞いてみたら、瀬戸で出来る焼物だから、瀬戸と云うのだそうだ。おれは

江戸っ子だから、陶器とうきの事を瀬戸物というのかと思つていた。床の真中に大きな懸物があつて、おれの顔くらいな大きさな字が二十八字かいてある。どうも下手なものだ。あんまり不味まづいから、漢学の先生に、なぜあんなまずいものを麗々と懸けておくんですと尋ねたところ、先生はあれは海屋かいおくといつて有名な書家のかいた者だと教えてくれた。海屋だか何だか、おれは今だに下手だと思つてゐる。

やがて書記の川村がどうかお着席をと云うから、柱があつて靠りかかるのに都合のいい所へ坐すわつた。海屋

の懸物の前に狸が羽織、袴で着席すると、左に赤シャツが同じく羽織袴で陣取つた。右の方は主人公だというのでうらなり先生、これも日本服で控えている。おれは洋服だから、かしこまるのが窮屈だつたから、すぐ胡坐をかいだ。隣りの体操教師は黒ずぼんと、ちゃんととかしこまつていて、体操の教師だけにいやに修行が積んでいる。やがてお膳が出る。徳利が並ぶ。幹事が立つて、一言開会の辞を述べる。それから狸が立つ。赤シャツが起つ。ことごとく送別の辞を述べたが、三人共申し合せたようにうらなり君の、良教師で好人物

な事を吹聴して、今回去られるのはまことに残念である、学校としてのみならず、個人として大いに惜しむところであるが、ご一身上のご都合で、切に転任をご希望になつたのだから致し方がないという意味を述べた。こんな嘘うそについて送別会を開いて、それでちつとも恥はずかしいとも思つていない。ことに赤シャツに至つて三人のうちで一番うらなり君をほめた。この良友を失うのは實に自分にとつて大なる不幸であるとまで云つた。しかもそのいい方がいかにも、もつともらしくつて、例のやさしい声を一層やさしくして、述べ立

てるのだから、始めて聞いたものは、誰でもきつとだ
まさるに極きまつて。マドンナも大方この手で引掛け
たんだろう。赤シャツが送別の辞を述べ立てている最
中、向側むかいがわに坐っていた山嵐がおれの顔を見てちよつと
稻光いなみかりをさした。おれは返電として、人指し指でべつか
んこうをして見せた。

赤シャツが座に復するのを待ちかねて、山嵐がぬつ
と立ち上がったから、おれは嬉うれしかつたので、思わず
手をぱちぱちと拍うつた。すると狸を始め一同がことご
とくおれの方を見たには少々困つた。山嵐は何を云う

かと思うとただ今校長始めことに教頭は古賀君の転任を非常に残念がられたが、私は少々反対で古賀君が一日も早く当地を去られるのを希望しております。延岡は僻遠へきえんの地で、当地に比べたら物質上の不便はあるだろう。が、聞くところによれば風俗のすこぶる淳朴な所で、職員生徒ことごとく上代樸直じょうだいぼくちょくの氣風を帶びてゐるそうである。心にもないお世辞を振りふまつたり、美しい顔をして君子を陥れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君のごとき温良篤厚とうこうの士は必ずその地方一般の歓迎かんげいを受けられるに相違ない。

吾輩は大いに古賀君のためにこの転任を祝するのである。終りに臨んで君が延岡に赴任されたら、その地の淑女にして、君子の好逑となるべき資格あるものを折りで一日も早く円満なる家庭をかたち作つて、かの不貞無節なるお転婆てんばを事実の上において慚死ざんしせしめん事を希望します。えへんえへんと二つばかり大きな咳払せきぱらいをして席に着いた。おれは今度も手を叩たたこうと思つたが、またみんながおれの面かおを見るといやだから、やめにしておいた。山嵐が坐ると今度はうらなり先生が起つた。先生はご鄭寧ていねいに、自席から、座敷の端はしの末座

まで行つて、慇懃に一同に挨拶をした上、今般は一身上の都合で九州へ参る事になりましたについて、諸先生方が小生のためにこの盛大なる送別会をお開き下さつたのは、まことに感銘の至りに堪えぬ次第で——ことにただ今は校長、教頭その他諸君の送別の辞を頂戴して、大いに難有く服膺する訳であります。私はこれから遠方へ参りますが、なにとぞ従前の通りお見捨てなくご愛顧のほどを願います。とへえつく張つて席に戻つた。うらなり君はどこまで人が好いんだか、ほとんど底が知れない。自分がこんなに馬鹿にされて

いる校長や、教頭に恭しくお礼を云つてゐる。それも義理一遍の挨拶ならだが、あの様子や、あの言葉つきや、あの顔つきから云うと、心から感謝しているらしい。こんな聖人に眞面目にお札を云われたら、気の毒になつて、赤面しそうなものだが狸も赤シャツも眞面目に謹聴してゐるばかりだ。

挨拶が済んだら、あちらでもチュー、こちらでもチュー、という音がする。おれも真似をして汁しるを飲んでみたがまずいもんだ。口取に蒲鉾かまぼこはついてるが、どう黒くて竹輪の出来損できそこないである。刺身も並んでるが、

厚くつて鮓の切り身を生で食うと同じ事だ。それでも隣り近所の連中はむしゃむしゃ旨うまいに食っている。

大方江戸前の料理を食つた事がないんだろう。

そのうち燭徳利が頻繁に往来し始めたら、四方が急に賑やかになった。野だ公は恭しく校長の前へ出て盃を頂いてる。いやな奴だ。うらなり君は順々に献酬をして、一巡周るつもりとみえる。はなはだご苦労である。うらなり君がおれの前へ来て、一つ頂戴致しましようと袴のひだを正して申し込まれたから、おれも窮屈にズボンのままかしこまつて、一盃差し上げ

た。せつかく参つて、すぐお別れになるのは残念です
ね。ご出立しゆつたつはいつです、是非浜までお見送りをしましょ
うと云つたら、うらなり君はいえご用多おおのところ決し
てそれには及びませんと答えた。うらなり君が何と
云つたつて、おれは学校を休んで送る気でいる。

それから一時間ほどするうちに席上は大分乱れて来
る。まあ一杯ぱい、おや僕が飲めと云うのに……などと
呂律ろれつの巡りかねるのも一人ひとり一人ふたり出来て來た。少々退屈たいくつ
したから便所へ行つて、昔風な庭を星明りにすかして
眺めていると山嵐が來た。どうださつきの演説はうま

かつたろう。と大分得意である。大賛成だが一ヶ所氣に入らないと抗議を申し込んだら、どこが不賛成だと聞いた。

「美しい顔をして人を陥れるようなハイカラ野郎は延岡に居おらないから……と君は云つたろう」

「うん」

「ハイカラ野郎だけでは不足だよ」

「じゃ何と云うんだ」

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被ねこつかぶりの、香具やし師の、モモンガの、岡つ引きの、わんわん

鳴けば犬も同然な奴とでも云うがいい」

「おれには、そう舌は廻らない。君は能弁だ。第一単語を大変たくさん知つてゐる。それで演舌^{えんぜつ}が出来ないのは不思議だ」

「なにこれは喧嘩^{けんか}のときを使おうと思つて、用心のために取つておく言葉さ。演舌となつちや、こうは出ない」

「そうかな、しかしひらへら出るぜ。もう一遍やつて見たまえ」

「何遍でもやるさいいか。——ハイカラ野郎のペテン

師の、イカサマ師の……」と云いかけていると、櫻側を
どたばた云わして、一人ばかり、よろよろしながら馳^{えんがわ}
け出して來た。

「両君そりゃひどい、——逃げるなんて、——僕が居
るうちは決して逃^{にが}さない、さあのみたまえ。——いか
さま師?——面白い、いかさま面白い。——さあ飲み
たまえ」

とおれと山嵐をぐいぐい引つ張つて行く。実はこの両
人共便所に來たのだが、酔つてるもんだから、便所へ
はいるのを忘れて、おれ等を引つ張るのだろう。酔つ

払いは目の中あたる所へ用事を拵えて、前の事はすぐ忘れてしまうんだろう。

「さあ、諸君、いかさま師を引つ張つて來た。さあ飲ましてくれたまえ。いかさま師をうんと云うほど、酔わしてくれたまえ。君逃げちゃいかん」

と逃げもせぬ、おれを壁際かべぎわへ压おし付けた。諸方を見廻してみると、膳の上に満足な肴の乗つているのは一つもない。自分の分を奇麗きれいに食くい尽つくして、五六間先へ遠征えんせいに出た奴もいる。校長はいつ帰つたか姿が見えない。

ところへお座敷はこぢら? と芸者が三四人はいつて來た。おれも少し驚おどろいたが、壁際へ圧し付けられてゐるんだから、じつとしてただ見ていた。すると今まで床柱とこぼしらへもたれて例の琥珀こはくのパイプを自慢じまんそうに啣くわえていた、赤シャツが急に起たつて、座敷を出にかかつた。向むかうからはいつて來た芸者の一人が、行き違いながら、笑つて挨拶きさつをした。その一人は一番若くて一番奇麗な奴だ。遠くで聞きこえなかつたが、おや今晚はぐらい云つたらしい。赤シャツは知らん顔をして出て行つたぎり、顔を出さなかつた。大方校長のあとを追懸おいしか

て帰つたんだろう。

芸者が來たら座敷中急に陽気になつて、一同が鬨の声を揚げて歓迎したのかと思うくらい、騒々しい。そうしてある奴はなんこを攫む。その声の大きな事、まるで居合抜の稽古のようだ。こつちでは拳を打つてゐよつ、はつ、と夢中で両手を振るところは、ダーク一座の操人形よりよつぱど上手だ。向うの隅ではおいお酌だ、と徳利を振つてみて、酒だ酒だと言い直している。どうもやかましくて騒々しくつてたまらない。そのうちで手持無沙汰に下を向いて考え込んでゐるのは

うらなり君ばかりである。自分のために送別会を開いてくれたのは、自分の転任を惜んでくれるんじゃない。みんなが酒を呑んで遊ぶためだ。自分独りが手持無沙汰で苦しむためだ。こんな送別会なら、開いてもらわない方がよっぽどましだ。

しばらくしたら、めいめい胴間声どうまごえを出して何か唄うたい始めた。おれの前へ来た一人の芸者が、あんた、なんぞ、唄いなはれ、と三味線を抱かかえたから、おれは唄わない、貴様唄つてみろと云いつたら、金や太鼓たいこでねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちゃんちき

りん。叩いて廻つて逢われるものならば、わたしなんぞも、金や太鼓でどんどこ、どんのちゃんちきりんと叩いて廻つて逢いたい人がある、と一た息にうたつて、おおしんどと云つた。おおしんどなら、もつと楽なもののをやればいいのに。

すると、いつの間にか傍そばへ来て坐つた、野だが、鈴ちゃん逢いたい人に逢つたと思つたら、すぐお帰りで、お気の毒さまみたようでげすと相変らず嘶はなし家みたような言葉使いをする。知りまへんと芸者はつんと済ました。野だは頓着とんじやくなく、たまたま逢いは逢いながら

……と、いやな声を出して義太夫の真似をやる。おきなはれやと芸者は平手で野だの膝を叩いたら野だは恐悦して笑つて。この芸者は赤シャツに挨拶をした奴だ。芸者に叩かれて笑うなんて、野だもおめでたい者だ。鈴ちゃん僕が紀伊の国を踊るから、一つ弾いて頂戴と云い出した。野だはこの上まだ踊る氣でいる。向うの方で漢学のお爺さんが歯のない口を歪めて、そりや聞えません伝兵衛さん、お前とわたしのその中は……とまでは無事に済したが、それから? と芸者に聞いている。爺さんなんて物覚えのわるいものだ。

一人が博物を捕まえて近頃こないのが、でけました
ぜ、弾いてみまほうか。よう聞いて、いなはれや——
花月巻かげつまき、白いリボンのハイカラ頭、乗るは自転車、弾
くはヴァイオリン、半可はんかの英語でペラペラと、I am
glad to see you と唄うと、博物はなるほど面白い、英
語入りだねと感心している。

山嵐は馬鹿に大きな声を出して、芸者、芸者と呼ん
で、おれが剣舞けんぶをやるから、三味線を弾けと号令を下
した。芸者はあまり乱暴な声なので、あつけに取られ
て返事もしない。山嵐は委細構わず、ステッキを持つ

て来て、踏破千山万岳烟と眞中へ出て独りで隠し芸を演じている。ところへ野だがすでに紀伊の国を済まして、かつぼれを済まして、棚の達磨さんを済して丸裸の越中禪一つになつて、棕梠箒を小脇に抱い込んで、日清談判破裂して……と座敷中練りあるき出した。まるはだかで氣違ひだ。

おれはさつきから苦しそうに袴も脱がず控えているうらなり君が氣の毒でたまらなかつたが、なんば自分の送別会だつて、越中禪の裸踊まで羽織袴で我慢してみている必要はあるまいと思つたから、そばへ行つて、

古賀さんもう帰りましょと退去を勧めてみた。する
とうらなり君は今日は私の送別会だから、私が先へ
帰つては失礼です、どうぞご遠慮なくと動く景色もな
い。なに構うもんですか、送別会なら、送別会らしく
するがいいです、あの様をご覧なさい。きちがいかい 気狂会です。
さあ行きましようと、進まないのを無理に勧めて、座
敷を出かかるところへ、野だが箒を振り振り進行して
来て、やご主人が先へ帰るとはひどい。日清談判だ。
帰せないと箒を横にして行く手を塞いだ。おれはさつ
きから肝癱かんしゃくが起つてゐるところだから、日清談判なら

貴様はちゃんとちやんちやんだろうと、いきなり拳骨^{けんこつ}で、野だの頭をぽかりと喰^くわしてやつた。野だは二三秒の間毒氣を抜かれた体^{てい}で、ぼんやりしていたが、おやこれはひどい。お撲^ぶちになつたのは情ない。この吉川をご打^{ちよう}擲^{ちやく}とは恐れ入つた。いよいよもつて日清談判だ。とわからぬ事をならべているところへ、うしろから山嵐が何か騒動^{そうどう}が始まつたと見てとつて、剣舞をやめて、飛んできたが、このていたらくを見て、いきなり頸筋^{くびすじ}をうんと攫^{つか}んで引き戻^{もど}した。日清……いたい。いたい。どうもこれは乱暴だと振りもがくところを横に捩^{ねじ}つた

ら、すとんと倒れた。あとはどうなつたか知らない。
途中とちゆうでうらなり君に別れて、うちへ帰つたら十一時過ぎたおだつた。

十

祝勝会で学校はお休みだ。練兵場れんぺいばで式があるというので、狸たぬきは生徒を引率して参列しなくてはならない。おれも職員の一人ひとりとしていつしょにくつづいて行くんだ。町へ出ると日の丸だらけで、まぼしいくらいであ

る。学校の生徒は八百人もあるのだから、体操の教師が隊伍を整えて、一組一組の間を少しづつ明けて、それへ職員が一人か二人ずつ監督として割り込む仕掛けである。仕掛けはすこぶる巧妙なものだが、実際はすこぶる不手際である。生徒は小供の上に、生意氣で、規律を破らなくつては生徒の体面にかかると思つてゐる奴等だから、職員が幾人ついて行つたつて何の役に立つもんか。命令も下さないのに勝手な軍歌をうたつたり、軍歌をやめるとワードと訳もないのに鬨の声を揚げたり、まるで浪人ろうにんが町内をねりあるいてるようなも

のだ。軍歌も鬨の声も揚げない時はがやがや何か喋舌しゃべつてる。喋舌らないでも歩けそうなものだが、日本人はみな口から先へ生れるのだから、いくら小言を云つたつて聞きっこない。喋舌るのもただ喋舌るのではない、教師のわる口を喋舌るんだから、下等だ。おれは宿直事件で生徒を謝罪として、まあこれならよからうと思つていた。ところが実際は大違おおかがいである。下宿の婆ばあさんの言葉を借りて云えば、正に大違おおかがいの勘五郎である。生徒があやまつたのは、心から後悔してあやまつたのではない。ただ校長から、命令されて、

形式的に頭を下げたのである。商人が頭ばかり下げて、狡い事をやめないと一般で生徒も謝罪だけはするが、いたずらは決してやめるものでない。よく考えてみると世の中はみんなこの生徒のようなものから成立しているかも知れない。人があやまつたり詫びたりするのを、眞面目に受けて勘弁するのは正直過ぎる馬鹿と云うんだろう。あやまるのも仮りにあやまるので、勘弁するのも仮りに勘弁するのだと思つてれば差し支えない。もし本当にあやまらせん氣なら、本当に後悔するまで叩きつけなくてはいけない。

おれが組と組の間にはいつて行くと、天麩羅だの、
団子だの、と云う声が絶えずする。しかも大勢だから、
誰だれが云うのだか分らない。よし分つてもおれの事を天
麩羅と云つたんじゃありません、団子と申したのじゃ
ありません、それは先生が神經衰弱だから、ひがんで、
そう聞くんだぐらい云うに極まつてゐる。こんな卑劣な
根性は封建時代から、養成したこの土地の習慣なんだ
から、いくら云つて聞かしたつて、教えてやつたつて、
到底直りっこない。こんな土地に一年も居ると、潔白
なおれも、この真似まねをしなければならなく、なるかも

知らない。向うでうまく言い抜けられるような手段で、
 おれの顔を汚すのを抛つておく、樗蒲一はない。向こ
 うが人ならおれも人だ。生徒だつて、子供だつて、ず
 う体はおれより大きいや。だから刑罰として何か返報
 をしてやらなくつては義理がわるい。ところがこつち
 から返報をする時分に尋常の手段で行くと、向うから
 逆撃を食わして来る。貴様がわるいからだと云うと、
 初手から逃げ路にみちが作つてある事だから滔々と弁じ立てる。
 弁じ立てておいて、自分の方を表向きだけ立派にしてそれからこつちの非を攻撃する。もともと返報に

した事だから、こちらの弁護は向うの非が挙がらない上は弁護にならない。つまりは向うから手を出しておいて、世間体はこつちが仕掛けた喧嘩のよう、見微されてしまう。大変な不利益だ。それなら向うのやるなり、愚迂多良童子を極め込んでいれば、向うはますます增長するばかり、大きく云えば世の中のためにならない。そこで仕方がないから、こつちも向うの筆法を用いて捕まえられないで、手の付けようのない返報をしなくてはならなくなる。そうなつては江戸つ子も駄目だ。駄目だが一年もこうやられる以上は、おれも

人間だから駄目でも何でもそうならなくつちや始末がつかない。どうしても早く東京へ帰つて清といつしよになるに限る。こんな田舎いなかに居るのは堕落だらくしに来ているようなものだ。新聞配達をしたつて、ここまで堕落するよりはましだ。

こう考えて、いやいや、附ついてくると、何だか先鋒せんぽうが急にがやがや騒さわぎ出した。同時に列はぴたりと留まる。変だから、列を右へはずして、向うを見ると、大手町おおてまちを突つき当つて薬師町やくしまちへ曲がる角の所で、行き詰づまつたぎり、押し返したり、押し返されたりして揉もみ

合つてゐる。前方から静かに静かにと声を涸らして来た体操教師に何ですと聞くと、曲り角で中学校と師範学校が衝突したんだと云う。

中学と師範とはどこの県下でも犬と猿のよう^{さる}に仲がわるいそうだ。なぜだかわからないが、まるで氣風が合わない。何かあると喧嘩をする。大方狭い田舎で退屈だから、暇潰しにやる仕事なんだろう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白半分に馳け出して行つた。すると前の方にいる連中は、しきりに何だ地方税の癖^{くせ}に、引き込めど、怒鳴^{どな}つてゐる。後ろか

らは押せ押せと大きな声を出す。おれは邪魔になる生徒の間をくぐり抜けて、曲がり角へもう少しで出ようとした時に、前へ！ と云う高く鋭い号令が聞えたと思つたら師範学校の方は肅々として行進を始めた。先を争つた衝突は、折合がついたには相違ないが、つまり中学校が一步を譲つたのである。資格から云うと師範学校の方が上だそうだ。

祝勝の式はすこぶる簡単なものであつた。旅団長が祝詞を読む、知事が祝詞を読む、参列者が万歳を唱える。それでおしまいだ。余興は午後にあると云う話だ

から、ひとまず下宿へ帰つて、こないだじゅうから、
気に掛つていた、清への返事を書きかけた。今度はもつ
と詳しく述べてくくれとの注文だから、なるべく念入に
認めなくっちゃならない。しかしいざとなつて、半切
を取り上げると、書く事はたくさんあるが、何から書
き出していいか、わからぬ。あれにしようか、あれ
は面倒臭い。これにしようか、これはつまらない。何
か、すらすらと出て、骨が折れなくつて、そうして清
が面白がるようなものはないかしらん、と考えてみると、そんな注文通りの事件は一つもなさそうだ。おれ

は墨を磨つて、筆をしめして、巻紙を睨めて、——巻紙を睨めて、筆をしめして、墨を磨つて——同じ所作を同じように何返も繰り返したあと、おれには、とても手紙は書けるものではないと、諦めて硯の蓋あきら すずり ふたをしてしまつた。手紙なんぞをかくのは面倒臭い。やつぱり東京まで出掛けて行つて、逢あつて話をするのが簡便だ。清の心配は察しないでもないが、清の注文通りの手紙を書くのは三七日の断食だんじきよりも苦しい。

おれは筆と巻紙を抛り出して、ごろりと転がつて肱枕ひじまくらをして庭の方を眺めてみたが、やつぱり清の事が

気にかかる。その時おれはこう思つた。こうして遠くへ来てまで、清の身の上を案じていてやりさえすれば、おれの真心まことは清に通じるに違いない。通じさえすれば手紙なんぞやる必要はない。やらなければ無事で暮してるとと思つてゐるだろう。たよりは死んだ時か病氣の時か、何か事の起つた時にやりさえすればいい訳だ。

庭は十坪とつぼほどの平庭で、これという植木もない。ただ一本の蜜柑みかんがあつて、堀のそとから、目標めい標しゆになるほど高い。おれはうちへ帰ると、いつでもこの蜜柑を眺める。東京を出た事のないものには蜜柑の生つてゐると

ころはすこぶる珍^{めずら}しいものだ。あの青い実がだんだん熟してきて、黄色になるんだろうが、定めて奇麗だろう。今でももう半分色の変つたのがある。婆^{ばあ}さんに聞いてみると、すこぶる水氣の多い、旨^{うま}い蜜柑だそうだ。今に熟^{うれ}たら、たんと召^めし上がれと云つたから、毎日少しずつ食つてやろう。もう三週間もしたら、充分^{じゅうぶん}食べられるだろう。まさか三週間以内にここを去る事もなかろう。

おれが蜜柑の事を考へてゐるところへ、偶然^{ぐうぜん}山嵐^{やまあらし}が話にやつて來た。今日は祝勝会だから、君といつしょ

にご馳走ちそうを食おうと思つて牛肉を買つて來たと、竹の皮の包つつみを袂たもとから引きずり出して、座敷ざしきの真中まんなかへ抛り出した。おれは下宿で芋責いもぜめ豆腐責とうめになつてゐる上、蕎麦屋そばや行き、団子屋だんごや行きを禁じられてる際だから、そいつは結構だと、すぐ婆さんから鍋なべと砂糖をかり込んで、煮方にかたに取りかかつた。

山嵐は無暗むやみに牛肉を頬張りながら、君あの赤シャツが芸者に馴染なじみのある事を知つてゐるかと聞くから、知つてるとも、この間うらなりの送別会の時に來た一人がそうだろうと云つたら、そうだ僕ぼくはこの頃ごろようやく勘

づいたのに、君はなかなか敏捷だと大いにほめた。

坊っちゃん

「あいつは、ふた言目には品性だの、精神的娯楽だのと云う癖くせに、裏へ廻まわつて、芸者と関係なんかつけどる、怪しからん奴やつだ。それもほかの人が遊ぶのを寛容かんようするならいいが、君が蕎麦屋そばやへ行つたり、団子屋だんじやへはいるのさえ取締とりしまり上害じょうがいになると云つて、校長の口を通して注意を加えたじやないか」

「うん、あの野郎の考えじや芸者買は精神的娯楽で、天麩羅や、団子は物理的娯楽なんだろう。精神的娯樂なら、もつと大べらにやるがいい。何だあの様さまは。馴

染の芸者がはいつてくると、入れ代りに席をはずして、逃げるなんて、どこまでも人を胡魔化す氣だから気に食わない。そうして人が攻撃こうげきすると、僕は知らないとか、露西亞文學ロシア文学だとか、俳句が新体詩の兄弟分だとか云つて、人を烟に捲くつもりなんだ。あんな弱虫は男じゃないよ。全く御殿女ごてんじょ中の生れ変りか何かだぜ。ことによると、あいつのおやじは湯島のかげまかもしれない

「湯島のかげ、また何だ」

「何でも男らしくないもんだろう。——君そのとこ

ろはまだ煮えていないぜ。そんなのを食うと縄虫さなだむしが湧わ

くぜ」

「そうか、大抵たいてい大丈夫だいじょうぶだろう。それで赤シャツは人に隠かく
れて、温泉ゆの町の角屋かどやへ行つて、芸者と会見するそ
うだ」

「角屋つて、あの宿屋か」

「宿屋兼料理屋さ。だからあいつを一番へこますため
には、あいつが芸者をつれて、あすこへはいり込むと
ころを見届けておいて面詰めんきつするんだね」

「見届けるつて、夜番よばんでもするのかい」

「うん、角屋の前に枡屋ますやという宿屋があるだろう。あの表二階をかりて、障子しようじへ穴をあけて、見ているのさ」「見ているときに来るかい」

「来るだろう。どうせひと晩じゃいけない。二週間ばかりやるつもりでなくつちゃ」

「随分ずいぶん疲れるぜ。僕あ、おやじの死ぬとき一週間ばかり徹夜てつやして看病した事があるが、あとでぼんやりして、大いに弱つた事がある」

「少しぐらい身体が疲れたって構わんさ。あんな奸物かんぶつをあのままにしておくと、日本のためにならないから、

僕が天に代つて誅戮ちゅうりくを加えるんだ

「愉快ゆかいだ。そう事が極まれば、おれも加勢してやる。

それで今夜から夜番をやるのかい」

「まだ枠屋に懸合かけあつてないから、今夜は駄目だ」

「それじや、いつから始めるつもりだい」

「近々のうちやるさ。いずれ君に報知ほうちをするから、そ
うしたら、加勢してくれたまえ」

「よろしい、いつでも加勢する。僕は計略はかりごとは下手へただが、

喧嘩けんかとくるとこれでなかなかすばしこいぜ」

おれと山嵐がしきりに赤シャツ退治の計略はかりごとを相談し

ていると、宿の婆さんが出て来て、学校の生徒さんが一人、堀田先生にお目にかかりたいてお出でたぞなもし。今お宅へ参じたのじやが、お留守じやけれ、大方ここじやろうてて探し当てお出でたのじやがなもしと、鬪の所へ膝を突いて山嵐の返事を待つて。山嵐はそうですかと玄関まで出て行つたが、やがて帰つて来て、君、生徒が祝勝会の余興を見に行かないかつて誘いに来たんだ。今日は高知から、何とか踊りをして、わざわざここまで多人数乗り込んで来ているのだから、是非見物しろ、めつたに見られない踊だという

んだ、君もいつしょに行つてみたまえと山嵐は大いに乗り気で、おれに同行を勧める。おれは蹠なら東京でたくさん見ている。毎年八幡様(はちまんさま)のお祭りには屋台が町内へ廻つてくるんだから汐酌(しおく)みでも何でもちゃんと心得ていて。土佐っぽの馬鹿蹠なんか、見たくもないと思つたけれども、せつかく山嵐が勧めるもんだから、つい行く気になつて門へ出た。山嵐を誘いに来たものは誰かと思つたら赤シャツの弟だ。妙な奴(みょうやつ)が来たもんだ。

会場へはいると、回向院(えこういん)の相撲(すもう)か本門寺(ほんもんじ)の御会式(おえしき)の

ようく幾旒いくながれとなく長い旗を所々に植え付けた上に、世界万国の国旗をことごとく借りて來たくらい、縄なわから縄にぎ、綱つなから綱わたへ渡わたしかけて、大きな空が、いつになく賑にぎやかに見える。東の隅すみに一夜作りの舞台ぶたいを設けて、ここでいわゆる高知の何とか踊りをやるんだそうだ。舞台を右へ半町ばかりくると葭簾よしすの囲いをして、活花いけばなが陳列ちんれつしてある。みんなが感心して眺めているが、一向くだらないものだ。あんなに草や竹を曲げて嬉うれしがるなら、背虫の色男や、跛ひつこの亭主ていしゆを持つて自慢じまんするが、よからう。

舞台とは反対の方面で、しきりに花火を揚げる。花火の中から風船が出た。帝国万歳ていこくばんざいとかいてある。天主の松の上をふわふわ飛んで営所のなかへ落ちた。次はぽんと音がして、黒い団子が、しょつと秋の空を射抜くように揚あがると、それがおれの頭の上で、ぽかりと割れて、青い烟けむりが傘かさの骨のよう開いて、だらだらと空中に流れ込んだ。風船がまた上がった。今度は陸海軍万歳と赤地に白く染め抜いた奴が風に揺られて、温泉ゆの町から、相生村あいおいむらの方へ飛んでいった。大方觀音様の境内へでも落ちたろう。

式の時はさほどでもなかつたが、今度は大変な人出だ。田舎にもこんなに人間が住んでるかと驚いたぐらいうじやうじやしている。利口な顔はあまり見当らないが、数から云うとたしかに馬鹿に出来ない。そのうち評判の高知の何とか踊が始まつた。踊というから藤間か何ぞのやる踊りかと早合点していたが、これは大間違いであつた。

いかめしい後鉢巻うしろはちまきをして、立つ付け袴たつぱかまを穿いた男が十人ばかりずつ、舞台の上に三列に並んで、その三十人がことごとく抜き身を携げてゐるには魂消たまげた。前列

と後列の間はわずか一尺五寸ぐらいだろう、左右の間隔はそれより短いとも長くはない。たつた一人列を離れて舞台の端に立つてゐるのがあるばかりだ。この仲間外れの男は袴だけはつけてゐるが、後鉢巻は僕約して、拔身の代りに、胸へ太鼓を懸けてゐる。太鼓は太神樂の太鼓と同じ物だ。この男がやがて、いやあ、はああと呑氣な声を出して、妙な謡をうたいながら、太鼓をぼこぼん、ぼこぼんと叩く。歌の調子は前代未聞の不思議なものだ。三河万歳と普陀洛やの合併したものと思えば大した間違いにはならない。

歌はすこぶる悠長なもので、夏分の水飴のように、
 だらしがないが、句切りをとるためにぼこぼんを入れ
 るから、のべつのようでも拍子^{ひょうし}は取れる。この拍子に
 応じて三十人の抜き身がぴかぴかと光るのだが、これ
 はまたすこぶる迅速^{じんそく}なお手際で、拝見していても冷々
 する。隣りも後ろも一尺五寸以内に生きた人間が居て、
 その人間がまた切れる抜き身を自分と同じように振り
 舞^まわすのだから、よほど調子^{そろ}が揃わなければ、同志擊^{どうしうち}
 を始めて怪我^{けが}をする事になる。それも動かないで刀だけ
 前後とか上下とかに振るのなら、まだ危険もないが、

三十人が一度に足踏みをして横を向く時がある。ぐるりと廻る事がある。膝を曲げる事がある。隣りのものが一秒でも早過ぎるか、遅過ぎれば、自分の鼻は落ちるかも知れない。隣りの頭はそがれるかも知れない。抜き身の動くのは自由自在だが、その動く範囲は一尺五寸角の柱のうちにかぎられた上に、前後左右のものと同方向に同速度にひらめかなければならぬ。こいつは驚いた、なかなかもつて汐酌しおくみや閑せきの戸とおよの及ぶところでない。聞いてみると、これははなはだ熟練の入るもので容易な事では、こういう風に調子が合わないそ

うだ。ことにむずかしいのは、かの万歳節のぼこぼん先生だそうだ。三十人の足の運びも、手の働きも、腰の曲げ方も、ことごとくこのぼこぼん君の拍子一つで極まるのだそうだ。はた傍で見ていると、この大将が一番呑気そうに、いやあ、はああと氣楽にうたつてゐるが、その実ははなはだ責任が重くて非常に骨が折れるとは不思議なものだ。

おれと山嵐が感心のあまりこの踊を余念なく見物していると、半町ばかり、向うの方で急にわつと云う鬨の声がして、今まで穏やかに諸所を縦覧していた連中

が、にわかに波を打つて、右左りに搖き始める。喧嘩だ喧嘩だと云う声がすると思うと、人の袖を潛り抜けで来た赤シャツの弟が、先生また喧嘩です、中学の方で、今朝の意趣返しをするんで、また師範の奴と決戦を始めたところです、早く来て下さいと云いながらまた人の波のなかへ潜り込んでどつかへ行つてしまつた。

山嵐は世話の焼ける小僧だまた始めたのか、いい加減にすればいいのにと逃げる人を避けながら一散に馳かけ出した。見ている訳にも行かないから取り鎮めるつ

もりだろう。おれは無論の事逃げる気はない。山嵐の
踵を踏んであとからすぐ現場へ駆けつけた。喧嘩は今
が真最中である。師範の方は五六十人もあるうか、中
学はたしかに三割方多い。師範は制服をつけているが、
中学は式後大抵は日本服に着換えているから、敵味方
はすぐわかる。しかし入り乱れて組んづ、解れつ戦つ
てるから、どこから、どう手を付けて引き分けていい
か分らない。山嵐は困ったなど云う風で、しばらくこ
の乱雑な有様を眺めていたが、こうなつちゃ仕方がな
い。巡回がくると面倒だ。飛び込んで分けようと、お

れの方を見て云うから、おれは返事もしないで、いきなり、一番喧嘩の烈しそうな所へ躍り込んだ。止せ止め。そんな乱暴をすると学校の体面に関わる。よさないかと、出るだけの声を出して敵と味方の分界線らしい所を突つき貫けようとしたが、なかなかそう旨くは行かない。一二間はいつたら、出る事も引く事も出来なくなつた。目の前に比較的大きな師範生が、十五六の中学生と組み合つてゐる。止せと云つたら、止さないかと師範生の肩を持つて、無理に引き分けようとすると途端にだれか知らないが、下からおれの足をすくつた。

おれは不意を打たれて握つた、肩を放して、横に倒れた。堅い靴かたくつでおれの背中の上へ乗つた奴がある。両手と膝を突いて下から、跳ね起きたら、乗つた奴は右の方へころがり落ちた。起き上がつて見ると、三間ばかり向うに山嵐の大きな身体が生徒の間に挟まりながら、止せ止せ、喧嘩は止せ止せと揉み返されてるのが見えた。おい到底駄目だと云つてみたが聞えないのか返事もしない。

ひゅうと風を切つて飛んで来た石が、いきなりおれの頬骨ほおほねへ中あたつたなと思つたら、後ろからも、背中を棒ぼう

でどやした奴がある。教師の癖くせに出ていて、打ぶて打ぶてと云う声がする。教師は一人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を抛なげげる。と云う声もする。おれは、なに生意氣な事をぬかすな、田舎者の癖にと、いきなり、傍そばに居た師範生の頭を張りつけてやつた。石がまたひゅうと来る。今度はおれの五分刈ふがりの頭を掠かすめて後ろの方へ飛んで行つた。山嵐はどうなつたか見えない。こうなつちゃ仕方がない。始めは喧嘩けんかをとめにはいつたんだが、どやされたり、石をなげられたりして、恐おそれ入つて引き下がるうんうんでれがんがあるものか。おれを誰だ

と思うんだ。身長なりは小さくつても喧嘩の本場で修行を積んだ兄さんだと無茶苦茶に張り飛ばしたり、張り飛ばされたりしていると、やがて巡査だ巡査だ逃げろ逃げろと云う声がした。今まで葛練くずねりの中で泳いでるようにならぬかつたのが、急に樂になつたと思つたら、敵も味方も一度に引上げてしまつた。田舎者たいきやくでも退却は巧妙だ。クロパトキンより旨いくらいである。

山嵐はどうしたかと見ると、紋付もんづきの一重羽織ひとつえいぱおりをはずたにして、向うの方で鼻あ�を拭いている。鼻柱はなじゅうをなぐ

られて大分出血したんだそうだ。鼻がふくれ上がりつて真赤になつてすこぶる見苦しい。おれは飛白の袷を着ていたから泥だらけになつたけれども、山嵐の羽織ほどな損害はない。しかし頬ほつぺたがびりびりしてたまらない。山嵐は大分血が出ているぜと教えてくれた。

巡査は十五六名来たのだが、生徒は反対の方面から退却したので、捕まつたのは、おれと山嵐だけである。おれらは姓名を告げて、一部始終を話したら、ともかくも警察まで来いと云うから、警察へ行つて、署長の前で事の顛末を述べて下宿へ帰つた。

十一

あくる日眼めが覚めてみると、身体中からだじゆう痛くてたまらない。久しく喧嘩けんかをしつけなかつたから、こんなに答えるんだろう。これじやあんまり自慢じまんもできないと床のまくらもと中で考えていると、婆ばあさんが四国新聞を持つてきて枕元へ置いてくれた。実は新聞を見るのも退儀たいぎなんだが、男がこれしきの事に閉口へこたれて仕様あるものかと無理に腹はらぼ這いになつて、寝ねながら、二頁を開けてみ

ると驚いた。昨日の喧嘩がちゃんと出ている。喧嘩の出ているのは驚かないのだが、中学の教師堀田某と、近頃東京から赴任した生意氣なる某とが、順良なる生徒を使嗾してこの騒動を喚起せるのみならず、両人は現場にあつて生徒を指揮したる上、みだりに師範生に向つて暴行をほしいままにしたりと書いて、次にこんな意見が附記してある。本県の中学校は昔時より善良温順の気風をもつて全国の羨望するところなりしが、軽薄なる二豎子のために吾校の特権を毀損せられて、この不面目を全市に受けたる以上は、吾人は奮然

として起つてその責任を問わざるを得ず。吾人は信ず、吾人が手を下す前に、当局者は相当の処分をこの無頼漢の上に加えて、彼等をして再び教育界に足に入る余地からしむる事を。そうして一字ごとにみんな黒点を加えて、お灸を据えたつもりでいる。おれは床の中で、糞でも喰らえと云いながら、むつくり飛び起きた。不思議な事に今まで身体の関節が非常に痛かつたのが、飛び起きると同時に忘れたように軽くなつた。

おれは新聞を丸めて庭へ抛げつけたが、それでもま

だ気に入らなかつたから、わざわざ後架こうかへ持つて行つて棄すてて來た。新聞なんて無暗むやみな嘘うそを吐つくもんだ。世の中に何が一番法螺ぼらを吹くと云つて、新聞ほどの法螺吹きはあるまい。おれの云つてしかるべき事をみんな向むこうで並ならべていやがる。それに近頃東京から赴任した生意氣な某とは何だ。天下に某と云う名前の人があるか。考えてみろ。これでもれつきとした姓せいもあり名もあるんだ。系図が見たけりや、多田滿仲ただのまんじゆう以来の先祖ぼつを一人残らず拝ましてやらあ。——顔を洗つたら、頬ほほべたが急に痛くなつた。婆さんに鏡をかせと云つたら、

けさの新聞をお見たかなもしと聞く。読んで後架へ棄てて来た。欲しけりや拾つて来いと云つたら、驚いて引き下がつた。鏡で顔を見ると昨日きのうと同じように傷がついている。これでも大事な顔だ、顔へ傷まで付けられた上へ生意氣なる某などと、某呼ばわりをさればたくさんだ。

今日の新聞に辟易へきえきして学校を休んだなどと云われちゃ一生の名折れだから、飯を食つていの一號に出頭した。出てくる奴やつも、出てくる奴もおれの顔を見て笑っている。何がおかしいんだ。貴様達にこしらえてもらつ

た顔じやあるまいし。そのうち、野だが出て来て、いや昨日はお手柄てがらで、——名誉めいよのご負傷ひじょうでげすか、と送別会の時に撰なぐつた返報と心得たのか、いやに冷かしたから、余計な事を言わずに絵筆なでも舐なめていろと云つてやつた。するところりや恐おそれい入りやした。しかしさぞお痛い事でげしようと云うから、痛かろうが、痛くなからうがおれの面だ。貴様の世話になるもんかと怒鳴どなりつけてやつたら、向う側の自席へ着いて、やつぱりおれの顔を見て、隣となりの歴史の教師と何か内所話ををして笑つてゐる。

それから山嵐が出頭した。山嵐の鼻に至つては、
紫色に膨張して、掘つたら中から膿が出そうに見え
る。自惚のせいか、おれの顔よりよっぽど手ひどく遣
られている。おれと山嵐は机を並べて、隣り同志の近
しい仲で、お負けにその机が部屋の戸口から真正面に
あるんだから運がわるい。妙な顔が一つ塊まつてゐる。
ほかの奴は退屈にさえなるときつとこつちばかり見
る。飛んだ事でと口で云うが、心のうちではこの馬鹿
がと思つてゐに相違ない。それでなければああいう風
に私語合つてはくすくす笑う訳がない。教場へ出ると

生徒は拍手をもつて迎えた。先生万歳と云うものが二三人あつた。景気がいいんだか、馬鹿にされてるんだか分からぬ。おれと山嵐がこんなに注意の焼点となつてゐるなかに、赤シャツばかりは平常の通り傍へ来て、どうも飛んだ災難でした。僕は君等に対しても相談して、の毒でなりません。新聞の記事は校長とも相談して、正誤を申し込む手続きにしておいたから、心配しなくてもいい。僕の弟が堀田君を誘いに行つたから、こんな事が起つたので、僕は実に申し訳がない。それでこの件についてはあくまで尽力するつもりだから、どう

かあしからず、などと半分謝罪的な言葉を並べている。校長は三時間目に校長室から出てきて、困った事を新聞が聞き出しましたね。むずかしくならなければいいがと多少心配そうに見えた。おれには、心配なんかない、先で免職めんしょくをするなら、免職される前に辞表を出してしまうだけだ。しかし自分がわるくないのにこつちから身を引くのは法螺吹きの新聞屋をますます増長させる訳だから、新聞屋を正誤させて、おれが意地にも務めるのが順当だと考えた。帰りがけに新聞屋に談判に行こうと思つたが、学校から取消とりけしの手続きはしたと云う

から、やめた。

坊っちゃん

おれと山嵐は校長と教頭に時間の合間を見計つて、嘘のないところを一応説明した。校長と教頭はそうだろう、新聞屋が学校に恨みを抱いて、あんな記事をことさらに掲げたんだろうと論断した。赤シャツはおれ等の行為を弁解しながら控所を一人ごとに廻つてあるいていた。ことに自分の弟が山嵐を誘い出したのを自分が過失であるかのごとく吹聴していた。みんなは全く新聞屋がわるい、怪しからん、両君は実に災難だと云つた。

帰りがけに山嵐は、君赤シャツは臭いぜ、用心しないとやられるぜと注意した。どうせ臭いんだ、今日から臭くなつたんじやなかろうと云うと、君まだ気が付かないか、きのうわざわざ、僕等を誘い出して喧嘩のなかへ、捲き込んだのは策だぜと教えてくれた。なるほどそこまでは気がつかなかつた。山嵐は粗暴なようだが、おれより智慧のある男だと感心した。

「ああやつて喧嘩をさせておいて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事をかかせたんだ。實に奸物^{かんぶつ}だ」

「新聞までも赤シャツか。そいつは驚いた。しかし新聞が赤シャツの云う事をそう容易^{たやすく}く聞くかね」

「聽かなくつて。新聞屋に友達が居りや訳はないさ」

「友達が居るのかい」

「居なくても訳ないさ。嘘をついて、事実これこれだと話しゃ、すぐ書くさ」

「ひどいもんだな。本当に赤シャツの策なら、僕等はこの事件で免職になるかも知れないね」

「わるくすると、遣^やられるかも知れない」

「そんなら、おれは明日^{あした}辞表を出してすぐ東京へ帰つ

ちまわあ。こんな下等な所に頼んだつて居るのはいやだ

「君が辞表を出したつて、赤シャツは困らない」

「それもそうだな。どうしたら困るだろう」

「あんな奸物の遣る事は、何でも証拠の拳がらないよう、拳がらないよう」と工夫するんだから、反駁するのはむずかしいね

「厄介だな。それじゃ濡衣を着るんだね。面白くもない。
天道是耶非かだ」

「まあ、もう一二日様子を見ようじゃないか。それで

いよいよとなつたら、温泉の町で取つて抑えるより仕
方がないだろう

「喧嘩事件は、喧嘩事件としてか」

「そうさ。こつちはこつちで向うの急所を抑えるのさ」「それもよからう。おれは策略は下手へたなんだから、万事よろしく頼む。いざとなれば何でもする」

俺と山嵐はこれで分れた。赤シャツが果たして山嵐の推察通りをやつたのなら、実にひどい奴だ。到底智慧比べで勝てる奴ではない。どうしても腕力でなくつちや駄目だめだ。なるほど世界に戦争は絶えない訳だ。個

人でも、どの詰りは腕力だ。

あくる日、新聞のくるのを待ちかねて、披いてみると、正誤どころか取り消しも見えない。学校へ行つて狸に催促すると、あしたぐらい出すでしようと云う。明日になつて六号活字で小さく取消が出た。しかし新聞屋の方で正誤は無論しておらない。また校長に談判すると、あれより手続きのしようはないのだと云う筈だ。校長なんて狸のような顔をして、いやにフロツク張つてゐるが存外無勢力なものだ。虚偽の記事を掲げた田舎新聞一つ詫まらせる事が出来ない。あんまり腹

が立つたから、それじゃ私が一人で行つて主筆に談判すると云つたら、それはいかん、君が談判すればまた悪口を書かれるばかりだ。つまり新聞屋にかかれた事は、うそにせよ、本当にせよ、つまりどうする事も出来ないものだ。あきらめるより外に仕方がないと、坊主の説教じみた説諭^{せつゆ}を加えた。新聞がそんな者なら、一日も早く打つ潰^{つぶ}してしまつた方が、われわれの利益だろう。新聞にかかるのと、泥鼈^{すっぽん}に食いつかれるとが似たり寄つたりだとは今日ただ今狸の説明によつて始めて承知^{つかまつ}した。

それから三日ばかりして、ある日の午後、山嵐が憤然とやつて来て、いよいよ時機が来た、おれは例の計画を断行するつもりだと云うから、そうかそれじやおれもやろうと、即座に一味徒党に加盟した。ところが山嵐が、君はよす方がよからうと首を傾けた。なぜと聞くと君は校長に呼ばれて辞表を出せと云われたかと尋ねるから、いや云われない。君は？ と聴き返すと、今日校長室で、まことに気の毒だけれども、事情やむをえんから処決してくれと云われたとの事だ。

「そんな裁判はないぜ。狸は大方腹鼓を叩き過ぎて、

胃の位置が顛倒てんとうしたんだ。君とおれは、いつしょに、祝勝会へ出てさ、いつしょに高知のぴかぴか踊おどりを見てさ、いつしょに喧嘩をとめにはいつたんじやないか。辞表を出せというなら公平に両方へ出せと云うがいい。なんで田舎いなかの学校はそう理窟りくつが分らないんだろう。焦慮じれついな」

「それが赤シャツの指金さしがねだよ。おれと赤シャツとは今までの行懸り上到底とうてい両立しない人間だが、君の方は今通り置いても害にならないと思つてるんだ」「おれだつて赤シャツと両立するものか。害にならな

いと思うなんて生意氣だ」

「君はあまり単純過ぎるから、置いたつて、どうでも
胡魔化されると考へてるのさ」

「なお悪いや。誰が両立してやるものか」

「それに先だつて古賀が去つてから、まだ後任が事故
のために到着しないだろう。その上に君と僕を同時に
追い出しちゃ、生徒の時間に明きが出来て、授業にさ
し支えるからな」

「それじゃおれを間のくさびに一席伺わせる気なんだ
な。こん畜生、だれがその手に乗るものか」

翌日

おれは学校へ出て校長室へ入つて談判を始め

た。

「何で私に辞表を出せと云わないんですか」

「へえ？」と狸はあつけに取られている。

「堀田には出せ、私には出さないで好いと云う法がありますか」

「それは学校の方の都合で……」

「その都合が間違まちがつてまさあ。私が出さなくつて済むなら堀田だつて、出す必要はないでしよう」

「その辺は説明が出来かねますが——堀田君は去られ

てもやむをえんのですが、あなたは辞表をお出しになる必要を認めませんから」

なるほど狸はらだ、要領を得ない事ばかり並べて、しかも落ち付き払つてる。おれは仕様がないから

「それじゃ私も辞表を出しましよう。堀田君一人辞職させて、私が安閑あんかんとして、留まつていられると思つていらつしやるかも知れないが、私にはそんな不人情な事は出来ません」

「それは困る。堀田も去りあなたも去つたら、学校の数学の授業がまるで出来なくなってしまうから……」

「出来なくなつても私の知つた事じやありません」

「君そ^う我儘わがままを云うものじやない、少しほは学校の事情も察してくれなくつちや困る。それに、来てから一月立つか立たないのに辞職したと云うと、君の将来の履歴りれきに關係するから、その辺も少しほは考えたらいいでしよう」

「履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切です」

「そりやごもつとも——君の云うところは一々ごもつともだが、わたしの云う方も少しほは察して下さい。君

が是非辞職すると云うなら辞職されてもいいから、代りのあるまでどうかやつてもらいたい。とにかく、うちでもう一返考え方直してみて下さい」

考え方直すつて、直しようのない明々白々たる理由だが、狸が蒼あおくなつたり、赤くなつたりして、可愛想かわいそうになつたからひとまず考え方直す事として引き下がつた。赤シャツには口もきかなかつた。どうせ遣つづけるなら塊かためて、うんと遣つづける方がいい。

山嵐に狸と談判した模様を話したら、大方そんな事だろうと思つた。辞表の事はいざとなるまでそのまま

にしておいても差支えあるまいとの話だつたから、山嵐の云う通りにした。どうも山嵐の方がおれよりも利巧らしいから万事山嵐の忠告に従う事にした。

山嵐はいよいよ辞表を出して、職員一同に告別の挨拶をして浜の港屋まで下つたが、人に知れないように引き返して、温泉の町の舟屋の表二階へ潜んで、障子へ穴を開けて覗き出した。これを知つてゐるものはおればかりだろう。赤シャツが忍んで来ればどうせ夜だ。しかも宵の口は生徒やその他の目があるから、少なくとも九時過ぎに極つてる。最初の一晩はおれも十一時

頃まで張番はりばんをしたが、赤シャツの影かげも見えない。三日目には九時から十時半まで覗いたがやはり駄目だ。駄目を踏んで夜なかに下宿へ帰るほど馬鹿氣た事はない。四五日すると、うちの婆さんおくばあさんが少々、心配を始めて、奥さんのおあるのに、夜遊びはおやめたがええぞなもしと忠告した。そんな夜遊びとは夜遊びが違う。こつちのは天に代つて誅戮ちゆうりくを加える夜遊びだ。とはいもの一週間も通つて、少しも験げんが見えないと、いやになるもんだ。おれは性急な性分だから、熱心になると徹夜てつやでもして仕事をするが、その代り何によらず長持

ちのした試しがない。いかに天誅党でも飽きる事に変りはない。六日目には少々いやになつて、七日目にはもう休もうかと思つた。そこへ行くと山嵐は頑固なもんだ。宵から十二時過ぎまでは眼を障子へつけて、角屋の丸ぼやの瓦斯燈の下を睨めつきりである。おれが行くと今日は何人客があつて、泊りが何人、女が何人といろいろな統計を示すのには驚ろいた。どうも来ないようじやないかと云うと、うん、たしかに来るはずだがと時々腕組をして溜息をつく。可愛想に、もし赤シャツがここへ一度来てくれなければ、山嵐は、生涯天誅

を加える事は出来ないのである。

八日目には七時頃から下宿を出て、まずゆるりと湯に入つて、それから町で鶏卵けいらんを八つ買つた。これは下宿の婆さんの芋責いもせめに応ずる策である。その玉子を四つずつ左右の袂たもとへ入れて、例の赤手拭あかてぬぐいを肩かたへ乗せて、懷手ふところをしながら、枡屋ますやの楷子段はしごだんを登つて山嵐の座敷ざしきの障子を開けると、おい有望有望と韋駄天いだてんのような顔は急に活氣ていを呈した。昨夜ゆうべまでは少し塞ふさぎの気味で、はたで見ているおれさえ、陰氣臭いんきくさいと思つたくらいだが、この顔色を見たら、おれも急にうれしくなつて、何も

聞かない先から、愉快愉快と云つた。

ゆかい

ゆかい

「今夜七時半頃あの小鈴こすずと云う芸者が角屋へはいつた
「赤シャツといつしょか」

「いいや」

「それじや駄目だ」

「芸者は二人づれだが、——どうも有望らしい」

「どうして」

「どうしてつて、ああ云う狡するい奴だから、芸者を先へ
よこして、後から忍んでくるかも知れない」
「そうかも知れない。もう九時だろう」

「今九時十二分ばかりだ」と帯の間から二ツケル製の時計を出して見ながら云つたが「おい洋燈を消せ、障子へ二つ坊主頭が写つてはおかしい。狐きつねはすぐ疑ぐるから」

おれは一貫張いつかんぱりの机の上にあつた置き洋燈らんぶをふつと吹きけした。星明りで障子だけは少々あかるい。月はまだ出ていない。おれと山嵐は一生懸命いっしょうけんめいに障子へ面かおをつけて、息を凝こらしている。チーンと九時半の柱時計が鳴つた。

「おい来るだろうかな。今夜来なければ僕はもう厭いやだ

ぜ

「おれは錢のつづく限りやるんだ」

「錢つていくらあるんだい」

「今日までで八日分五円六十錢払つた。いつ飛び出して
ても都合のいいように毎晚勘定するんだ」

「それは手廻しがいい。宿屋で驚いてるだろう」

「宿屋はいいが、気が放せないから困る」

「その代り昼寝をするだろう」

「昼寝はするが、外出が出来ないんで窮屈でたまらな
い」

「天誅も骨が折れるな。これで天網恢々 てんもうかいかいそ 疎にして

洩らしちまつたり、何かしちゃ、つまらないぜ」
 「なに今夜はきつとくるよ。——おい見ろ見ろ」と小
 声になつたから、おれは思わずどきりとした。黒い
 帽子を戴いた男が、角屋の瓦斯燈を下から見上げたま
 ま暗い方へ通り過ぎた。違つてゐる。おやおやと思つ
 た。そのうち帳場の時計が遠慮なく十時を打つた。今
 夜もどうどう駄目らしい。

世間は大分静かになつた。遊廓で鳴らす太鼓が手に
 取るように聞える。月が温泉の山の後からのつと顔を

出した。往来はあかるい。すると、下の方から人声が聞えだした。窓から首を出す訳には行かないから、姿を突き留める事は出来ないが、だんだん近づいて来る模様だ。からんからんと駒下駄を引き擦る音がする。眼を斜めにするとやつと二人の影法師が見えるくらいに近づいた。

「もう大丈夫ですね。邪魔ものは追つ払つたから」正しく野だの声である。「強がるばかりで策がないから、仕様がない」これは赤シャツだ。「あの男もべらんめえに似ていますね。あのべらんめえと来たら、勇み肌はだ

の坊ぼつちやんだから愛嬌あいきょうがありますよ」「増給がいやだの辞表を出したいのつて、ありやどうしても神経に異状があるに相違ない」おれは窓を開けて、二階から飛び下りて、思う様打ちのめしてやろうと思ったが、やつとの事で辛防しんぼうした。一人はハハハハと笑いながら、瓦斯燈の下を潜くぐつて、角屋の中へはいった。

「おい」

「来たぜ」

「どうどう來た」

「これでようやく安心した」

「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊っちゃんだと抜ぬかしやがった」

「邪魔物と云うのは、おれの事だぜ。失敬千万な」

おれと山嵐は一人の帰路を要擊ようげきしなければならぬ。しかし二人はいつ出てくるか見当がつかない。山嵐は下へ行つて今夜ことによると夜中に用事があつて出るかも知れないから、出られるようにしておいてくれと頼んで来た。今思うと、よく宿のものが承知したものだ。大抵なら泥棒どろぼうと間違えられるところだ。

赤シャツの来るのを待ち受けたのはつらかったが、
出て来るのをじつとして待つてるのはなおつらい。寝
る訳には行かないし、始終障子の隙すきから睨めているの
もつらいし、どうも、こうも心が落ちつかなくって、
これほど難儀なんぎな思いをした事はいまだにない。いつそ
の事角屋へ踏み込んで現場を取つて抑えようと發議ほつきし
たが、山嵐は一言にして、おれの申し出を斥けた。自
分共が今時分飛び込んだつて、乱暴者だと云つて途中とちゆう
で遮られる。訳を話して面会を求めれば居ないと逃げ
るか別室へ案内をする。不用意のところへ踏みに入る

と仮定したところで何十もある座敷のどこに居るか分るものではない、退屈でも出るのを待つより外に策はない」と云うから、ようやくの事でとうとう朝の五時まで我慢した。

角屋から出る二人の影を見るや否や、おれと山嵐はすぐあとを尾^つけた。一番汽車はまだないから、二人とも城下まであるかなればならない。温泉の町をはずれると一丁ばかりの杉並木があつて左右は田圃^{たんぼ}になる。それを通りこすとここかしこに藁葺^{わらぶき}があつて、畠^{はたけ}の中を一筋に城下まで通る土手へ出る。町さえはずれ

れば、どこで追いついても構わないが、なるべくなら、人家のない、杉並木で捕まえてやろうと、見えがくれについて来た。町を外れると急に駆け足の姿勢で、はやてのように後ろから、追いついた。何が来たかと驚ろいて振り向く奴を待てと云つて肩に手をかけた。野だは狼狽ろうぱいの氣味で逃げ出そうという景色けしきだつたから、おれが前へ廻つて行手を塞ふさいでしまつた。

「教頭の職を持つてるものが何で角屋へ行つて泊とまつた」と山嵐はすぐ詰りかけた。

「教頭は角屋へ泊つて悪いという規則がありますか」

と赤シャツは依然として鄭寧な言葉を使つてゐる。顔の色は少々蒼い。

「取締上不都合だから、蕎麦屋や団子屋へさえはいつてはいかんと、云うくらい謹直な人が、なぜ芸者といつしょに宿屋へとまり込んだ」野だは隙を見ては逃げ出そうとするからおれはすぐ前に立ち塞がつて「べらんめえの坊っちゃんた何だ」と怒鳴り付けたら、「いえ君の事を云つたんじゃないんです、全くないんですけど鉄面皮に言訳がましい事をぬかした。おれはこの時気がついてみたら、両手で自分の袂を握つてゐる。追つ

かける時に袂の中の卵がぶらぶらして困るから、両手で握りながら来たのである。おれはいきなり袂へ手を入れて、玉子を二つ取り出して、やつと云いながら、野だの面へ擲きつけた。玉子がぐちゃりと割れて鼻の先から黄味がだらだら流れだした。野だはよつぽど仰天した者と見えて、わつと言ひながら、尻持しりもちをついて、助けてくれと云つた。おれは食うために玉子は買つたが、打つけるために袂へ入れてる訳ではない。ただ肝癪かんしゃくのあまりに、ついぶつけるともなしに打つけてしまつたのだ。しかし野だが尻持を突いたところを見て

始めて、おれの成功した事に気がついたから、こん畜生ちくしょう、こん畜生と云いながら残る六つを無茶苦茶に擲たたきつけたら、野だは顔中黄色になつた。

おれが玉子をたきつけているうち、山嵐と赤シャツはまだ談判最中である。

「芸者をつれて僕が宿屋へ泊つたと云う証拠しょうこがありますか」

「宵に貴様のなじみの芸者が角屋へはいったのを見て云う事だ。胡魔化せるものか」

「胡魔化す必要はない。僕は吉川君と一人で泊つたの

である。芸者が宵にはいろいろが、はいるまいが、僕の
知つた事ではない」

「だまれ」と山嵐は拳骨けんこつを食わした。赤シャツはよろ
よろしたが、「これは乱暴だ、狼藉ろうぜきである。理非を弁じ
ないで腕力に訴えるのは無法だ」

「無法でたくさんだ」とまたばかりと撲なぐる。「貴様の
ような奸物はなぐらなくつちや、答えないんだ」とぽ
かぽかなぐる。おれも同時に野だを散々に擲き据えた。
しまいには二人とも杉の根方にうずくまつて動けない
のか、眼がちらちらするのか逃げようともしない。

「もうたくさんか、たくさんでなけりや、まだ撲つてやる」とぽかんぽかんと両人^{ふたり}でなぐつたら「もうたくさんだ」と云つた。野だに「貴様もたくさんか」と聞いたら「無論たくさんだ」と答えた。

「貴様等は奸物だから、こうやつて天誅を加えるんだ。これに懲りて以来つつしむがいい。いくら言葉巧みに弁解が立つても正義は許さんぞ」と山嵐が云つたら兩人共だまつていた。ことによると口をきくのが退儀^{たいぎ}なのかも知れない。

「おれは逃げも隠れもせん。今夜五時までは浜の港屋^{かく}

に居る。用があるなら巡査じゅんさなりなんなり、よこせ」と山嵐が云うから、おれも「おれも逃げも隠れもしないぞ。堀田と同じ所に待つてから警察へ訴うつたえなければ、勝手に訴えろ」と云つて、二人してすたすたあるき出した。

おれが下宿へ帰ったのは七時少し前である。部屋へはいるとすぐ荷作りを始めたら、婆さんが驚いて、どうおしるのぞなもしと聞いた。お婆さん、東京へ行つて奥さんを連れてくるんだと答えて勘定を済まして、すぐ汽車へ乗つて浜へ来て港屋へ着くと、山嵐は二階

で寝ていた。おれは早速辞表を書こうと思つたが、何と書いていいか分らないから、私儀都合有之^{わたくしきこれあり}之辭職の上東京へ^{あて}帰り申候^{もうしそろ}につき左様御承知被下度候以上とかいて校長宛にして郵便で出した。

汽船は夜六時の出帆^{しゅつぱん}である。山嵐もおれも疲れて、ぐうぐう寝込んで眼が覚めたら、午後二時であつた。下女に巡査は来ないかと聞いたら参りませんと答えた。「赤シャツも野だも訴えなかつたなあ」と二人は大きに笑つた。

その夜おれと山嵐はこの不淨^{ふじょう}な地を離れた。^{はな}船が岸

を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、ようやく婆婆へ出たような気がした。山嵐とはすぐ分れたり今日まで逢う機会がない。

清の事を話すのを忘れていた。——おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革鞄かばんを提げたまま、清や帰つたよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰つて来て下さつたと涙なみだをぽたぽたと落した。おれもあまり嬉うれしかつたから、もう田舎いなかへは行かない、東京で清とうちを持つんだと云つた。

その後ある人の周旋で街鉄の技手になつた。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関付きの家でなくつても至極満足の様子であつたが氣の毒な事に今年の二月肺炎に罹つて死んでしまつた。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋めて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待つておりますと云つた。だから清の墓は小日向の養源寺にある。

(明治三十九年四月)

底本：「ちくま日本文学全集 夏目漱石」筑摩書房

1992（平成4）年1月20日第1刷発行

底本の親本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

※底本の注にれば、本作品の原稿には、「そのうち学校もいやになつた。」の後に、漱石自身による2字あけの指定があるという。このファイルでは、その情報にもどづいて、当該の箇所を2字あけとした。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5—86）を、大振りにつくっています。

入力..真先芳秋

校正..柳沢成雄

1999年9月13日公開

2004年2月27日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、
校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんで
す。